西三荘・八雲東遺跡
発掘調査概要

1993·12

ごあいさつ

平成元年１月、松下電工株式会社第二別館建設予定地の試掘調査で遺跡が発見されました。この遺跡は、門真市大字門真及び守口市八雲東町にまたがるため、門真市側を西三荘遺跡、守口市側を八雲東遺跡とし、合わせて「西三荘・八雲東遺跡」と命名しました。

発掘調査は、両市教育委員会が合同で、同年２月から４月にかけて、約2,400 m²を対象に行いました。遺構は、中世層の上層に土壙を検出しただけですが、遺物は、縄文時代後期の深鉢と浅鉢の破片が出土し、縄文土器としては、門真市では初めて、守口市でも淀川の河川敷の八雲遺跡での発見に次ぐものです。

また、慶長元年(1596)の伏見地震跡と推定される、液状化した層と噴砂の跡が明瞭に残っており、地震の考古学的な確認ができるなど、大きな成果を得ました。

今回の発掘調査並びに「西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要」の発刊に際しましては、原因者・松下電工株式会社をはじめ関係各位、調査に参加された方々に深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護に関して一層のご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成５年12月

門真市教育委員会

教育長　中谷　決

守口市教育委員会

教育長　西海　牧男

例　　言

1．本書は大阪府門真市大字門真1048番地、守口市八雲東町１丁目96番地所在の「西三荘遺跡」、「八雲東遺跡」の発掘調査概要報告書です。

2．調査にあたっては、松下電工株式会社に多大な協力を得ました。

3．現地調査は、門真市教育委員会社会教育課宇治原靖泰・守口市教育委員会社会教育課植田正幸が担当し、平成元年２月１日に着手し、同年４月28日に終了しました。

4．本書の編集は、門真市教育委員会・守口市教育委員会が合同で行いました。

5．調査・整理には、寺町節生・笠原勝彦・中橋逸子・寺西邦子・木嶋澄子・木嶋貴晴・高橋博司・北口省三・入江伸幸・吉田聡・渡部亜紀子・吉田容子・加藤久美子・三木英樹・植田貴史・塩坂英代・松川容子の協力を得ました。

6．地震の液状化跡については、通商産業省工業技術院地質調査所主任研究官　寒川　旭氏に調査ならびに貴重な原稿を賜りました。

7．調査・整理にあたり、梶山　彦太郎・寒川　旭の両氏より、指導・助言を得ました。

ここに記して感謝の意を表します。

なお、本書は松下電工株式会社が発行しました。

本　文　目　次

第１章　調査の経過――――――――――――――――――――――――――――――――1
第２章　位置と環境――――――――――――――――――――――――――――――――2
第３章　調査の概要――――――――――――――――――――――――――――――――4
　第１節　地層――――――――――――――――――――――――――――――――――4
　第２節　遺構――――――――――――――――――――――――――――――――――4
　第３節　遺物――――――――――――――――――――――――――――――――――4
まとめにかえて――――――――――――――――――――――――――――――――――14
西三荘・八雲東遺跡で検出された地震の液状化跡――――――――――――――――――38

挿　図　目　次

図１　調査地位置図――――――――――――――――――――――――――――――――1
図２　守口・門真市遺跡分布図――――――――――――――――――――――――――3
図３　西三荘・八雲東遺跡基本層序――――――――――――――――――――――――4
図４　調査地平面図――――――――――――――――――――――――――――――――15
図５　土壙１　平面図――――――――――――――――――――――――――――――15
図６　土壙１　出土遺物（土師皿）――――――――――――――――――――――――15
図７　土壙１　出土遺物（卒塔婆）――――――――――――――――――――――――15
図８　第３・４層出土遺物（縄文・弥生土器）――――――――――――――――――15
図９　第３・４層出土遺物（弥生土器）――――――――――――――――――――――20
図10　第３・４層出土遺物（須恵器）――――――――――――――――――――――――21
図11　第３・４層出土遺物（土師皿）――――――――――――――――――――――――22
図12　第３・４層出土遺物（土師皿）――――――――――――――――――――――――23
図13　第３・４層出土遺物（土師皿・瓦器皿）――――――――――――――――――――24
図14　第３・４層出土遺物（瓦器皿）――――――――――――――――――――――――25
図15　第３・４層出土遺物（瓦器皿・瓦器椀）――――――――――――――――――――26
図16　第３・４層出土遺物（瓦器椀）――――――――――――――――――――――――27
図17　第３・４層出土遺物（瓦器椀）――――――――――――――――――――――――28
図18　第３・４層出土遺物（瓦器椀）――――――――――――――――――――――――29
図19　第３・４層出土遺物（瓦器椀）――――――――――――――――――――――――30
図20　第３・４層出土遺物（瓦器椀）――――――――――――――――――――――――31

図21　第３・４層出土遺物（瓦器埦）----------32
図22　第３・４層出土遺物（瓦器埦）----------33
図23　第３・４層出土遺物（瓦器埦）----------34
図24　第３・４層出土遺物（鉄製品）----------35
図25　第３・４層出土遺物（鉄製品）----------36
図26　第３・４層出土遺物（土錘・砥石）----------37

表　目　次

表１　土壙１　出土土器観察表----------5
表２　土師皿の口径----------10
表３　瓦器埦の器高指数----------12

図　版　目　次

図版１　（上）調査前の状況（西から）　（下）調査地全景（西から）
図版２　（上）土壙１　遺物出土状況　（下）土壙１　完掘状況
図版３　（上）土壙１　柿経(59)出土状況　（下）土壙１　卒塔婆出土状況
図版４　（上）縄文土器出土状況　（下）弥生土器出土状況
図版５　（上）弥生土器出土状況　（下）弥生土器出土状況
図版６　（上）土師皿出土状況　（下）土師皿出土状況
図版７　（上）瓦器埦出土状況　（下）土師皿出土状況
図版８　（上）スプーン状木製品出土状況　（下）木製品（槌の子）出土状況
図版９　（上）鉄製品（鉄鏃）出土状況　（下）鉄製品（短刀）出土状況
図版10　（上）鉄製品（やす）出土状況　（下）獣骨出土状況
図版11　土壙１　出土遺物（土師皿）
図版12　土壙１　出土遺物（土師皿）
図版13　土壙１　出土遺物（土師皿）
図版14　土壙１　出土遺物（土師皿）　第３・第４層出土遺物（縄文・弥生土器）
図版15　第３・第４層出土遺物（弥生土器）
図版16　第３・第４層出土遺物（弥生土器）
図版17　第３・第４層出土遺物（弥生土器）

図版18　第３・第４層出土遺物（須恵器）
図版19　第３・第４層出土遺物（須恵器（上）、土錘）
図版20　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版21　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版22　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版23　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版24　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版25　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版26　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版27　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版28　第３・第４層出土遺物（土師皿）
図版29　第３・第４層出土遺物（瓦器皿）
図版30　第３・第４層出土遺物（瓦器皿）
図版31　第３・第４層出土遺物（瓦器皿）
図版32　第３・第４層出土遺物（瓦器皿）
図版33　第３・第４層出土遺物（瓦器皿）
図版34　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版35　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版36　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版37　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版38　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版39　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版40　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版41　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版42　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版43　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版44　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版45　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版46　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版47　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版48　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版49　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版50　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）
図版51　第３・第４層出土遺物（瓦器椀）

図版52　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版53　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版54　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版55　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版56　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版57　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版58　第３・第４層出土遺物（瓦器埦）
図版59　第３・第４層出土遺物（陶磁器・土師器・瓦器・石器）
図版60　（上）第３・第４層出土遺物（砥石）　（下）第２層出土遺物（近世陶磁器）
図版61　第３・第４層出土遺物（鉄製品）
図版62　第３・第４層出土遺物（鉄製品）

第１章　調査の経過

西三荘・八雲東遺跡は、平成元年１月に門真市大字門真1048番地の松下電工株式会社内で、事務所ビルの建設が予定されたため、試掘調査をしたところ、中世の土器が出土し、新たに遺跡であることを確認したものである。

遺跡の名称は、当該地が守口市と門真市にまたがるため、守口市域は「八雲東遺跡」、門真市域は「西三荘遺跡」となった。

遺跡の保護についての協議は、松下電工株式会社と守口市教育委員会、門真市教育委員会の三者で重ね、約2,400 m² を両市教育委員会が合同で発掘調査することとし、遺跡の名称も『西三荘・八雲東遺跡』で統一した。

盛土および耕土はバックホウで除去し、以後、人力で掘削した。現地での調査期間は平成元年２月１日～４月28日までである。

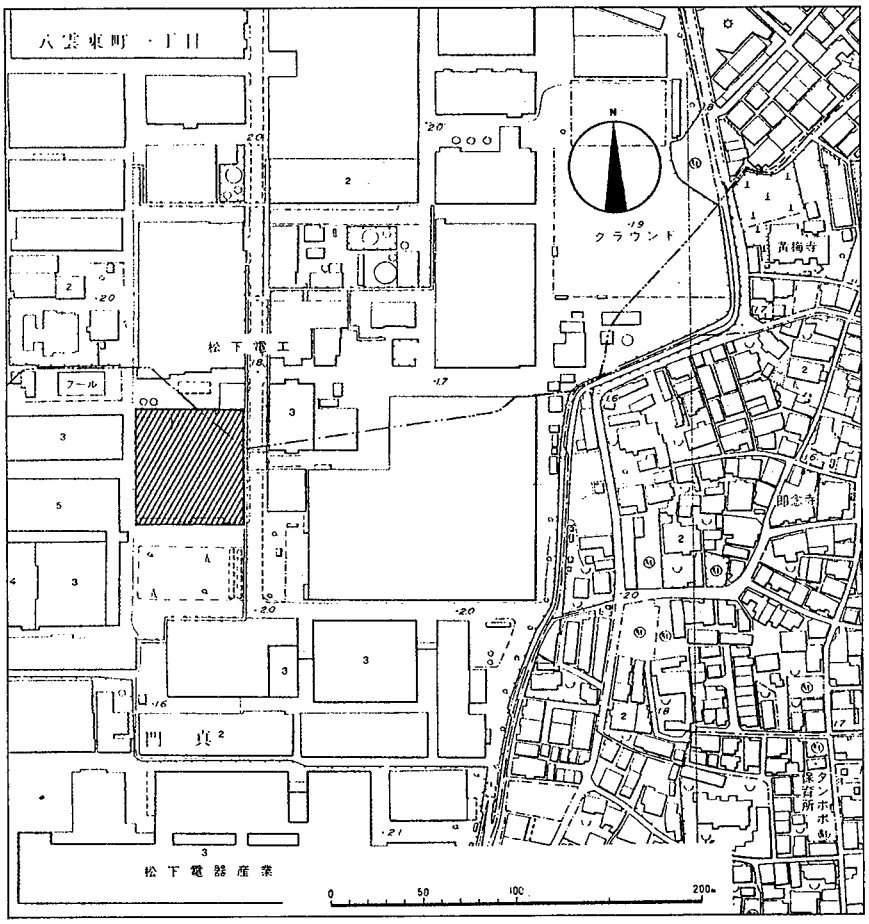


図１　調査地位置図

第２章　位置と環境

守口市・門真市は大阪府の東北部に位置し、生駒山系を東に望む淀川左岸の沖積地に市域を形成している。そのため海抜５m以下の土地が全域を占め、かつては湿地と水路が発達し、舟が重要な交通運搬の手段であった。現在は、それらの多くが埋められ、住宅・工場・道路等に替わり、景観は随分変わってきている。

守口市・門真市の位置する北河内地域は、古くから人々の生活が営まれてきたところである。守口市・門真市域でもかなり古い時期から、人々の活動の痕跡をたどることができる。

旧石器時代の資料は今のところ明らかにされていないが、枚方市楠葉東遺跡、交野市神宮寺遺跡、寝屋川市高宮遺跡、四条畷市更良岡山遺跡では有舌尖頭器やナイフ型石器が出土しており、山麓部にその足跡をたどることができる。

縄文時代は、温暖化による海面の上昇で（縄文海進）山麓部まで海水が入ってくる（河内湾）。両市は水域となり、ボーリングデータによると深いところは二、三十メートルの深さがあったようである。

その後、海水の後退と、淀川、大和川等の堆積作用で、後期頃には季節的な陸地（自然堤防）が守口・門真に現れていたようである。その頃の土器が淀川左岸べりの守口市八雲遺跡と本報告の西三荘・八雲東遺跡で出土している。

弥生時代は、「河内潟」と呼ばれる広大な潟湖周辺に多くの集落が形成され、北河内にも寝屋川市高宮八丁遺跡、四条畷市雁屋遺跡、大東市中垣内遺跡のような拠点的な集落が現われてくる。守口・門真市でも前期には普賢寺遺跡、古川遺跡、橋波西之町遺跡が出現し、中期以降になると、長池町遺跡、八雲遺跡、大和田遺跡と本遺跡が加わり賑やかになってくる。弥生時代の前期頃には、すでに淀川と河内潟との間に陸地が形成され、定住生活が始まっていたことが確認されている（普賢寺遺跡、古川遺跡）。そして中期には、３個の銅鐸が出土した大和田遺跡や、八雲北遺跡のように、玉造の集落があることも注目されるところである。

古墳時代の守口・門真は、６世紀初頭の形象埴輪が多数出土した梶遺跡の帆立貝式前方後円墳や、６世紀後半の大庭北遺跡の円墳のほか、普賢寺遺跡では円筒埴輪片が二か所で出土している。また、仁徳紀にみえる茨田堤と伝える堤防の跡が「伝茨田堤」として、大阪府の史跡に指定されている。

歴史時代にはいると、古代寺院としては奈良時代に行基が建立したと伝えられる守口市「高瀬廃寺」がある。寺院の建物跡は発見されていないが、奈良時代前期までさかのぼる複弁蓮華文軒丸瓦をはじめ、奈良時代の複弁蓮華文軒丸瓦等が出土している。

門真市橋波口遺跡では、奈良時代の甕棺墓と、平安時代に火を使う祭祀に使用したと考

えられる直径４ｍ、深さ１.２ｍの擂り鉢状の灰の詰まった大きな穴を検出し、穴の中からは完形の瓦器椀、土師器皿をはじめ、土師器甕・羽釜、桃の種等が大量に出土している。

また門真市普賢寺遺跡では、中世の寺院跡が発見され、銅製六器、柿経、絵馬、銅銭、刀子等のほか瓦が大量に出土している。遺物は室町時代が多いが、平安時代後期の剣頭文軒平瓦があり、未確認の建物跡とともに今後の調査が待たれるところである。

近世にはいると、守口には豊臣秀吉が築いた文禄堤や京街道の整備、守口の宿場、佐太陣屋が置かれ、現在もそれらの面影が残っている。しかし、ここで忘れてはならないものに宝永元年（1704）の大和川の付け替えがある。守口・門真の東から南にあった広大な深野池と新開池が大和川の付け替えで干上がり耕地となったことである。この工事により、縄文時代から続いた河内湖は七千年の歴史を閉じ、急速に開発が進んでいったのである。

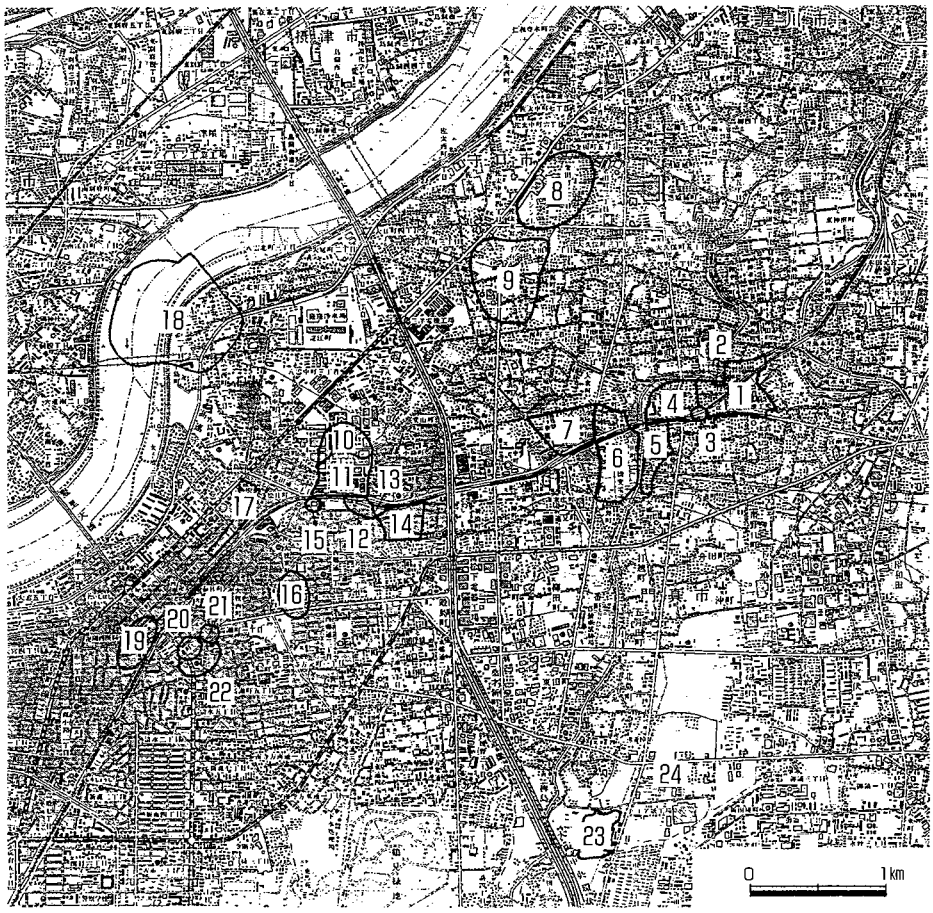


図２　守口・門真市遺跡分布図

第３章調査の概要

第１節　地層

本調査地においてみられる地層は下記の４層を基本層序としたが第３層と第４層は明瞭に分層できなかった。

第１層　盛土（松下電工建設時の造成土）
第２層　青灰色粘土（中世～近世包含層）
第３層　暗灰色粘土（中世包含層）
第４層　暗灰色砂　（縄文～中世包含層・洪水層）

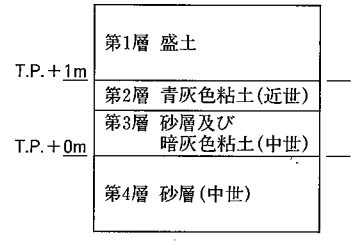


図３　西三荘・八雲東遺跡基本層位

第２節　遺構

調査の結果、近世以降は湿潤な土地で、中世以前は洪水による堆積物で覆われており、遺構として取り上げられるのは土壙１一つのみである。

土壙１（図５　図版２）

調査地中央よりやや北西によったところで検出した。楕円形を呈し、長径7.1 m，短径4.9 m、深さ0.7 mを測る。遺物は土師皿、青磁碗、卒塔婆、柿経等が出土した。卒塔婆の裏面に「応永十七年」(1410)の墨書の痕跡が判読でき、土器の年代とも矛盾しないと思われるので、土壙の年代は15世紀前半で、墓もしくは墓地に関連する遺構と考えられる。

第３節　遺物

遺物はコンテナに約150 箱出土したが、土壙１の遺物を除いて原位置を保ったものはなく、室町時代の洪水で遺跡が流されたようである。遺物の量で大半を占める第３、第４層からは、縄文時代から室町時代の遺物が出土している。

また、調査地が水分を多量に含んだ粘土と砂で覆われていたために、遺物の保存状態は良好で、摩耗もほとんど認められない。洪水により流されてはいるが、動いた距離はわずかと思われる。

土壙１出土遺物

土壙１から土師皿をはじめ、青磁碗、卒塔婆、柿経等が出土した。土師皿は観察表に示すが、口径7.1cm ～11.0cmまでのもので11cmを超すものはない。14～15世紀のものと思われる。

表１　土壌１　出土土器観察表(1)

番号	器種	器形	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	形態の特長	手法の特長	色調	胎土	備考
1	土師器	皿	8.5	1.5	・口縁端部は丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
2		皿	8.6	1.8	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
3		皿	8.1	2.0	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は外反して立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
4		皿	7.8	1.6	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
5		皿	7.8	1.6	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
6		皿	7.7	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
7		皿	7.7	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
8		皿	7.7	2.0	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
9		皿	7.9	1.9	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	
10		皿	7.9	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
11		皿	8.3	1.9	・口縁端部は丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
12		皿	8.1	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
13		皿	8.1	1.6	・口縁端部は丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	

表１　土壙１　出土土器観察表(2)

１４	土師器	皿	8.2	1.9	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・6 Y 8/2 灰白。	密	
１５		皿	7.1	1.7	・口縁端部は丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/3 淡黄。	密	
１６		皿	8.0	1.8	・口縁端部は丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・7.5 YR 8/2　灰白。	密	
１７		皿	8.1	1.8	・口縁端部は丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・7.5 YR 8/2　灰白。	密	
１８		皿	7.3	1.6	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
１９		皿	8.3	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
２０		皿	9.8	2.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	
２１		皿	10.4	2.2	・口縁端部は丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	・口縁端部外面にススが付着。
２２		皿	11.0	2.4	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	
２３		皿	10.4	2.3	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	
２４		皿	10.3	2.1	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	
２５		皿	10.5	2.0	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	
２６		皿	10.1	2.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・2.5 Y 8/3 淡黄。	密	
２７		皿	10.1	2.0	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・2 .5　Y 8/2 灰白。	密	・底部近くに穿孔。
２８		皿	10.3	2.4	・口縁端部は丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・2.5 Y 8/3 淡黄。	密	

表１　土壙１　出土土器観察表(3)

２９	土師器	皿	9.6	2.2	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/3 浅黄橙。	密	
３０		皿	10.3	2.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・10 YR 8/3 浅黄橙。	密	
３１		皿	10.5	2.3	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
３２		皿	10.2	2.0	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
３３		皿	10.5	2.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
３４		皿	10.8	2.6	・口縁端部は丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	
３５		皿	10.2	2.1	・口縁端部は丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
３６		皿	9.4	2.0	・口縁端部は丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
３７		皿	9.3	2.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部は外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
３８		皿	10.3	2.3	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
３９		皿	10.2	1.6	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
４０		皿	11.0	2.0	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
４１		皿	9.6	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部はヨコナデ。 ・底部内面はナデ、外面はヨコナデ。	・10 YR 8/2 灰白。	密	
４２		皿	8.0	1.7	・口縁端部は丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/1 灰白。	密	
４３		皿	8.3	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はヨコナデ。	・5 Y 8/1 灰白。	密	

表１　土壙１　出土土器観察表(4)

番号	器種	器形	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	形態の特長	手法の特長	色調	胎土	備考
44	土師器	皿	8.0	1.7	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/1 灰白。	密	
45		皿	8.3	1.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・5 Y 8/1 灰白。	密	
46		皿	8.3	1.9	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・5 Y 7/1 灰白。	密	
47		皿	8.4	1.6	・口縁部は内傾ぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5 Y 8/1 灰白。	密	
48		皿	8.2	1.8	・口縁端部は丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5 Y 8/1 灰白。	密	・外面の一部に朱彩が残る。
49		皿	8.3	1.6	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・2 .5 Y 8/1 灰白。	密	
50		皿	8.0	1.4	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部内面はナデ。	・2 .5 Y 8/1 灰白。	密	
51		皿	8.4	1.8	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・やや凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・5 Y 8/1 灰白。	密	
52		皿	10.2	2.1	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・10 YR 8/1 灰白。	密	
53		皿	10.3	2.1	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・わずかに凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ、外面はナデ。 ・底部はナデ。	・7.5 Y 7/1 灰白。	密	
54		皿	7.3	1.5	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・凹む底部から、体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/2 灰白。	密	・底部近くに穿孔。
55		皿	8.4	1.7	・口縁端部は丸くおさめる。 ・体部は直線的に立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・2.5 Y 8/3 淡黄。	密	・底部近くに穿孔。
56		皿	8.2	1.9	・口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。 ・体部はやや外反しながら立ち上がる。	・口縁部はヨコナデ。 ・体部内面はヨコナデ。 ・底部内面はナデ。	・5 Y 8/2 灰白。	密	・底部近くに穿孔。

卒塔婆(57)は全長約100cm 、幅６cm、厚さ0.5cm 、頂部に五輪塔を刻み、表裏とも墨書の痕跡が残る。表面は、五輪塔部分の各輪に梵字で、地輪から　ア・ビ・ラ・ウン・ケン　観世音　種種悪種　［地］［獄］［鬼］畜生　生老死苦　以漸悉令滅[1]　□基□□□□□［と記し、裏面は、五輪塔部分に梵字で　バン、應永十七年□［　と記す。卒塔婆はもう一点(58)が出土し、墨書の痕跡が認められ、梵字とその下に文字が記されているが、ほとんど判読できない。

柿経(59)は表面に「妙法蓮華経随喜功徳品第十八」と墨書している。

註(1)　『妙法蓮華経巻第八　観世音菩薩普門品第二十五』に「種種諸悪種　地獄鬼畜生　生老病死苦　以漸悉令滅」がみえる。

第３・４層出土遺物

縄文時代後期から室町時代の遺物が含まれていた。洪水により遺跡が押し流されたと考えられ、使用された時期の異なる遺物が混ざりあった状態で出土した。しかし動いた距離はわずかと思われ、摩耗はほとんど見受けられなかった。

縄文土器（1･2 ）

縄文土器は破片が２点出土した。いずれも後期のもので、北白川上層式Ⅲ期と考えられる。(1) は縁帯文土器の深鉢で、磨消縄文を施す。外面には残存する口縁から体部にかけススが付着している。(2) は無文の浅鉢である。いずれも保存状態は良好で、摩耗は認められない。

弥生土器　（3 ～27）

弥生土器はコンテナに２箱分出土した。時期は中期初頭から後期（第Ⅱ～第Ⅴ様式）を確認したが、前期（第Ⅰ様式）の土器が含まれているかもしれない。形態としては、壷・甕・高坏・蓋がある。保存状態は良好で、摩耗のある土器は少ない。

須恵器　（28～36）

須恵器はコンテナに３箱分出土したが、擂鉢・ねり鉢が大多数を占める。壷（31）やこね鉢の出土は少ない。擂鉢・ねり鉢（32･33 ）は播磨地方東部で生産されたものと想定される。こね鉢には内面が高温により変色しているもの（34･36 ）、底部に籾の圧痕が残るもの（34）がある。擂鉢・ねり鉢は糸切底である。古墳・奈良時代の瑳・坏(28･29･30)も量は少ないが出土している。

土師皿　（37～196 ）

土師皿は多数（コンテナ14箱分）出土した。平安時代から室町時代のものが含まれていると思うが、土壙１との関係からこれらの下限は14世紀末から15世紀初頭までと考えたい。　なお用途のわかるものとして、灯明皿(97･102)や燭台(182) がある。　口径７cm足らずのものから15cm近くのものがみられ、年代幅も相当あると思うが、洪水層からの出土

で層位的に発掘されたものでなく、セット関係もわからないので、口径を5㎜ごとに区切り、下表に示した。

表2　土師皿の口径

口径(cm)	個数	番　　号	口径(cm)	個数	番　　号
6.6~7.0	1	1	9.6~10.0	11	113・114・115・116・117・118
7.1~7.5	5	2・3・4・5・6			119・120・121・122・123
7.6~8.0	37	7・8・9・10・11・12・13・14	10.1~10.5	14	124・125・126・127・128・129
		15・16・17・18・19・20・21			130・131・132・133・134・135
		22・23・24・25・26・27・28			136・137
		29・30・31・32・33・34・35	10.6~11.0	5	138・139・140・141・142
		36・37・38・39・40・41・42	11.1~11.5	0	
		43	11.6~12.0	1	143
8.1~8.5	30	44・45・46・47・48・49・50	12.1~12.5	2	144・145
		51・52・53・54・55・56・57	12.6~13.0	0	
		58・59・60・61・62・63・64	13.1~13.5	2	146・147
		65・66・67・68・69・70・71	13.6~14.0	4	148・149・150・151
		62・63・64・65・66・67・68	14.1~14.5	5	152・153・154・155・156
		69・70・71・72・73	14.6~15.0	4	157・158・159・160
8.6~9.0	19	74・75・76・77・78・79・80			
		81・82・83・84・85・86・87			
		88・89・90・91・92			
9.1~9.5	20	93・94・95・96・97・98・99			
		100・101・102・103・104			
		105・106・107・108・109			
		110・111・112			

黒色土器

細片ばかり数十点出土した。内面に炭素を吸着させたもの（黒色土器Ａ）と、内外面とも炭素を吸着させたもの（黒色土器Ｂ）とがある。黒色土器Ｂは内外面ともていねいなヘラミガキ（暗文）を施し、口縁端部内面に沈線がみられる。

瓦器　（197 ～323 ）

瓦器は多数（コンテナ15箱分）出土し、埦と皿がみられる。埦の形態としては、器高が高く高い高台をもつものから、器高が低く形ばかりの高台がつくものまでみられるが、数量としては、器高がやや低くなり、高台の断面が三角形を呈し、内面のヘラミガキ（暗文）、（以下「暗文」）が粗雑になり、外面の暗文が申し訳程度施されるか、なくなるものが多い。口縁内面に一条の沈線をめぐらし、口縁が内湾ぎみの「楠葉型」（胎土がより精良で暗文が緻密な個体は「大和型」かもしれない）と、沈線を施さず、口縁が外反ぎみの和泉型がみられるが、「和泉型」が多く「楠葉型」は時期が限定され量も少ない。

皿は内外面とも暗文を施すもの、内面のみ暗文を施すもの、暗文を施さないものに分類できるが、時期差なのか産地の違いなのかわからない。(222)は皿より小型の椀としたほうがいいかもしれない。(199) は灯明皿の可能性がある。

瓦器は見込の暗文を施した後、内面を磨くものが圧倒的に多いが、内面の暗文を施した後に見込の暗文を施したもの(197･210･216･271･292･293) がある。

見込と内外面の暗文を別の原体で施したのではないかと思われるもの(203･241･249･250･259･265･268･271･275･276･285･303･306･307･320) があるが、土器の粘土が柔らかいときと固まった後では、同じ原体でもずい分異なったものになるので、時間の経過を示していることも含んでおかなければならない。

また、見込に高台の跡のあるもの(259･261･297･309) がある。これは暗文を施した後、一時重ね積してあったことを示している。

陶磁器　（図版59）

コンテナ１箱分の中国産磁器と国産陶器が出土しているが、国産のものは平安時代後期と考えられる常滑焼の壷１点のみである。

中国産磁器は、12～14世紀頃のものと考えられ、青磁・白磁・青白磁の碗・皿・合子等がみられる。

羽釜ミニチュア（324 ）

土師質で口径6.2 cmを測る。実用品とは考えられず祭祀に使用したものと思われる。

鞴の羽口

破片が２点出土した。いずれも先端部分で、高熱を受け赤褐色に変色し、一部鉱滓も付着している。

表３　瓦器埦の器高指数

器高	数量	掲　載　番　号	器高	数量	掲　載　番　号
２０	1	225	３４	２１	266･267･268･269･270･271･272･273
２１	0				274･275･276･277･278･279･280･281
２２	1	226			282･283･284･285･286
２３	2	227･228	３５	１４	287･288･289･290･291･292･293･294
２４	0				295･296･297･298･299･300
２５	7	229･230･231･232･233･234･235	３６	１４	301･302･303･304･305･306･307･308
２６	0				309･310･311･312･313･314
２７	1	236	３７	4	315･316･317･318
２８	4	237･238･239･240	３８	3	319･320･321
２９	4	241･242･243･244	３９	1	322
３０	2	245･246	４０	0	
３１	3	247･248･249	４１	1	323
３２	9	250･251･252･253･254･255 256			
		257･258			
３３	7	259･260･261･262･263･264･265			

金属製品

鉄鏃

合計 5本出土した。（335 ）は雁股系の鏃で、全長約18.2cm、刃幅2.0cm 、茎部の長さ9.3cm を測る。（336 ）は平根系の鏃で、全長20.0cm、刃幅0.9cm 、茎部の長さ8.8cm を測る。（337 ）は平根系の鏃で、全長18.8cm、刃幅1.1cm 、茎部の長さ7.7cm を測る。（338 ）は平根系の鏃で、全長約17.0cm、刃幅0.6cm 、茎部の長さ約 7.9cmを測る。（339 ）は尖根系の鏃で、全長16.6cm、刃幅0.9cm 、茎部の長さ約 7.9cmを測る。黒漆塗の矢柄が一部残存する。

これらの鏃は鋭利に鍛造され、保存状態は極めて良好で、錆による変形はみられない。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。

短刀（340 ）

切先と茎の一部を欠失するが、ほぼ完存する。平造りで長さ約23cm、茎の長さ7.3cm を測る。反りはなく、目釘穴は１個。全体に錆びてはいるが、保存状態は良好である。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。

やす

合計３本出土した。それぞれ別個体で、いずれも２～３本を柄に付けて使用したものと考えられる。（341 ）以外茎の部分を欠失する。

（341 ）は全長30.1cm、茎の長さ 10.5cm 、（342 ）は残存長 17.7cm 、（343 ）は残存長 17.5cm を測る。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。保存状態は極めて良好である。

鍵（344 ）

Ｌ字形を呈し尖端部を内側に曲げた鉄製品で、鍵と考えられる。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。保存状態は極めて良好である。

鉄斧（345 ）

幅5.0cm の鉄斧である。金属の切断等に使用していたのだろうか、上から強い打撃を受けたとみえ、柄のはいる部分で変形し折れている。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。保存状態は極めて良好である。

刀子（346 ）

全長12cm前後、刃の長さ9.5cm 程と推定される。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。全体に錆が著しい。

鎌（347 ）

刃の長さ13.7cm、刃の幅4.0cm 、茎の長さ7.7cm で、茎の尖端部が内側に曲がる。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。全体に錆が著しい。

馬鍬の歯

合計３本出土した。（349 ）は全長16.6cm、先端部に使用痕が認められる。（348 ）は全長15.7cm、使用痕は確認していない。（350 ）はやや形態が異なり、全長12.0cm、使用によるとみられる変形がある。15世紀初頭までに製作されたものと考えられる。保存状態は極めて良好である。

輸入銅銭

皇宋通寶（1039年）、祥符通寶(1008 年）が出土している。保存状態は極めて良好である。

石製品

石槍と、サヌカイトの剥片(図版59）が出土した。いずれも弥生時代のものと考えられる。

その他、砥石（351 ～355)の破片が５点出土した。いずれも凝灰岩製で、15世紀初頭までに使用されていたものと考えられる。

まとめにかえて

西三荘・八雲東遺跡は新発見の遺跡であるが、この調査により遺跡の性格が、断片的にだが、明らかになってきた。

遺跡の始まりは縄文時代で、後期（約3,500 年前）には、人間が活動可能な季節的な陸地が河内湾と淀川の間にできていたことが考えられる。

弥生時代は、各時期の土器が出土し、遺物の量も多くなっているので、定住が可能となり集落が形成されていたと考えられる。

古墳・奈良・平安時代は、遺物の量が少なくなっているので、集落が縮小したか、移転したことが考えられる。

平安時代後期から遺物の量が増えはじめ、鎌倉・室町時代の遺物は、土器、木製品、鉄製品、輸入陶磁、獣骨（馬・鹿）など相当な量が出土しているので、集落は発展し、馬の飼育や鉄製品の生産も行われていたことが考えられる。

室町時代(15 世紀初頭まで）に洪水のために集落が流され、その時各時代の遺物が混ざり、再堆積したものと思われる。

15世紀前半には墓地となったようだが、短期間で終っている。地震の後、江戸時代以降は湿地となったようである。

以上が本調査の概要であるが、調査地近くには集落跡が極めて良好な状態で埋まっていることが考えられ、場合によっては、縄文時代の遺構が発見されるかもしれない。今後の調査が期待される。

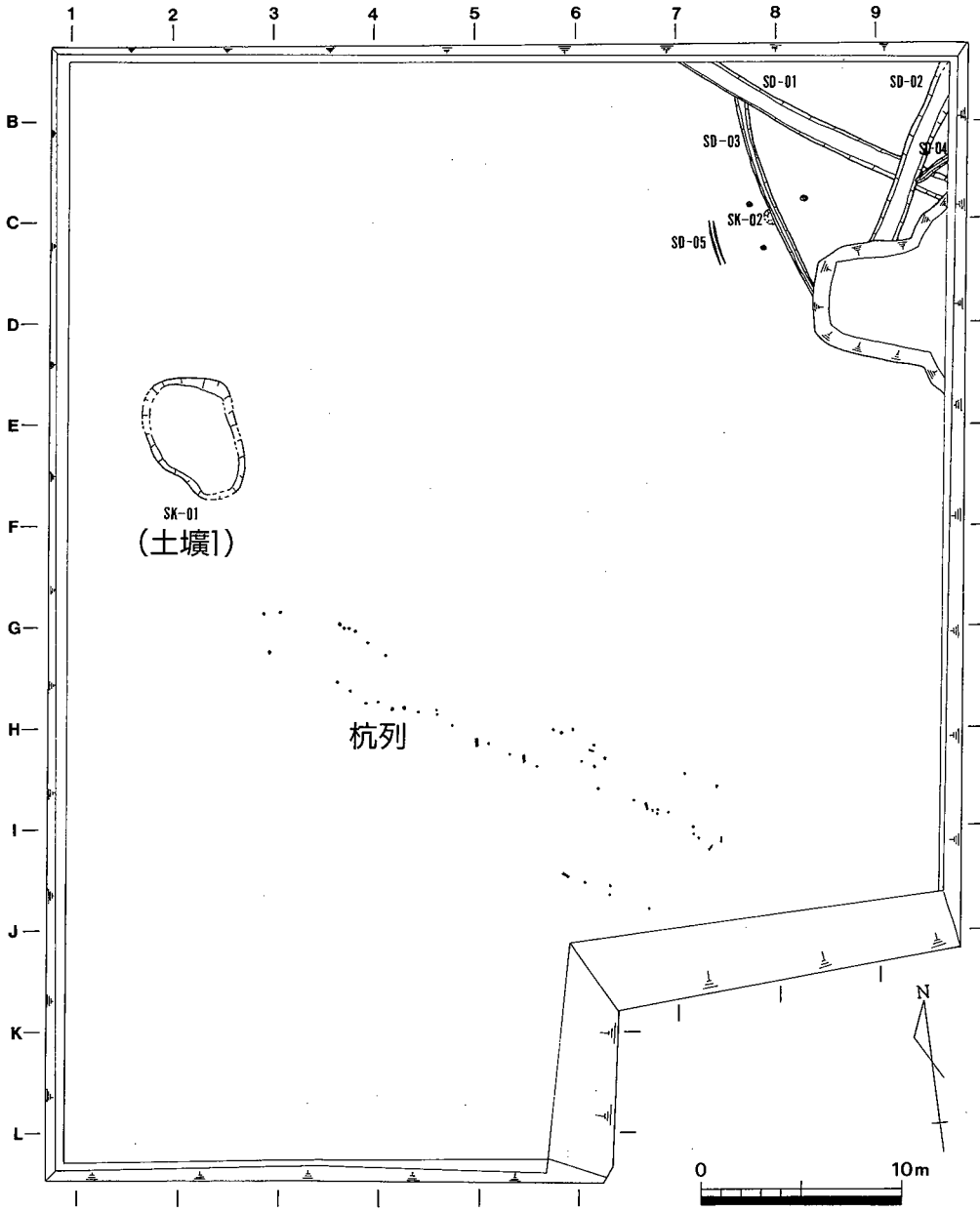

1
2
3
4
5
6
7
8
9
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
SD-01
SD-02
SD-03
SD-04
SD-05
SK-02
SK-01
(土壙1)
杭列
N
0
10m

図4　調査地平面図

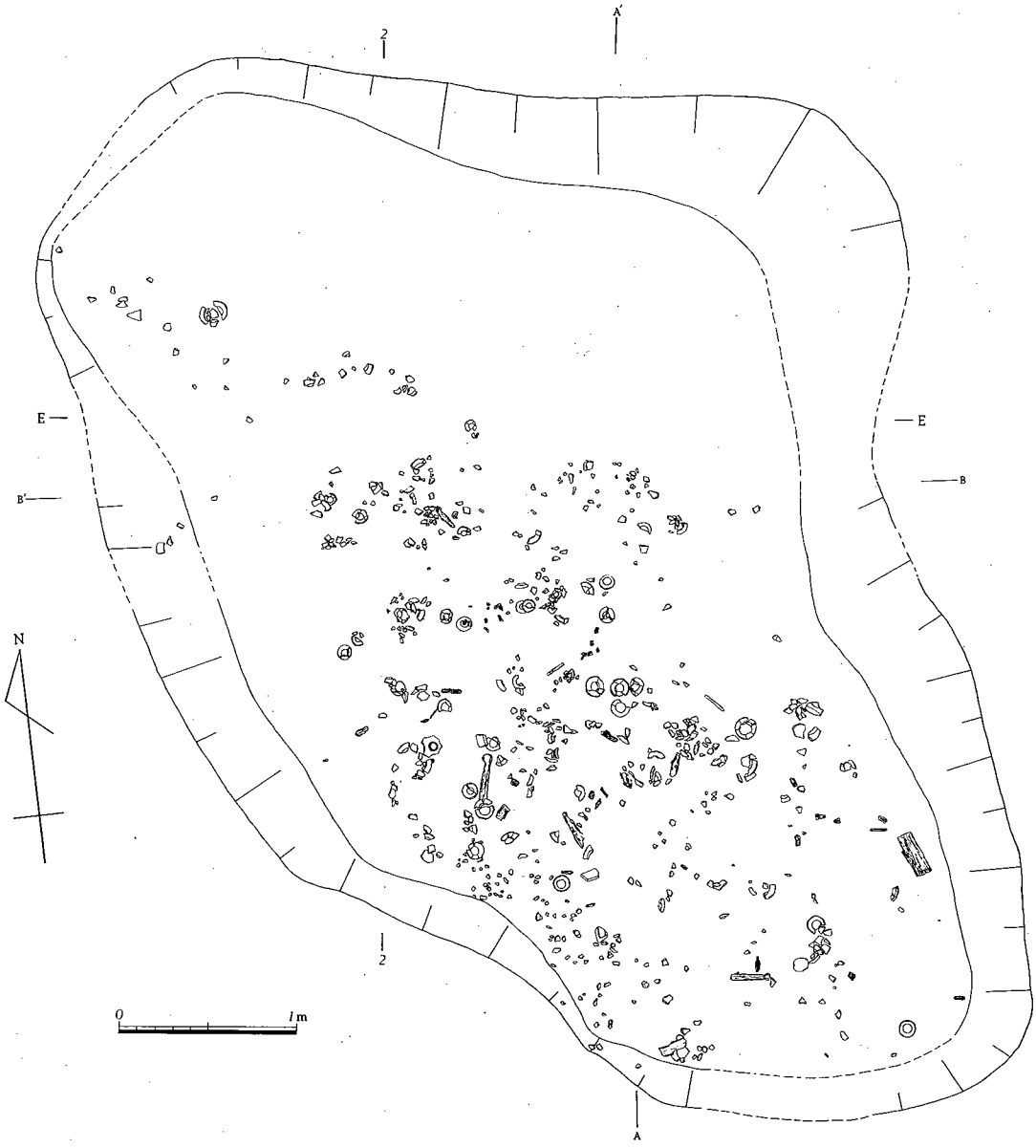


図５　土壙1　平面図

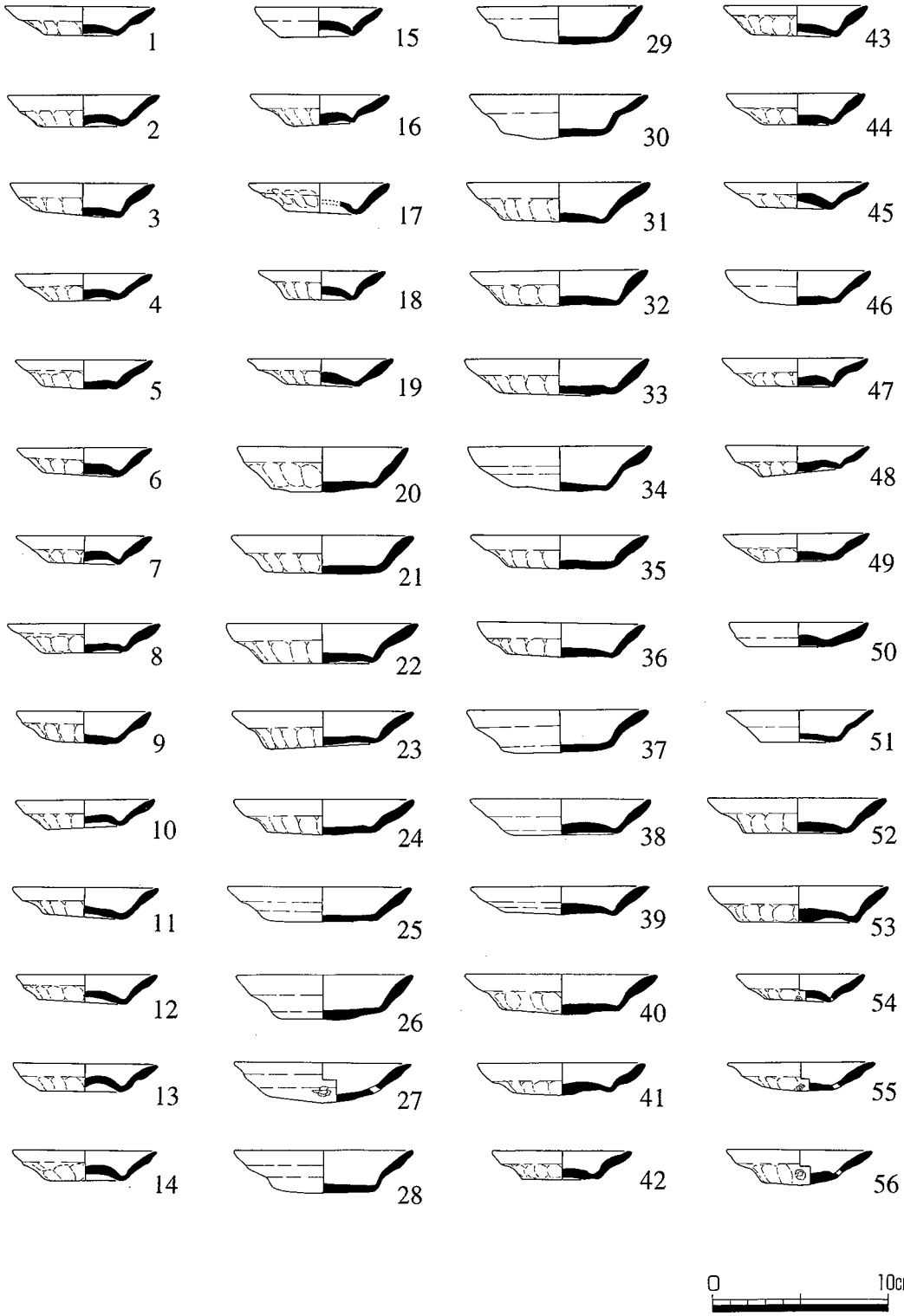


図６　土壙1　出土遺物（土師皿）

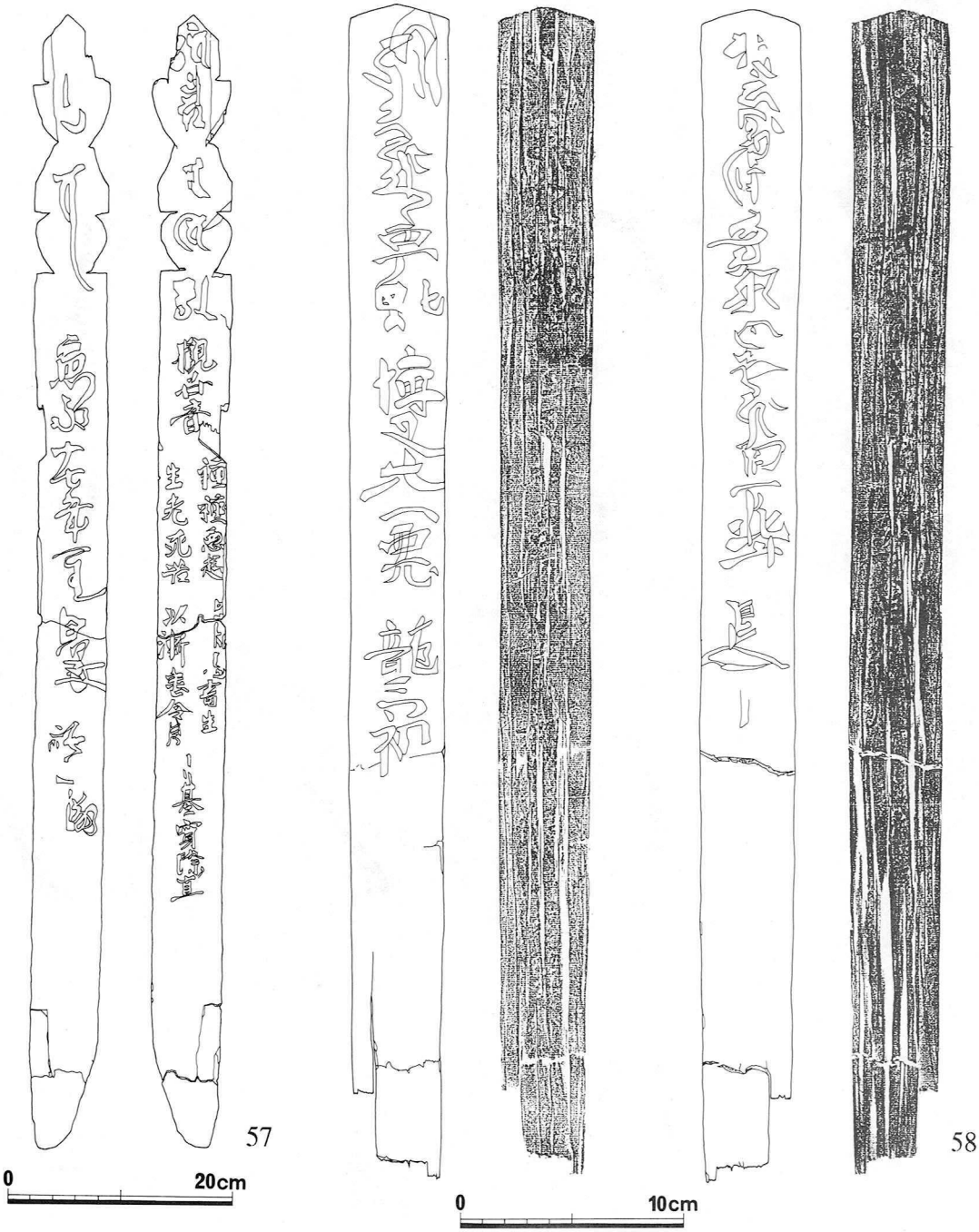


図７　土壙1　出土遺物（卒塔婆）

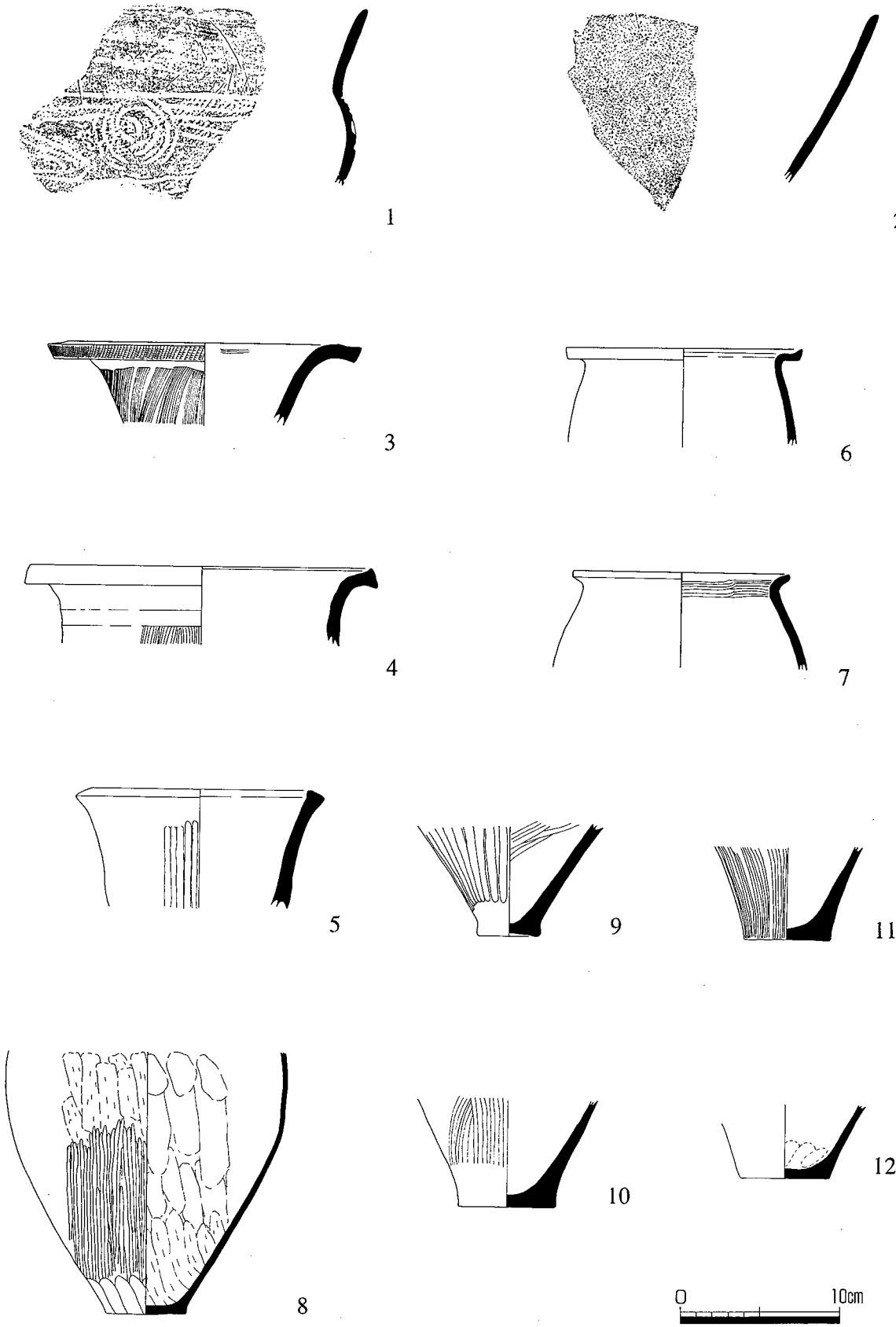


図８　第３・４層　出土遺物（縄文・弥生土器）

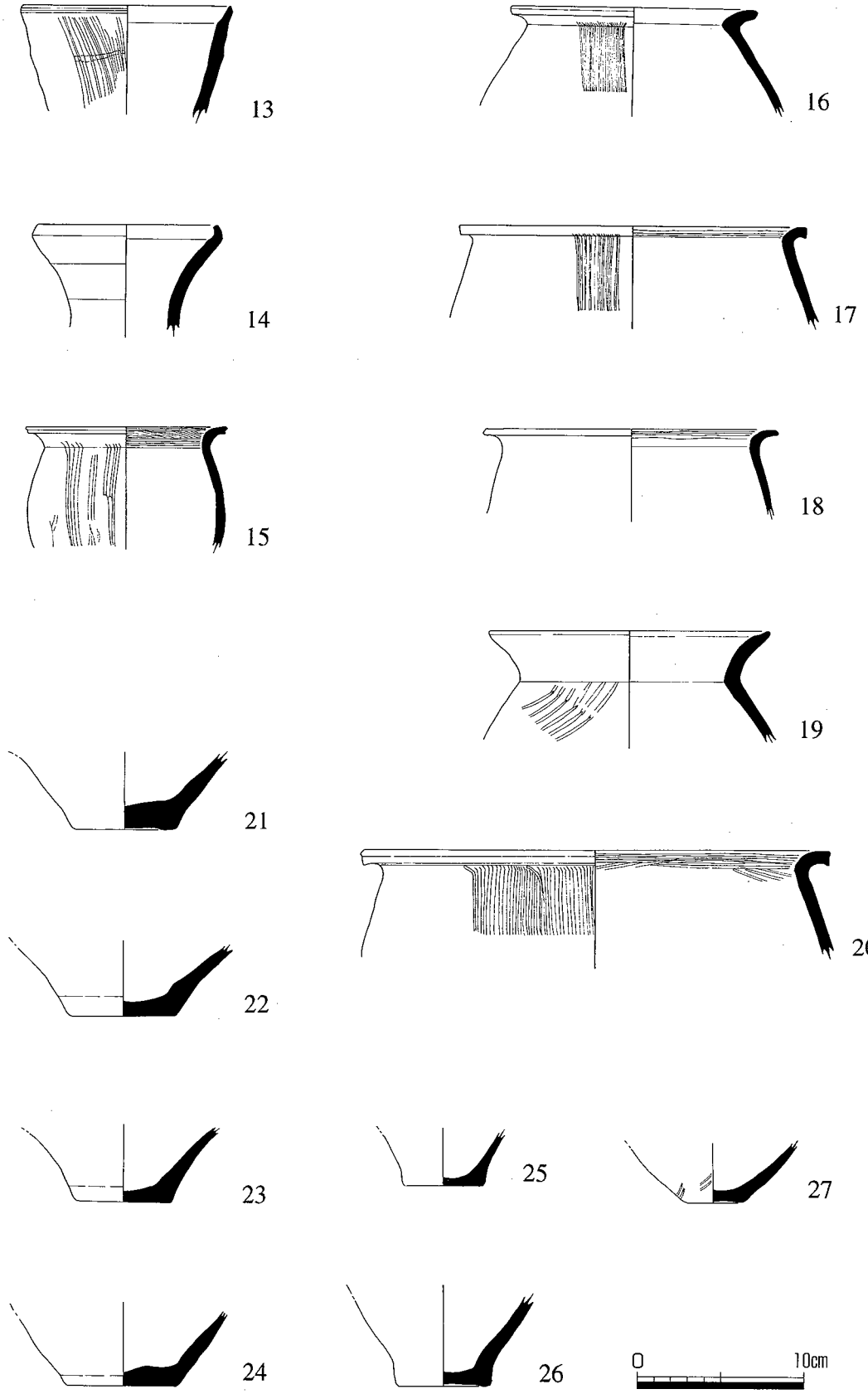


図９　第３・４　層出土遺物（弥生土器）

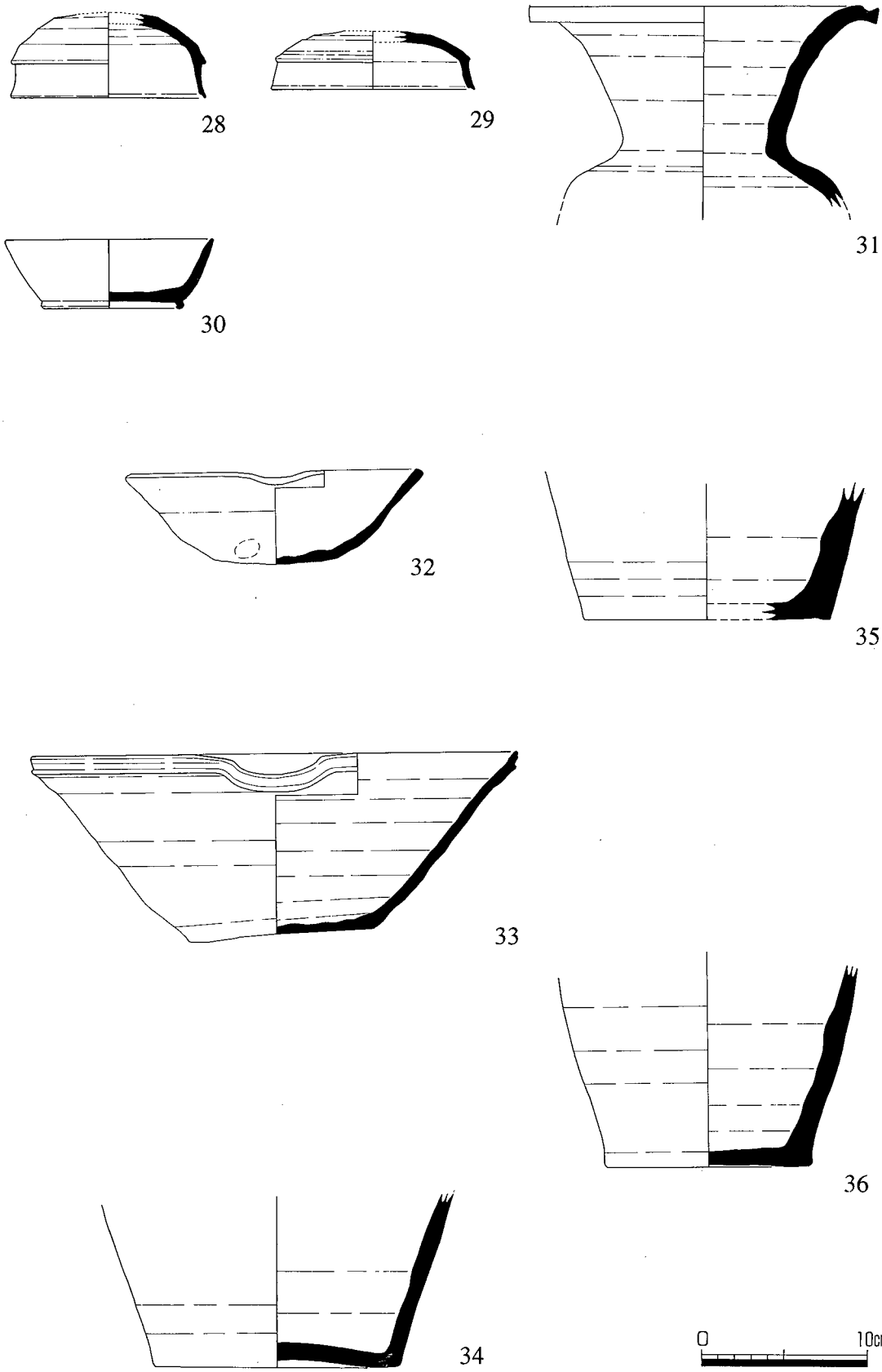


図10　第３・４層　出土遺物（須恵器）

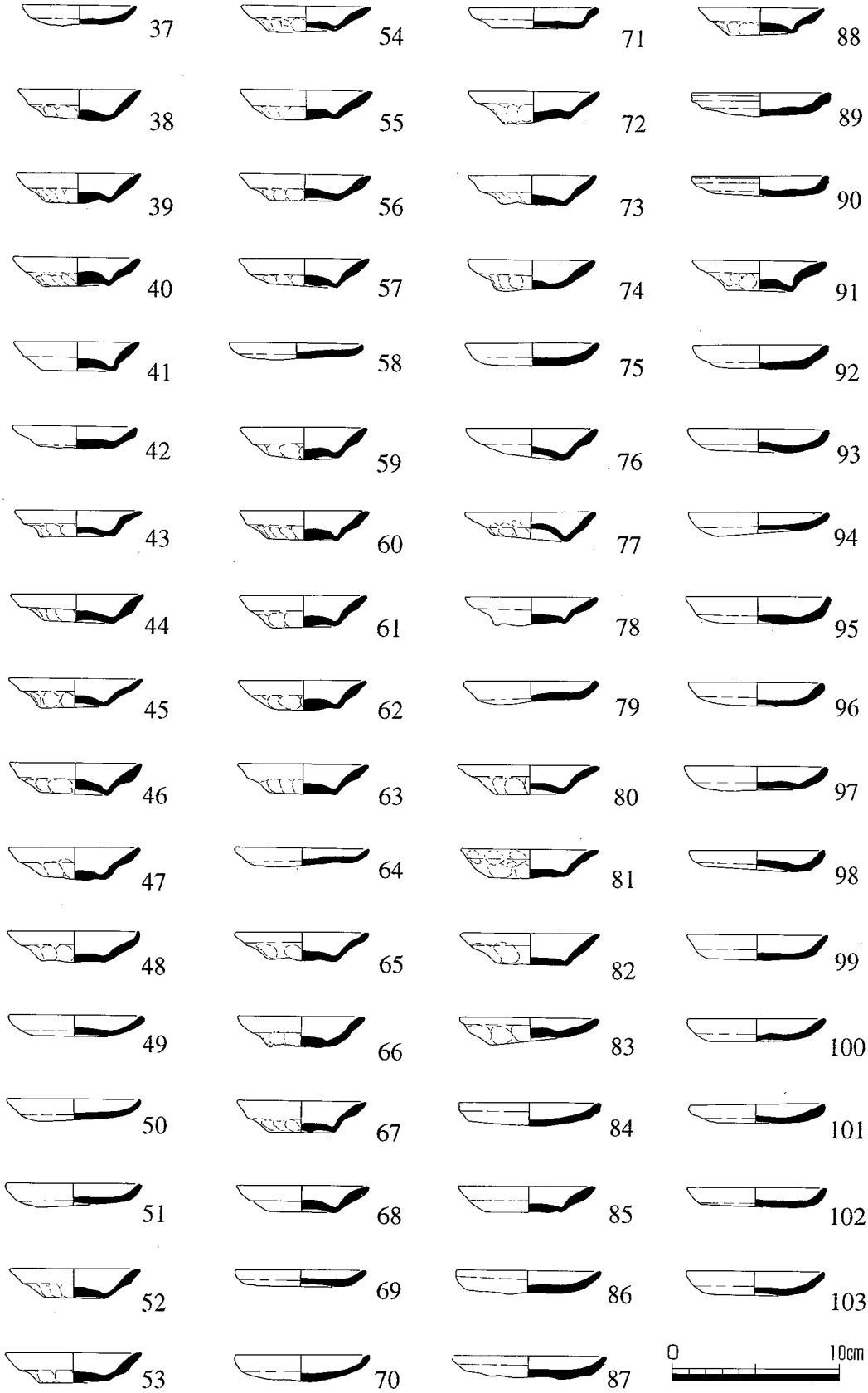


図11　第３・４層　出土遺物（土師皿）

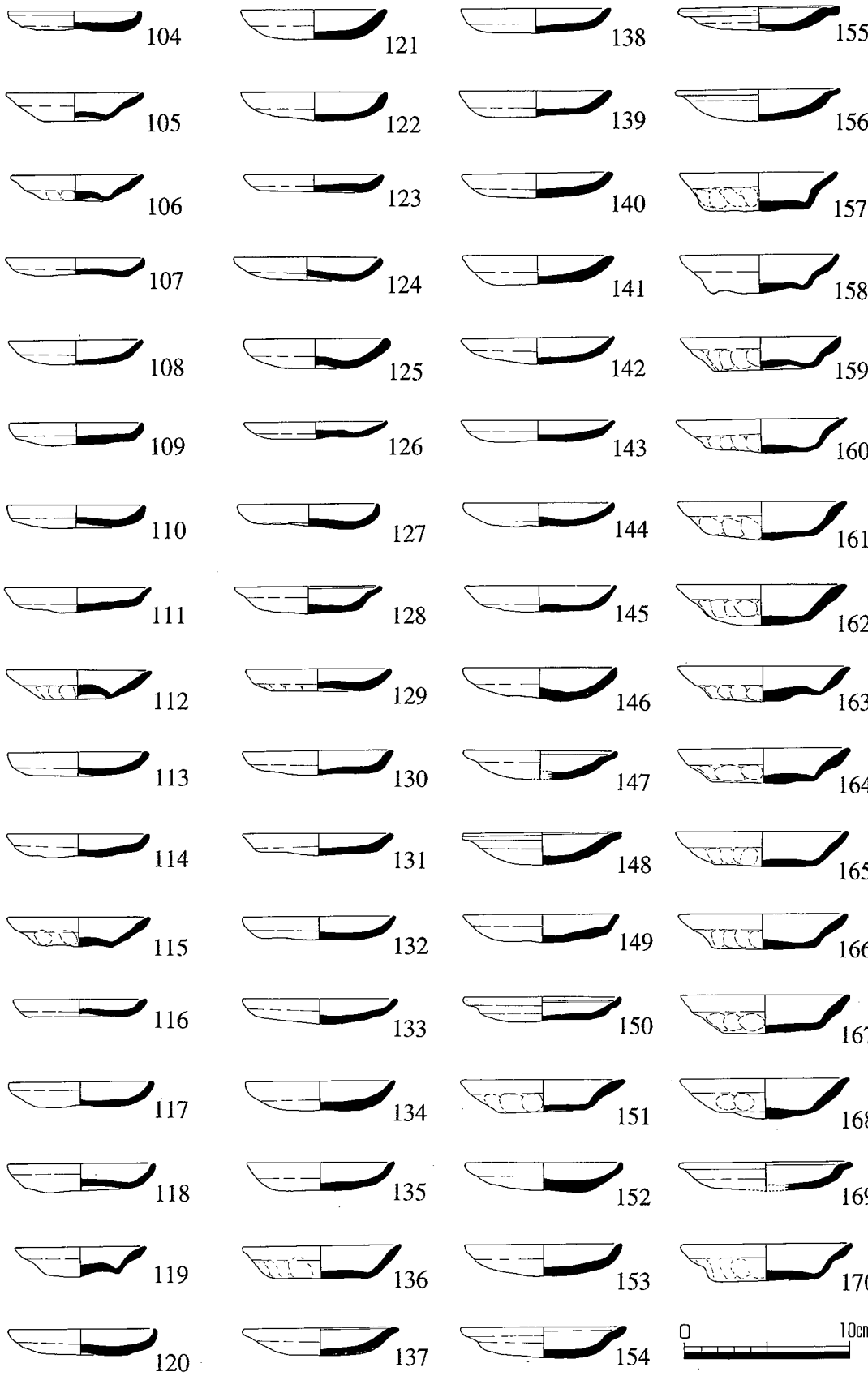


図12　第３・４層　出土遺物（土師皿）

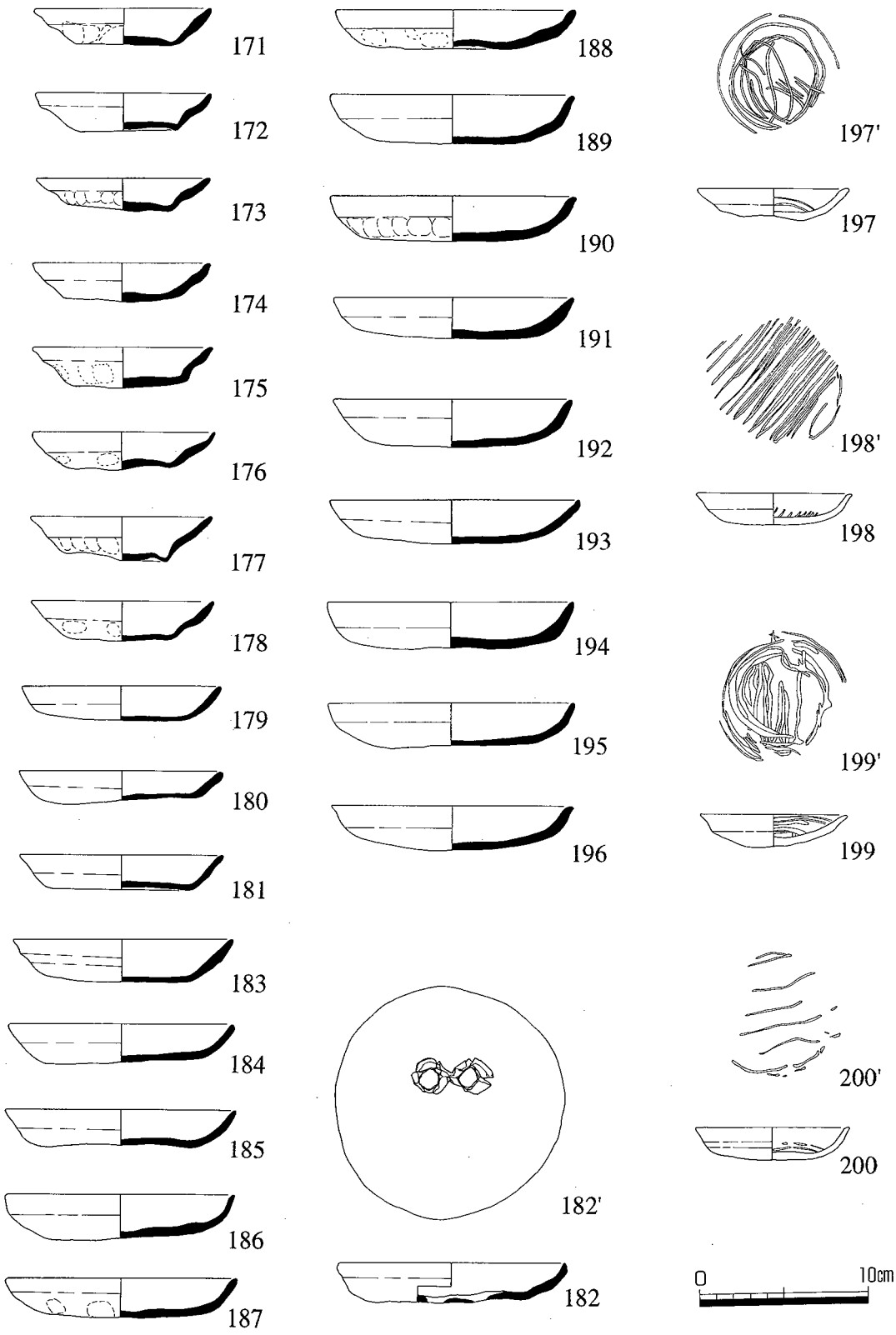


図13　第３・４層　出土遺物（土師皿・瓦器皿）

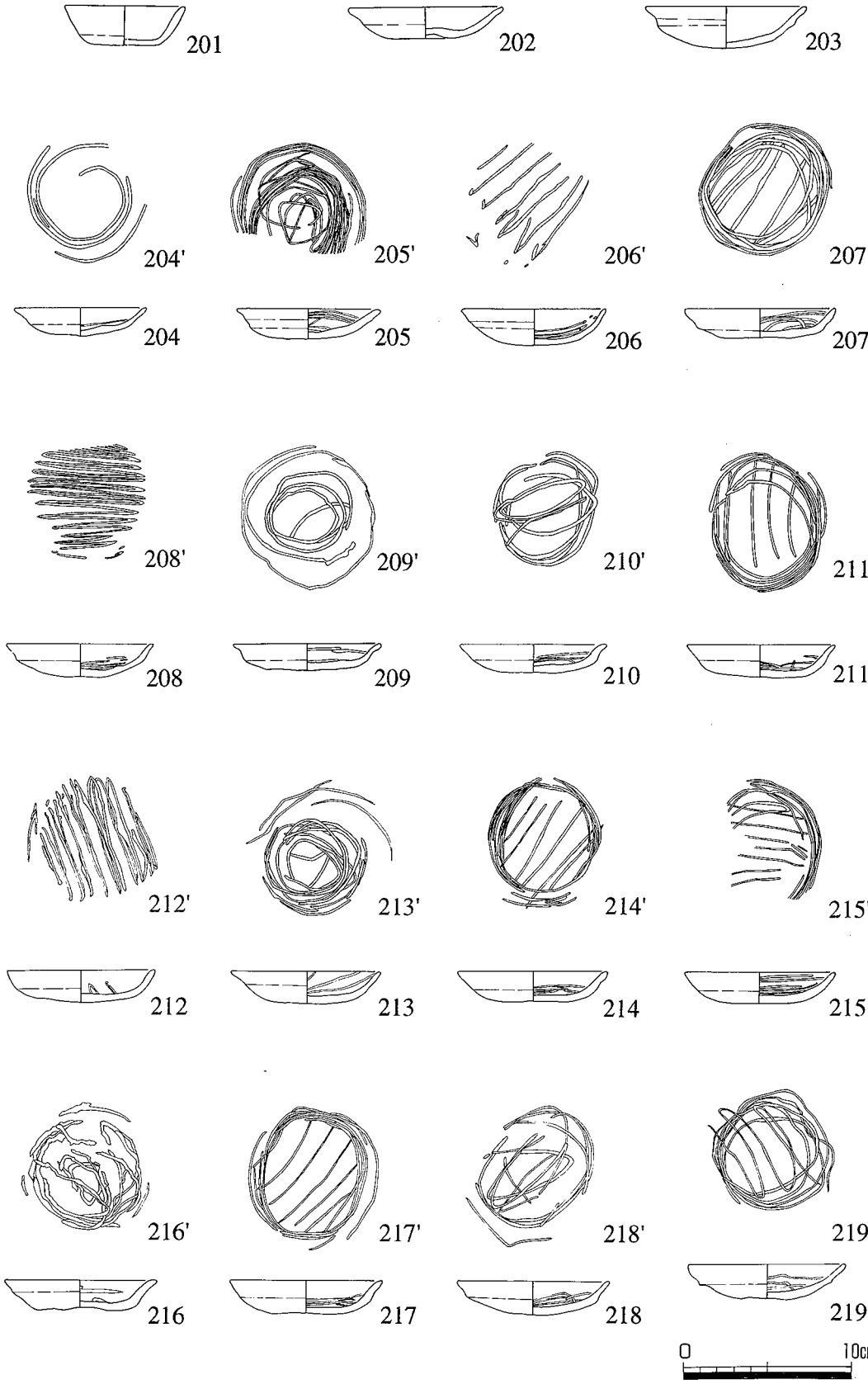


図14　第３・４層　出土遺物（瓦器皿）

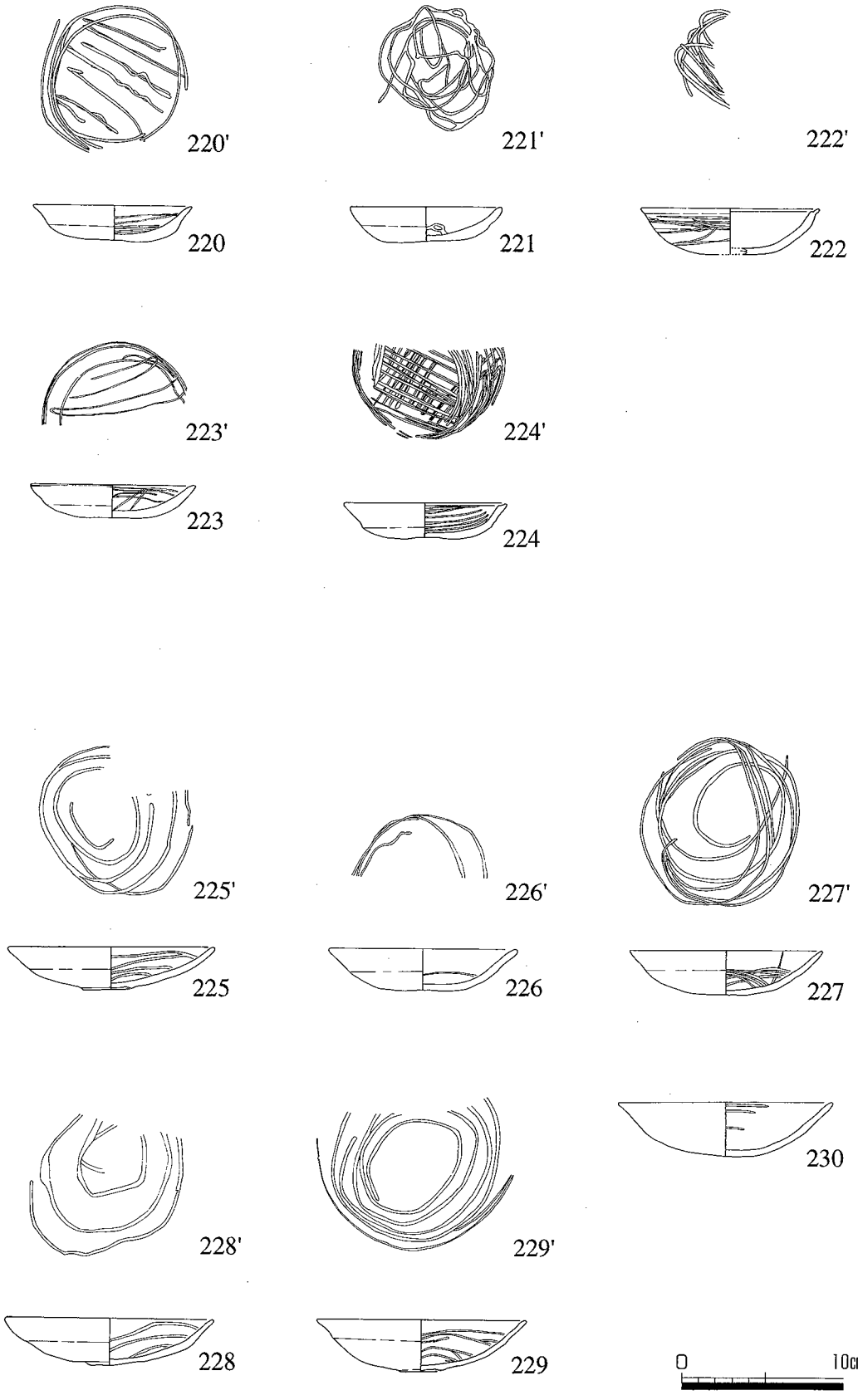


図15　第３・４層　出土遺物（瓦器皿・瓦器椀）

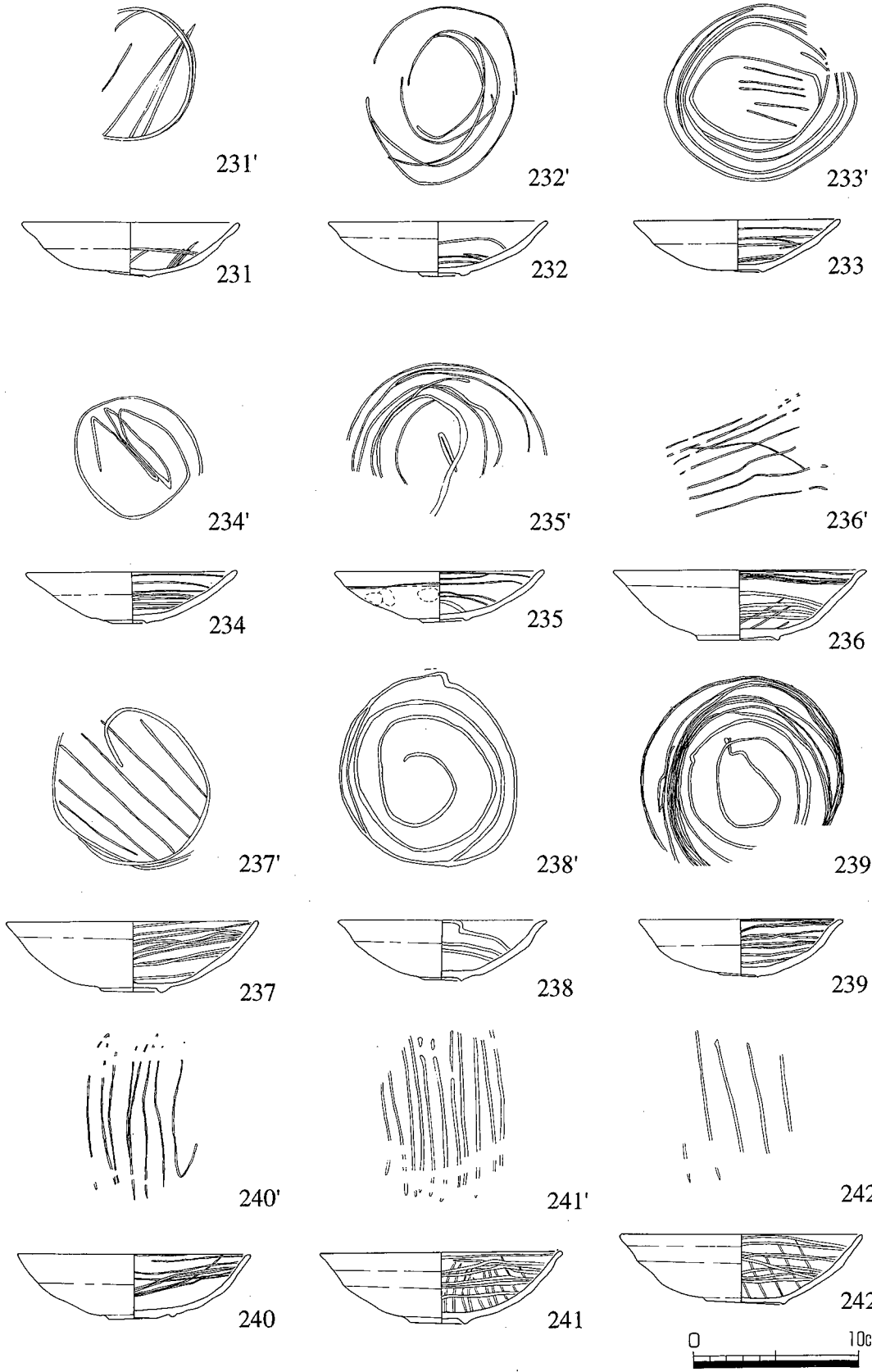


図16　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

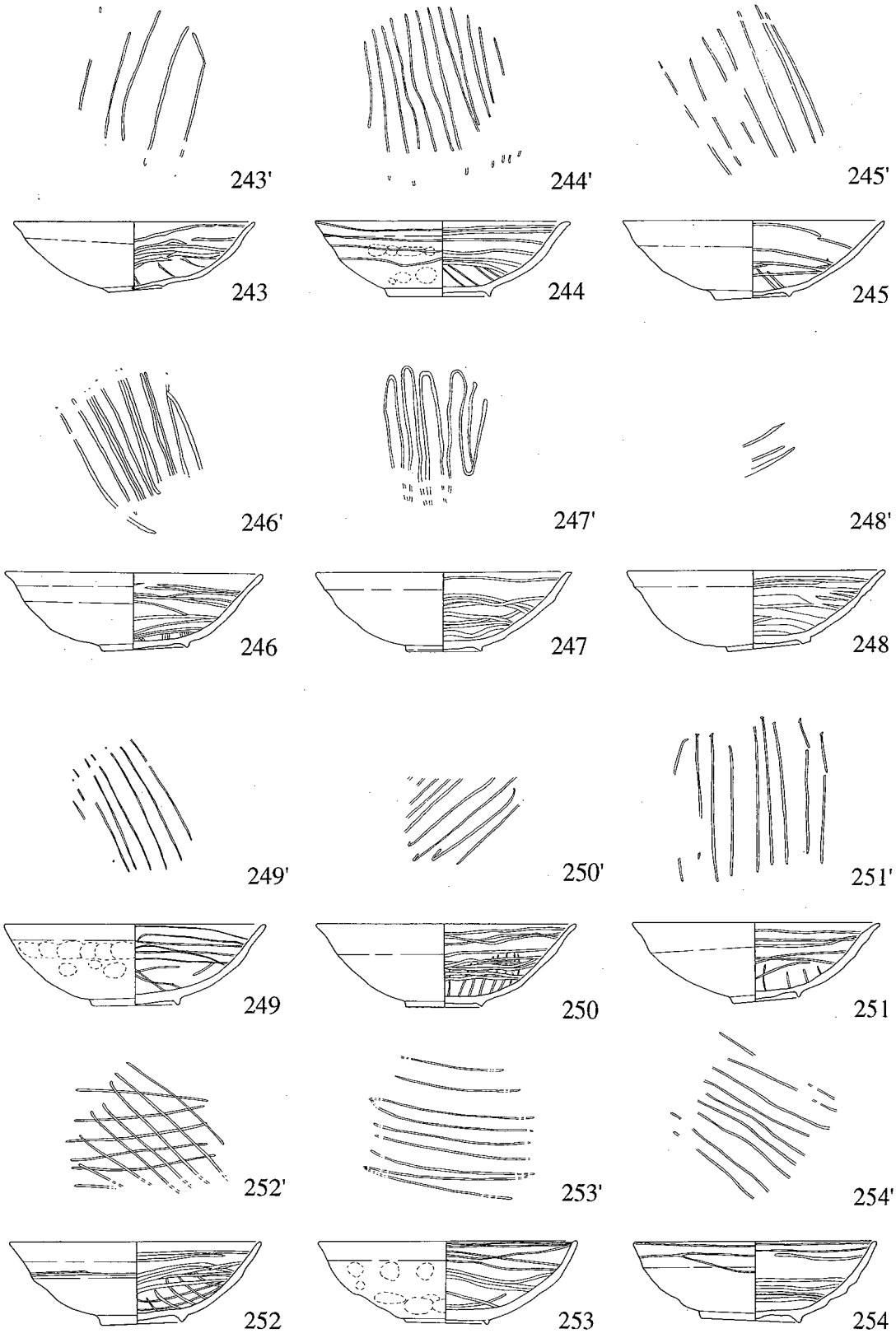


図17　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

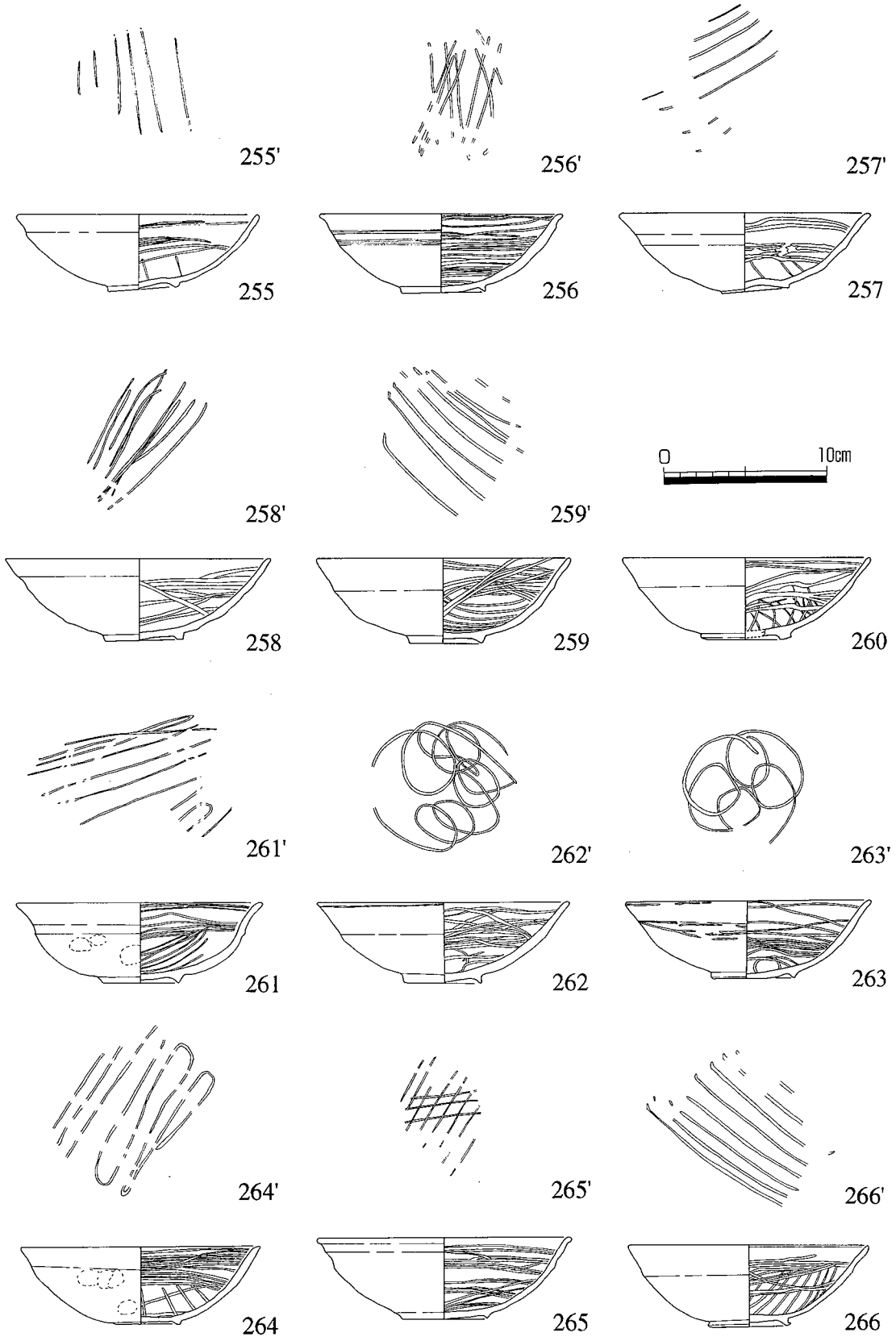


図18　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

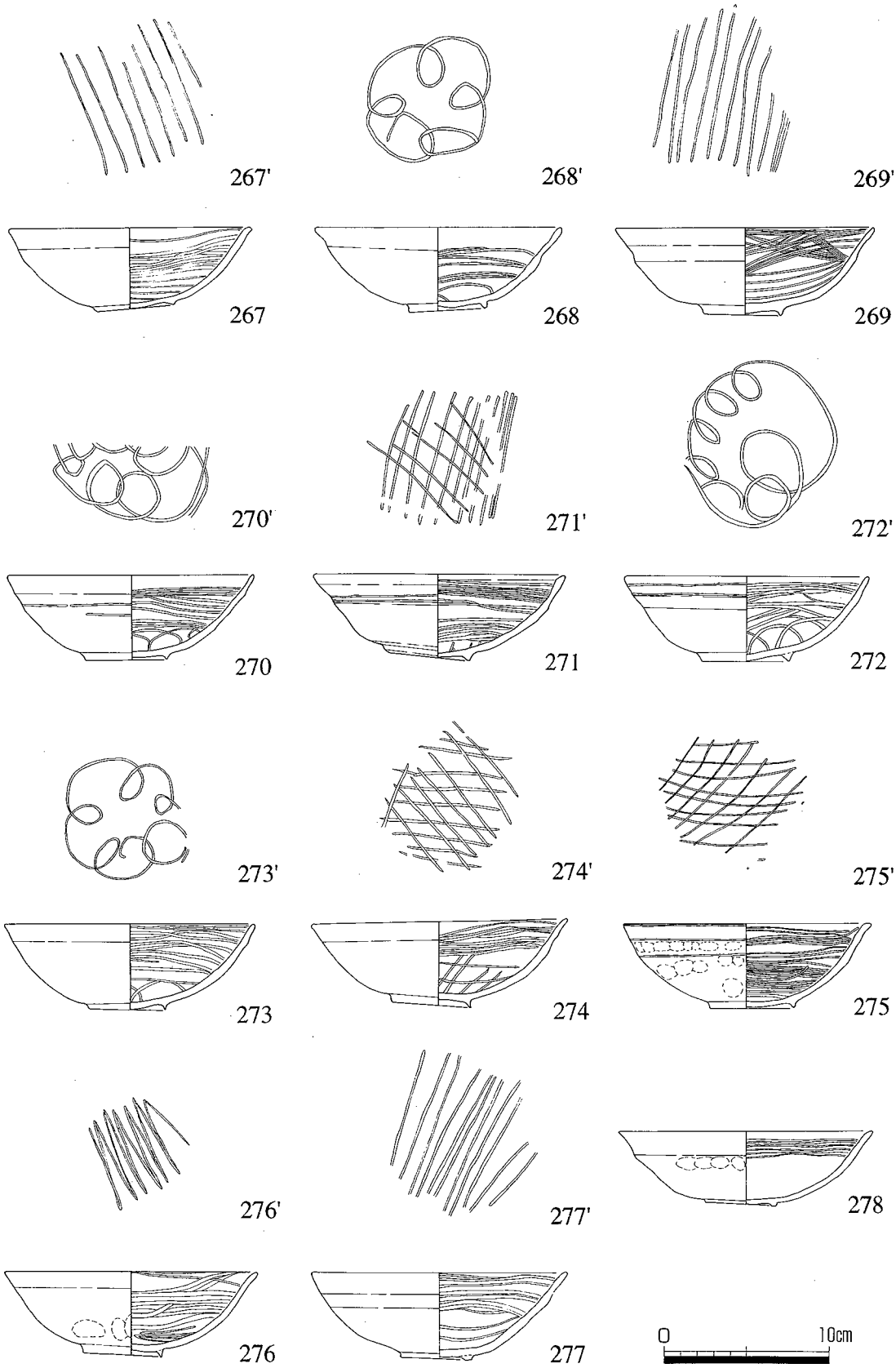


図19　第3・4層　出土遺物（瓦器椀）

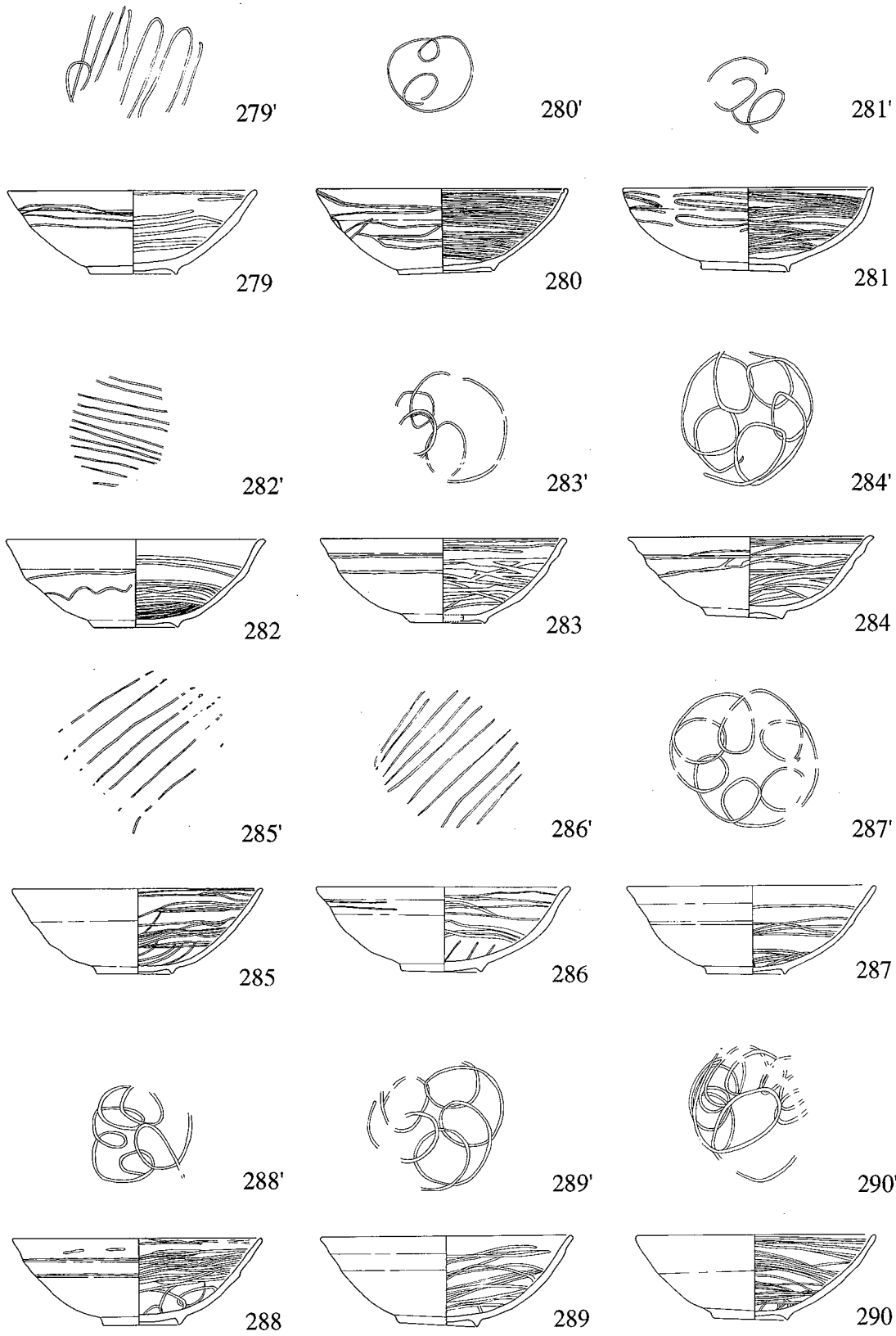


図20　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

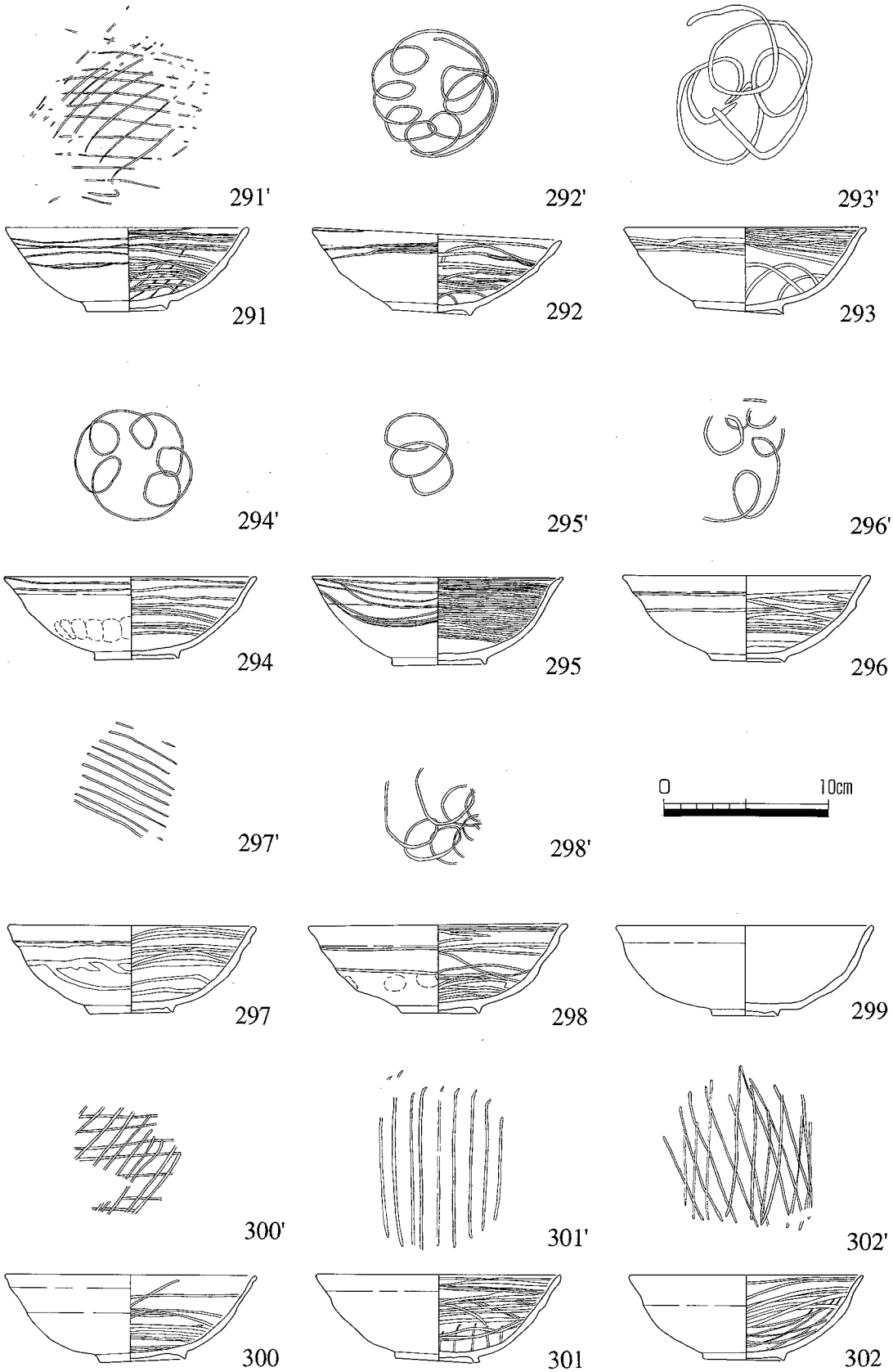


図21　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

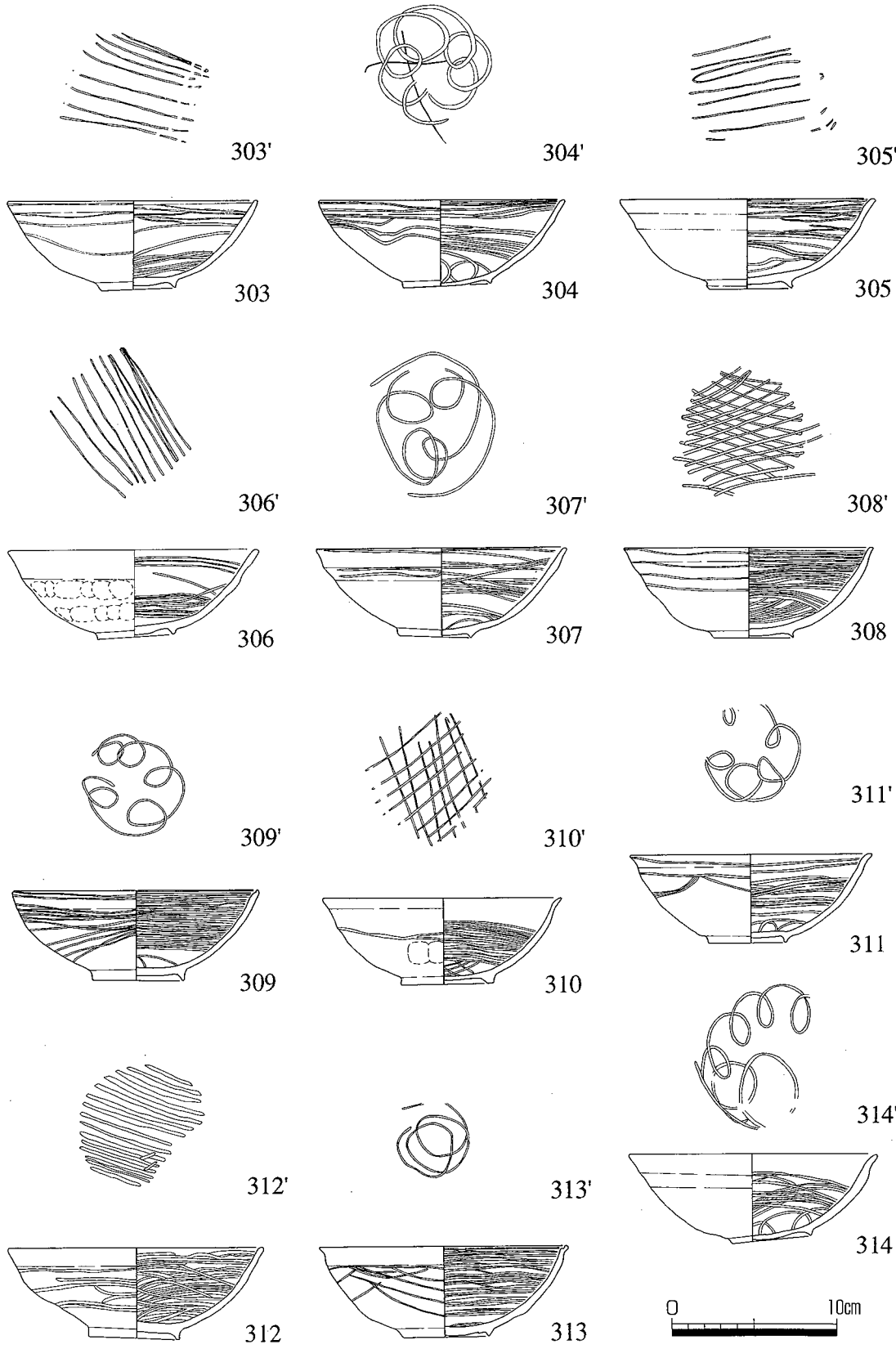


図22　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

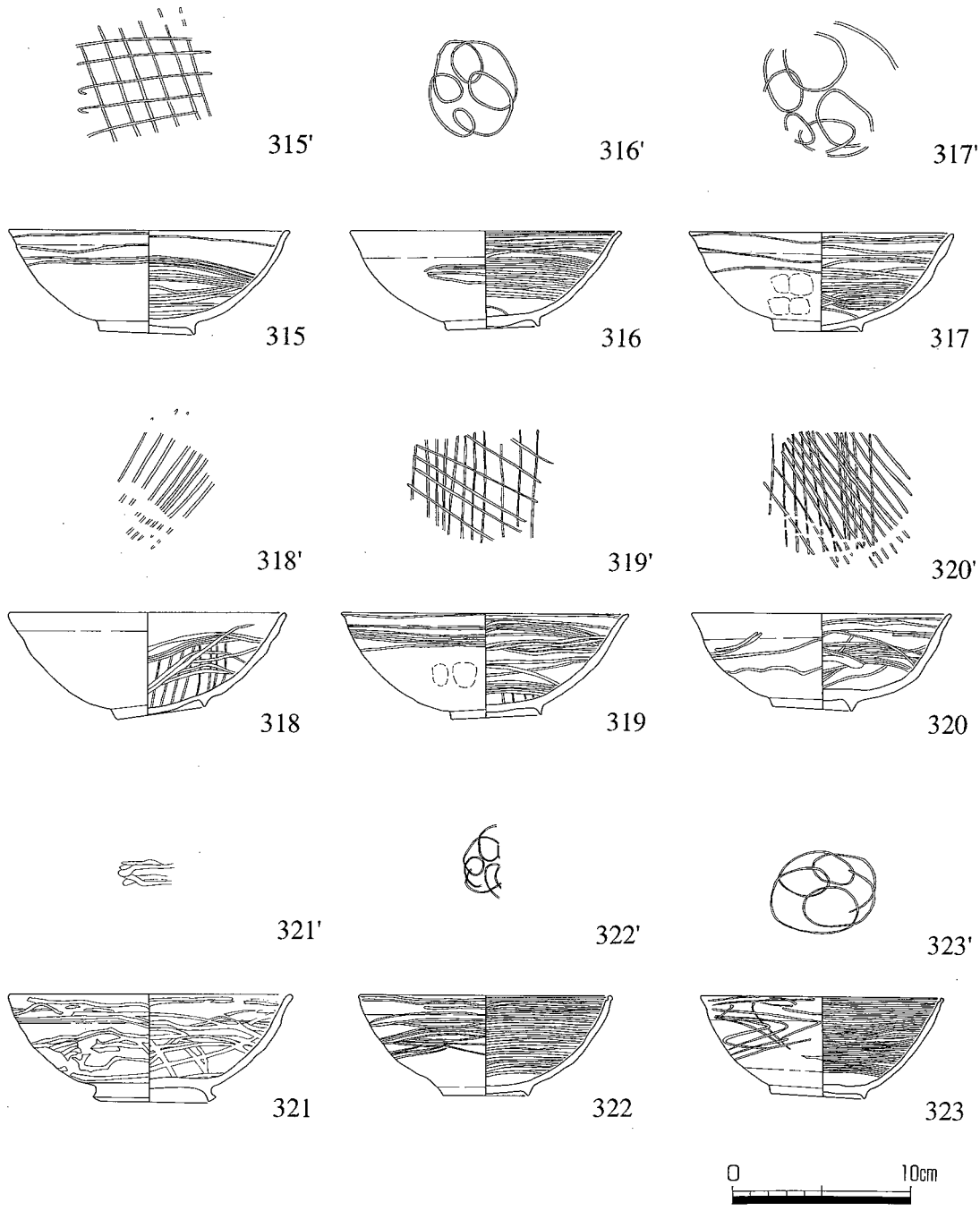


図23　第３・４層　出土遺物（瓦器椀）

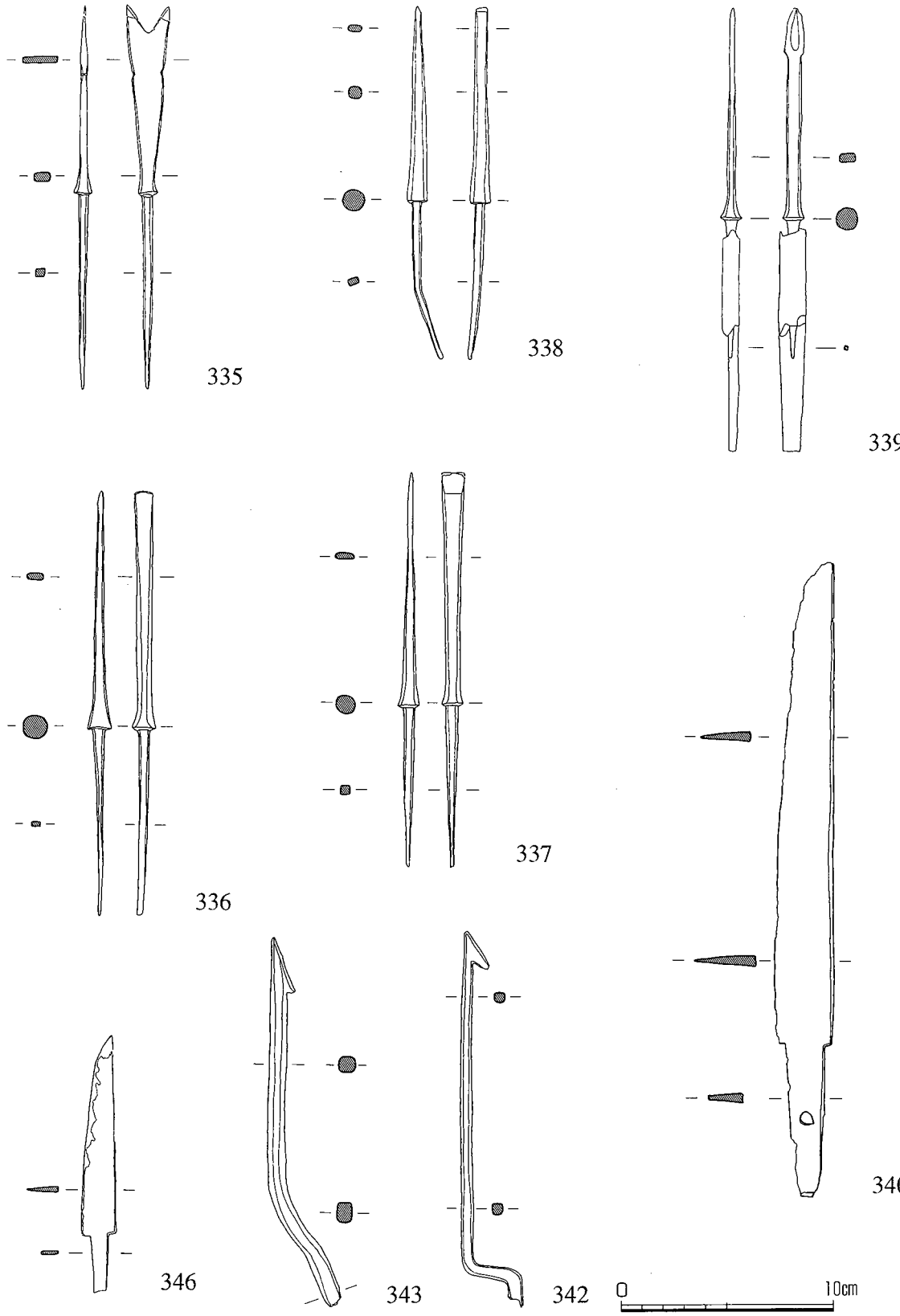


図24　第３・４層　出土遺物（鉄製品）

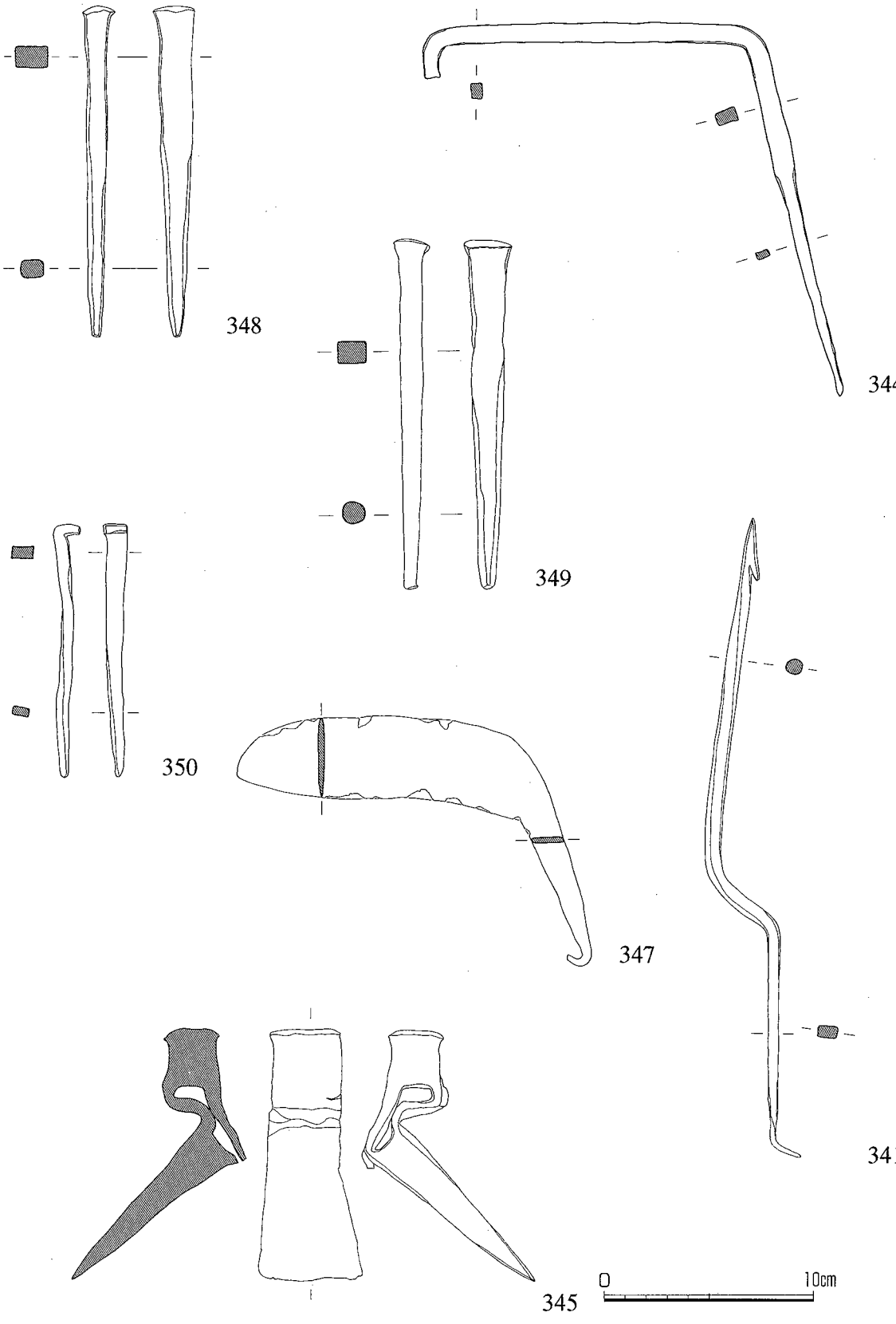


図25　第３・４層　出土遺物（鉄製品）

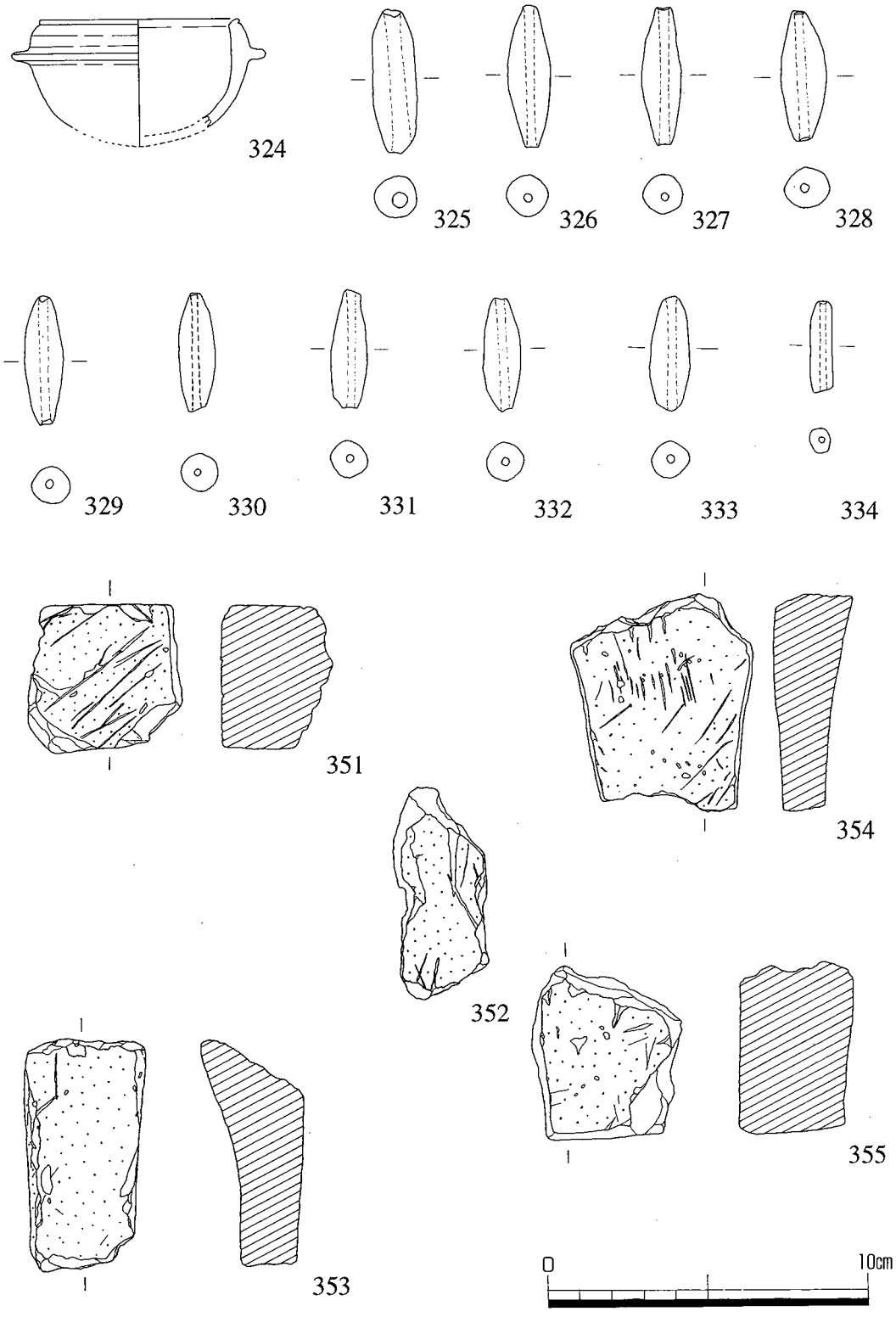


図26　第３・４層　出土遺物（土錘・砥石）

西三荘・八雲東遺跡で検出された
地震の液状化跡

通産省工業技術院地質調査所

主任研究官　　寒川　旭

（液状化現象とは）

地表面から比較的浅い位置にゆる詰まりの砂（礫）が堆積し、地下水で満たされた状態で発生する。

砂や礫の粒子は、通常の状態では、お互いに支え合って安定している。しかし、激しい地震動（震度Ｖ以上）が加わると、粒子間の支えがはずれ、それぞれの粒子は、すき間を小さくして、より安定するように移動する。こうして、地層の一部が急激に収縮を始めることになる。

砂粒間を満たしていた地下水は、急に圧迫されて水圧を上昇させる。そして、水圧が高まると、水が、砂粒の重みや周囲からの土圧を押し返すようになる。この結果、お互いに支え合う力が弱くなった砂粒が、地下水に少し浮かぶようになり、地層に液体の性質が加わる。これが「液状化」の状態で、砂（礫）層中にある比重の大きい物体が沈み、小さい物体は浮上する。さらに、地層が傾斜方向に向かって流動するようにもなり、建造物や地下に埋設したライフラインに著しい被害を与える。

また、地下水が、上昇した水圧を解消するために地表へ噴出し、砂・礫も一緒に「噴砂」として流れ出す。

（砂脈の検出）

当遺跡の発掘調査において、まず、地表下１ｍまでの埋土を取り、次いで江戸時代の遺物を含む厚さ30cmの濃灰色粘土層を除去した。この段階で、室町時代の遺物を含む暗灰色の極細粒砂～シルト層を引き裂き、内部が砂で満たされた割れ目（砂脈）が多く検出された。

砂脈は最大幅12cm、最大長３ｍで、約10本が東西方向に雁行状に配列していた（図１）。この砂脈群には、主な配列方向に対して「杉型」に雁行する傾向がみられる。このため、北東－南西よりの方向で引張力が加わり、これにやや斜交する形で割れ目群が形成されたものと考えられる。

（液状化層と砂脈）

砂脈に直行する方向で、図１のＡ～Ｄ断面に沿う４つのサブトレンチを掘削して、液状化層と砂脈の断面形の観察を行った。

すべての断面で液状化層から上昇する砂脈を確認できたが、特に、液状化層の変形が明瞭に認められたのはサブトレンチＣの壁面である（図２、写真１）

図２では、上位に厚さ50～60cmの極細粒砂とシルトの互層（Ｉ層）が堆積していた。この地層の一部にも擾乱を受けた構造が認められ、この層中でもわずかに地震に伴う変形が生じたことが推定される。

Ｉ層の下位には、少なくとも厚さ１ｍ以上の中～粗粒砂（II層）が堆積していた。II層の中～下部には河川の堆積作用に伴う堆積構造が残っていたが、II層上部の厚さ30～40cmの部分では、これが全く消滅し、新たに液状化現象に伴う特徴的な構造が生じていた。

ａはII層中で本来水平に堆積していたはずの細粒砂層が大きく斜上方にめくれ上がった擾乱構造で、砂・水の激しい流動に伴うものである。ｂは細粒砂層の間を破って砂・水が上昇したことを示す柱状構造である。また、ｃ層は激しい震動をうけながら砂・水が徐々に上方へ移動したことを示す皿状構造である。また、この図の範囲外でも、II層上部に顕著な柱状構造が認められた（写真２）。

このように、一連の地層の中でも、特に、II層上部の数十センチメートルの範囲で激しい液状化が生じて、砂・水の流動を伴いながら、噴砂が砂脈内を上昇していることがわかる。

図２の３本の砂脈の中で左端のものはＩ層を完全に引き裂いているが、他の２本では途中まで上昇した段階で消滅したものもある。これらの砂脈の上端には細い粒子のみが集まり、消滅する直前の段階では、水圧が低下して細くて軽い粒子しか運搬できない状態になっていたことを示している。

図３はサブトレンチＤの壁面を示したものである。この図でも、II層上部の厚さ20～30cmの部分で堆積構造が消滅していた。Ｉ層最下部のシルトが細長いブロック状に剥離し、流動の激しいII層上部の砂中にとりこまれていた。

全体として、液状化現象に伴う激しい流動を示すのは、II層最上部の厚さ40cm以内の部分に限られている。このような観察結果は液状化のメカニズムや防災対策を考える上で重要な事項でもある。

（液状化をもたらした地震の時期）

図２・３のＩ層には室町時代（新しいもので15世紀）の遺物が多く含まれている。この地層を引き裂いて噴砂が発生しているので、地震の時期は15世紀より後に限定される。また、Ｉ層最上部が少し浸食された後に、これを覆う粘土層が堆積し、この中からは江戸時代の遺物（年代の判明しているものは18世紀）が出土している。この粘土層は砂脈を完全に覆っているので、地震の時期は江戸時代中頃以前（厳密には18世紀より前）と限定される。このように、地震の時期は16～17世紀に限定され、当地域に液状化をもたらす可能性のある地震として、1510年の摂津河内地震、1596年の伏見地震、1662年の琵琶湖西岸地震があげられる。

この中でも、当遺跡周辺に特に激しい地震動をもたらしたのが確実なのは、1596（文禄５・慶長元）年の９月５日に生じた伏見地震である。この地震によって豊臣秀吉が築いたばかりの伏見城が倒壊したことが『板坂卜斎覚書』などに記されている。被害の特に著しかった山崎・八幡地域では『言経卿記』に「山崎、事外相損、家悉崩了、死人不知数了。八幡在所、是又家悉崩了。」と書かれている。さらに、大阪・兵庫・堺などでも多くの家屋が倒れ、死者も多数出ている。京阪神地域を中心に大きな被害をもたらした1596年の地震はマグニチュード7.5 以上の規模があったとも考えられるので、この時に西三荘・八雲東遺跡に顕著な液状化現象が生じた可能性が強い。

文　　献

文部省震災予防評議会編(1941)増訂 大日本地震史料．第一巻，鳴鳳社

寒川　旭(1992)地震考古学－遺跡が語る地震の歴史．中公新書

寒川　旭・宇治原靖泰(1989)地震の液状化跡－大阪府西三荘・八雲東遺跡．季刊考古学，83-86

宇佐美龍夫(1987)新編日本被害地震総覧．東京大学出版会

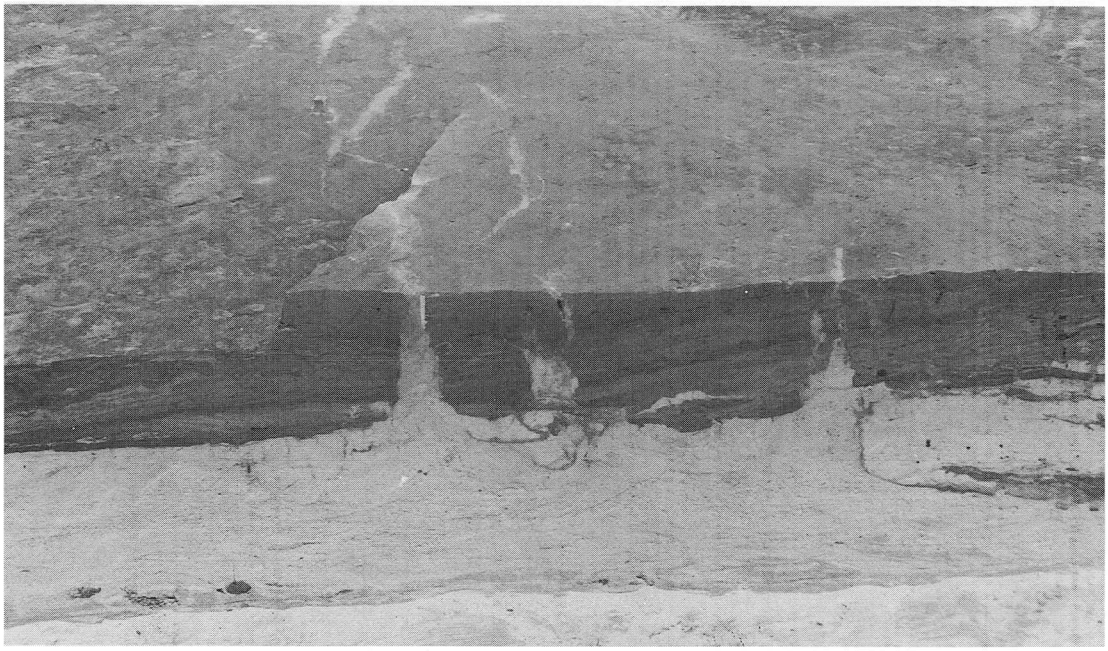


写真1　サブトレンチCの東側壁面

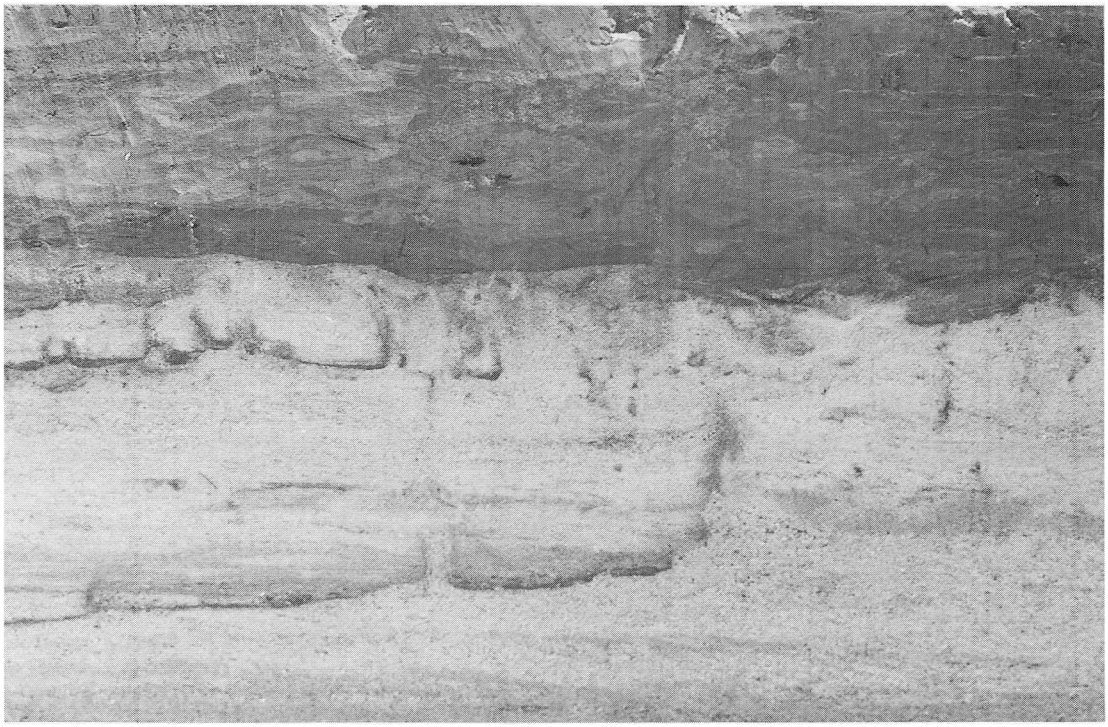


写真2　液状化現象によって生じた柱状構造

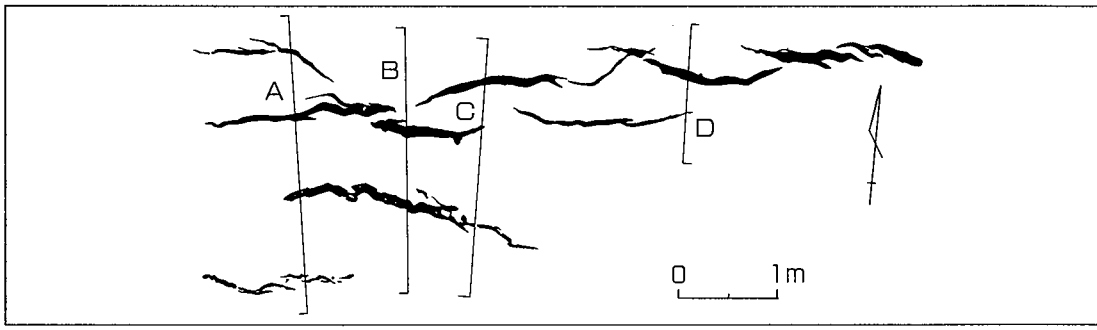


図1　砂脈の平面形

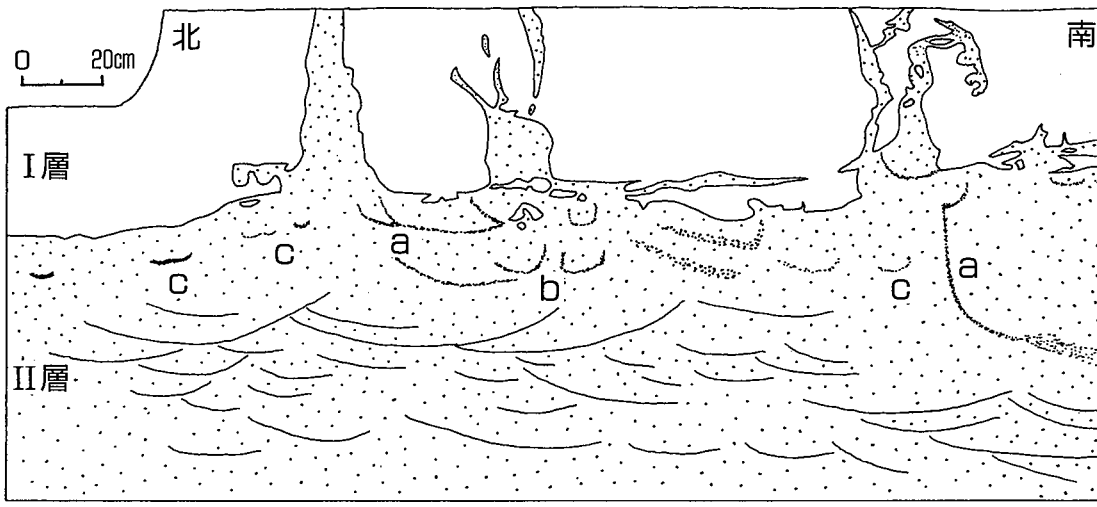


図2　サブトレンチCの東側壁面にみられる液状化跡
a擾乱構造　b柱状構造　c皿状構造

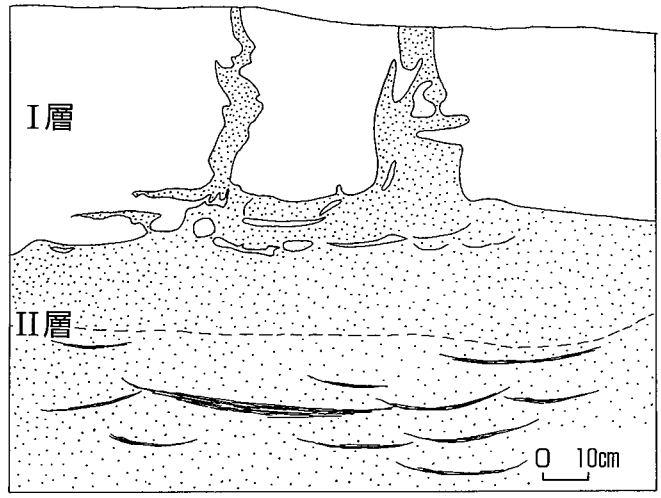
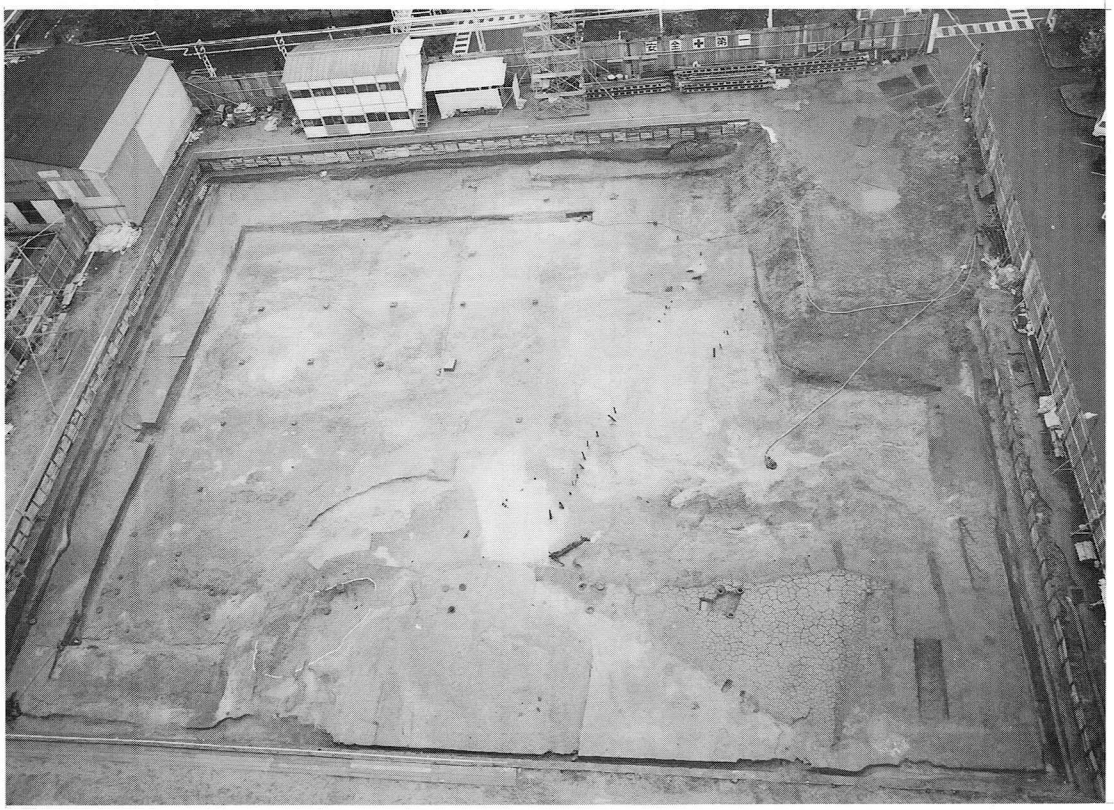


図3　サブトレンチDの西側壁面にみられる
液状化跡

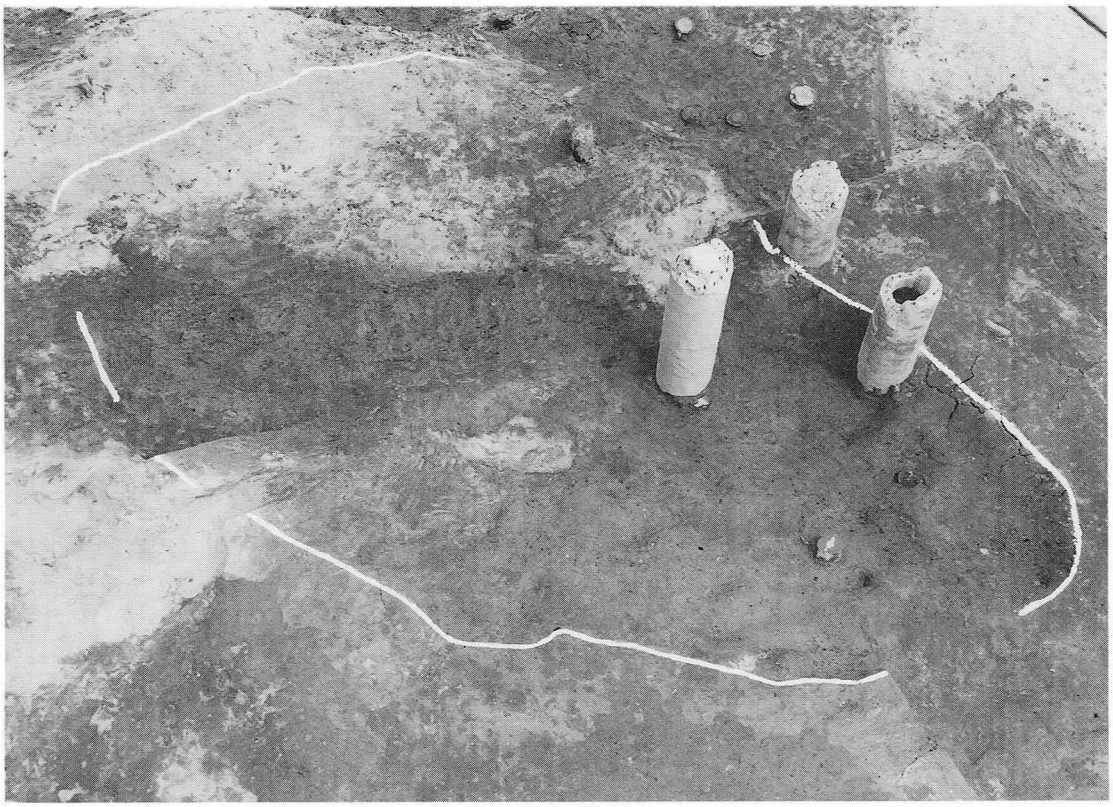
図　　版

調査前の状況（西から）



調査地全景（西から）

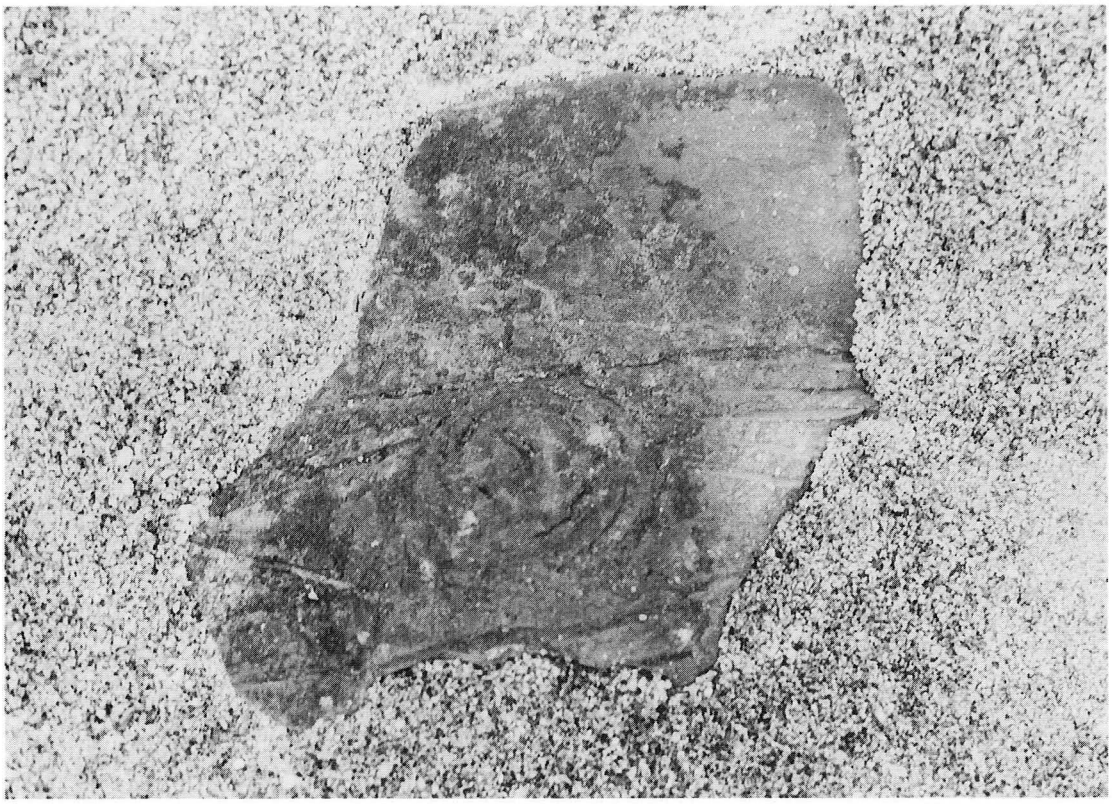
土壙 1　遺物出土状況



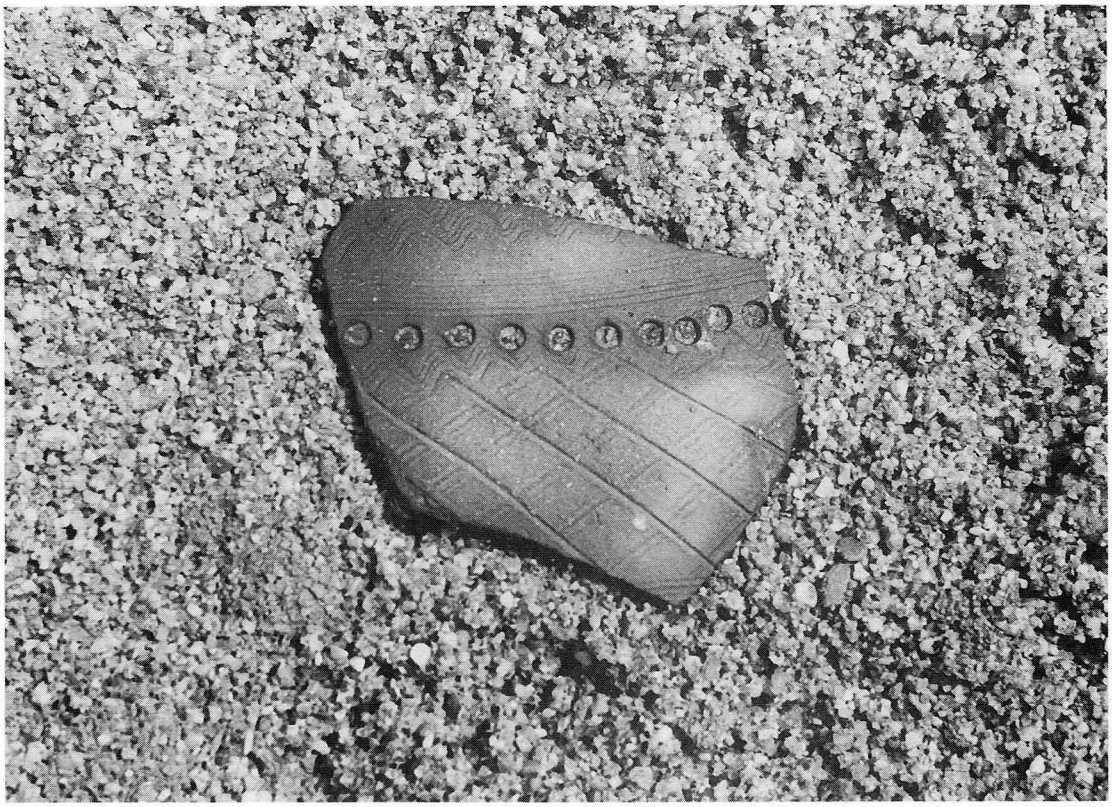
土壙 1　完掘状況

土壙 1　柿経（59）出土状況

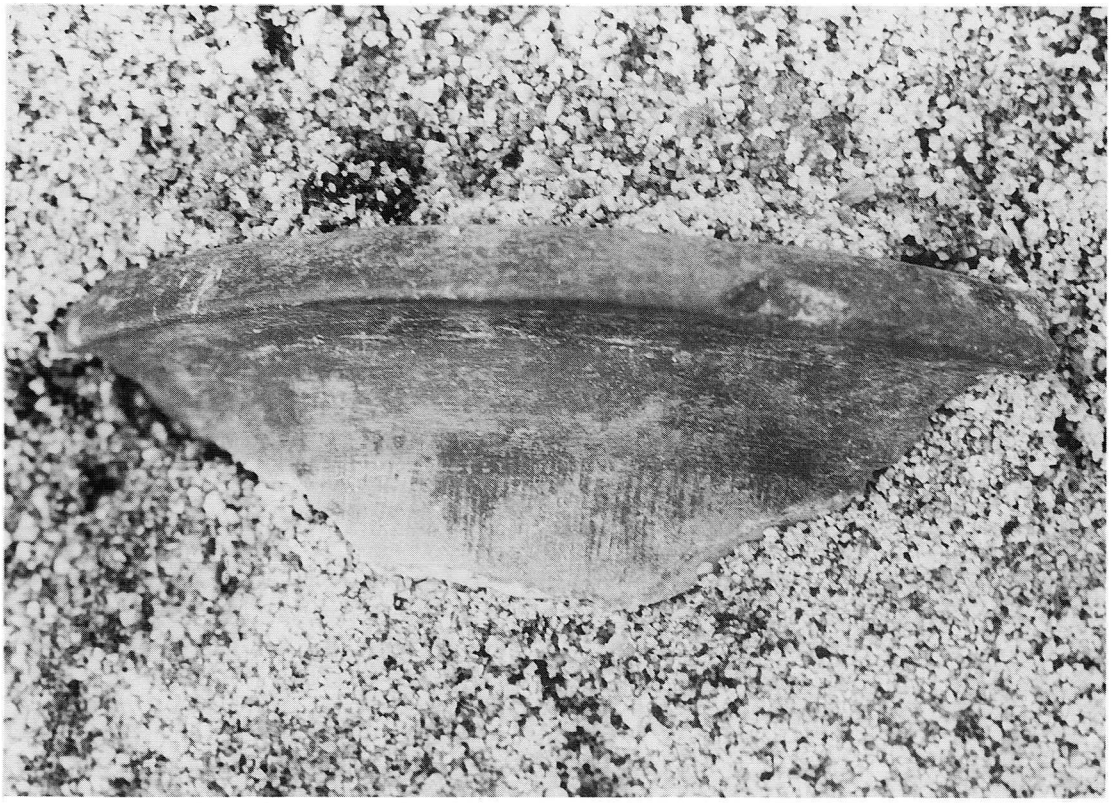
土壙 1　卒塔婆出土状況



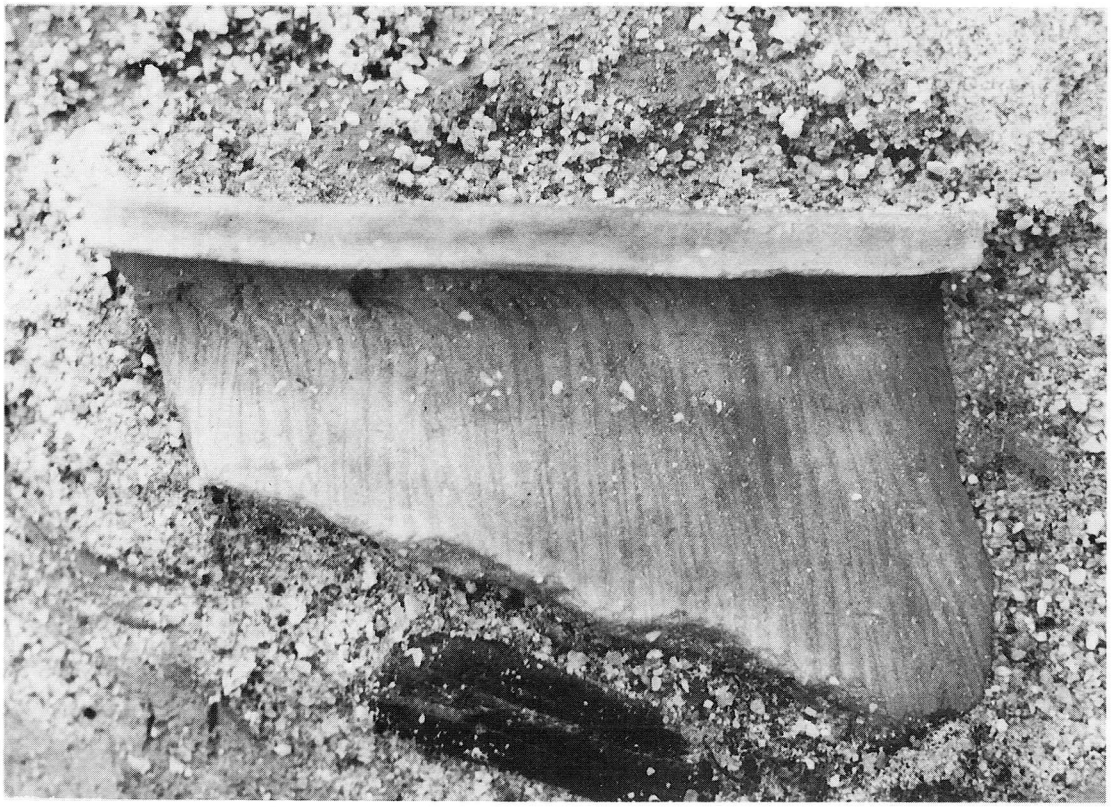
縄文土器　出土状況



弥生土器　出土状況



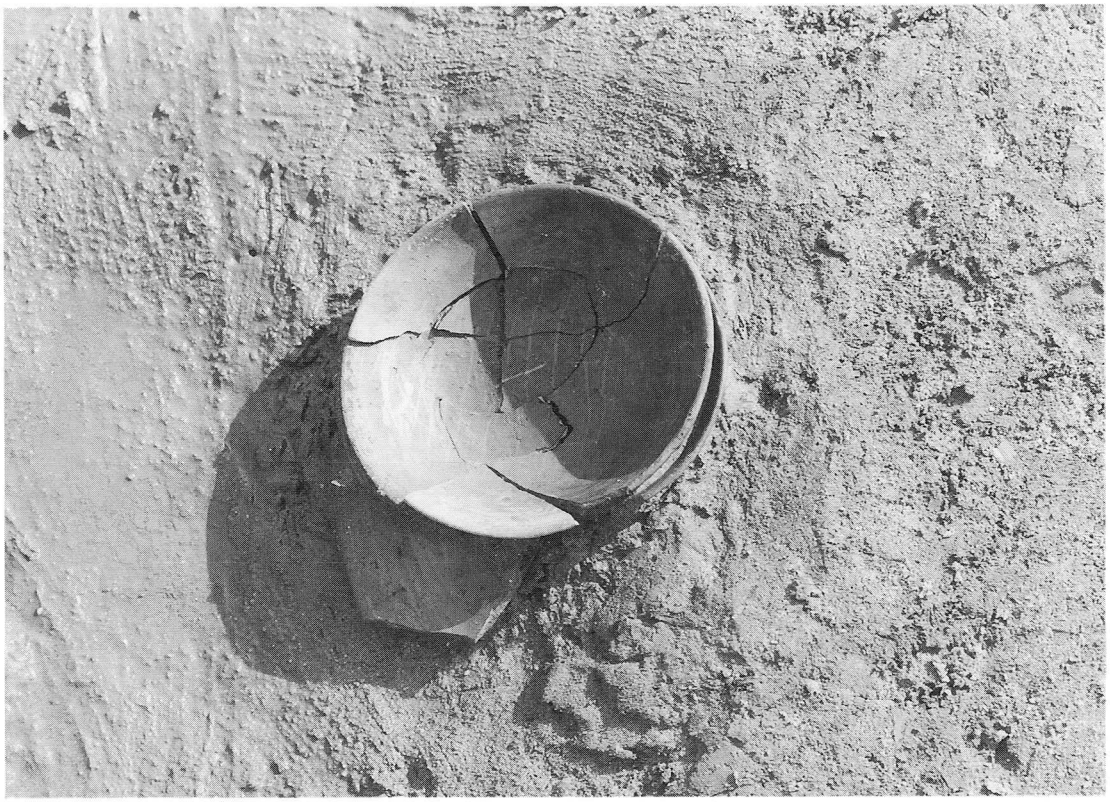
弥生土器　出土状況



弥生土器　出土状況

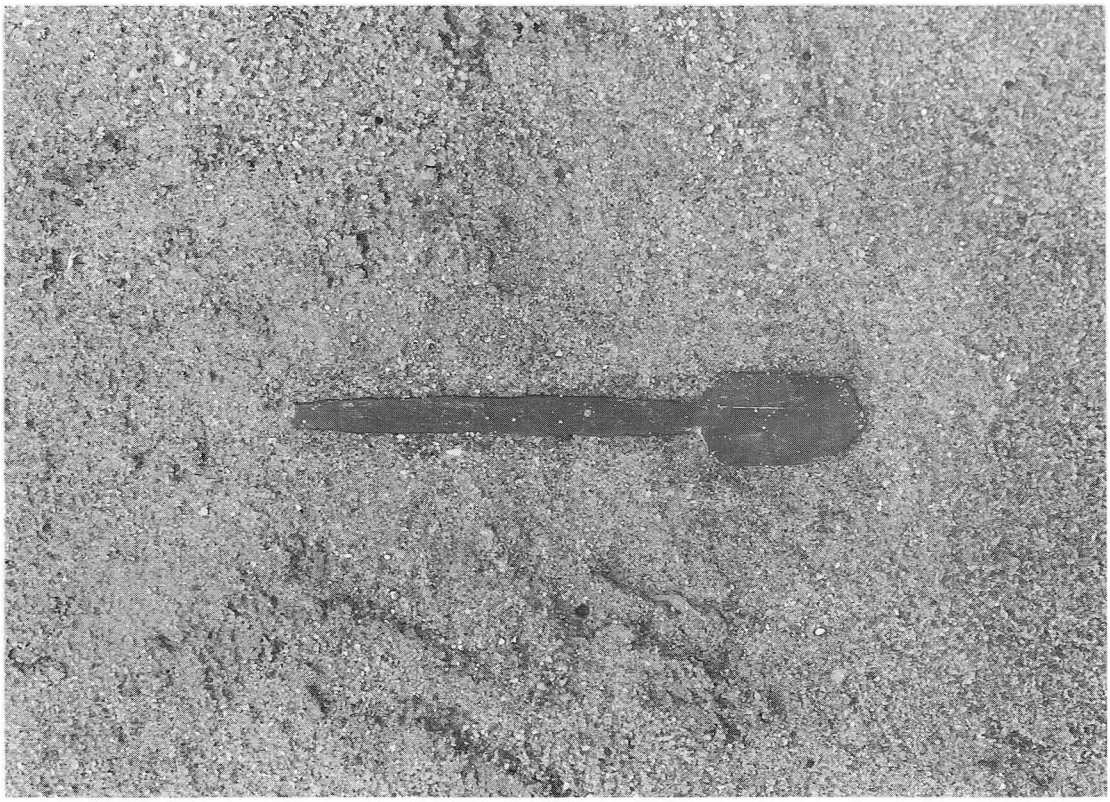
土師皿　出土状況

土師皿　出土状況



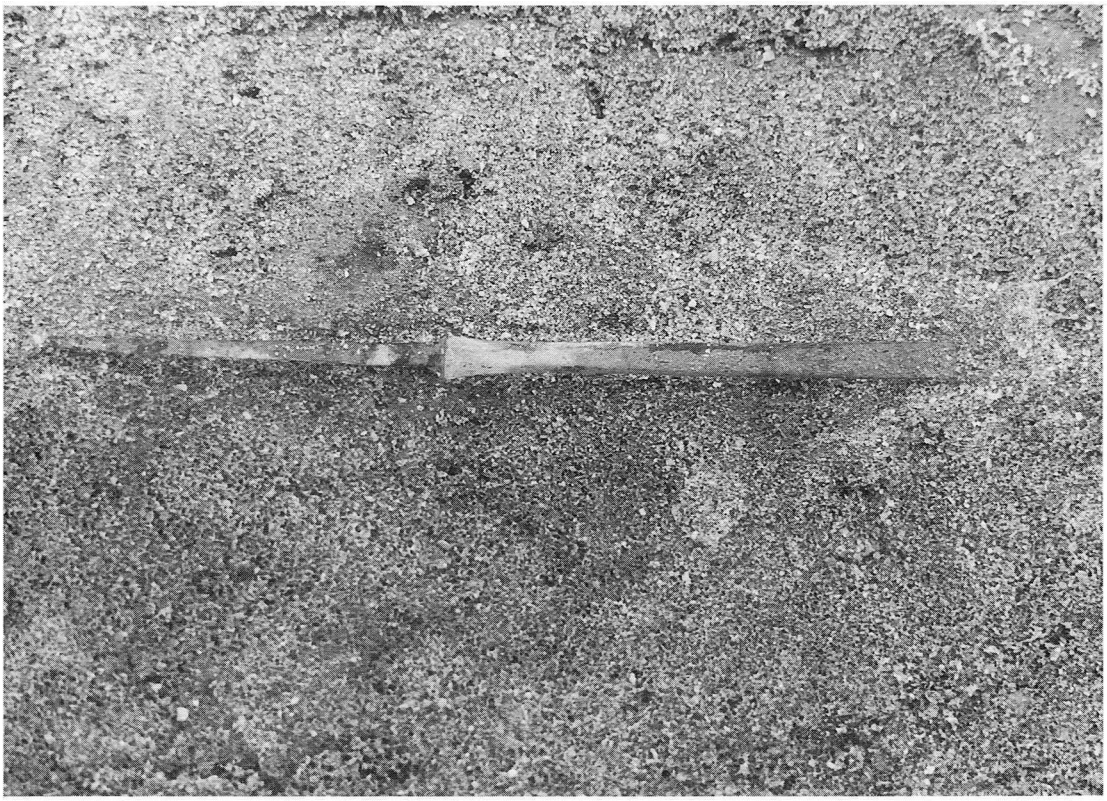
瓦器椀　出土状況

土師皿　出土状況

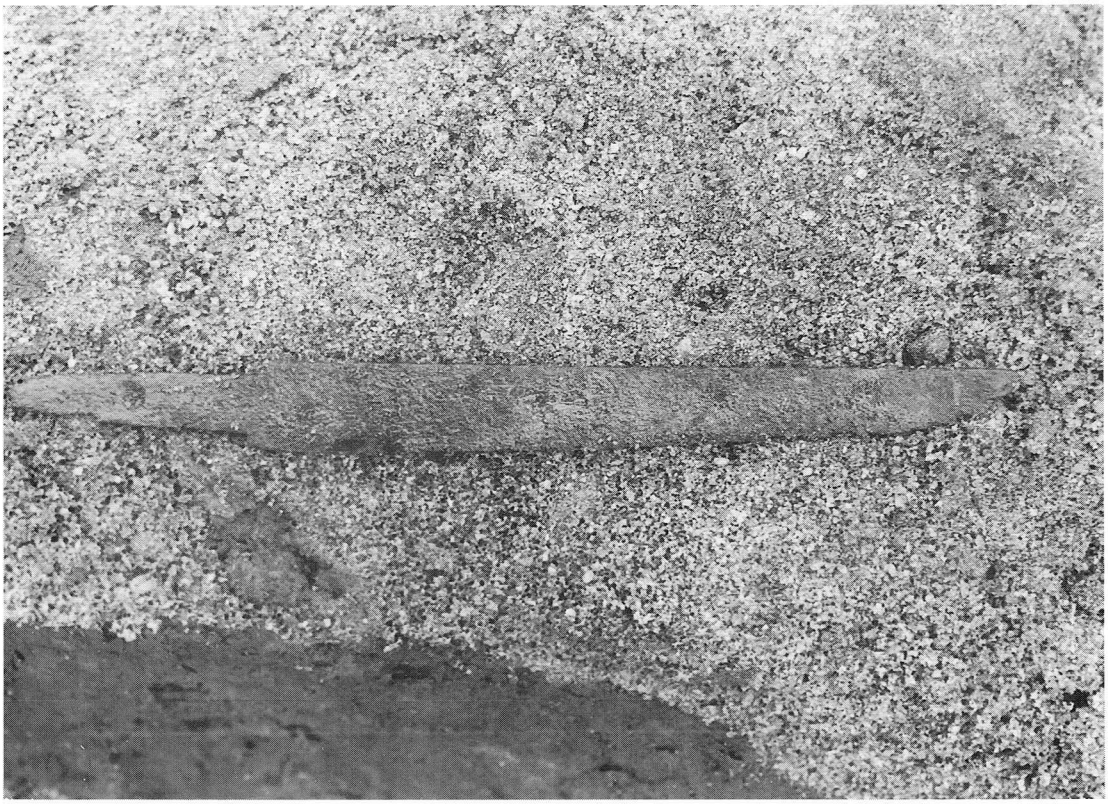


スプーン状木製品　出土状況

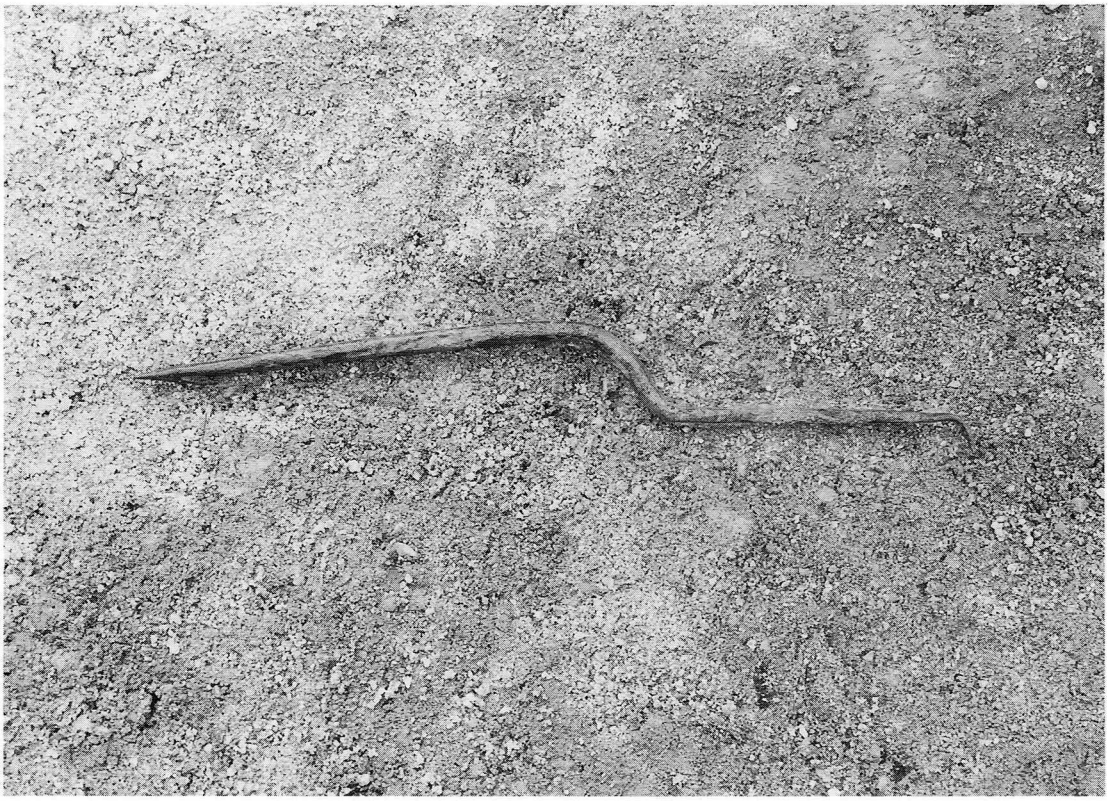
木製品（槌の子）　出土状況



鉄製品（鉄鏃）　出土状況



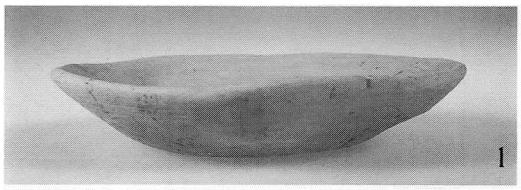
鉄製品（短刀）　出土状況



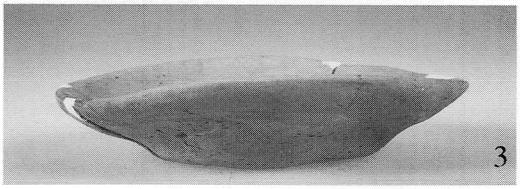
鉄製品（やす）　出土状況

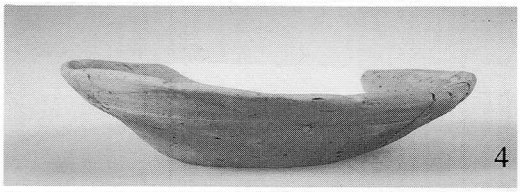
獣骨　出土状況

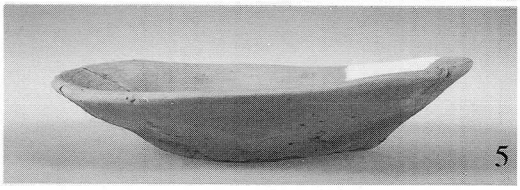
図版11　土壙1　出土遺物（土師皿）

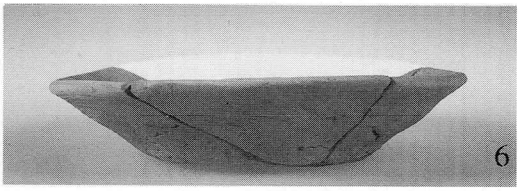

1

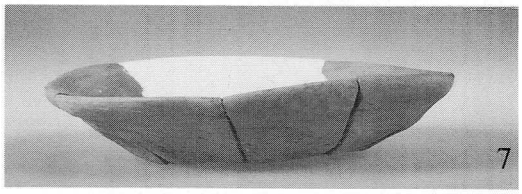
2

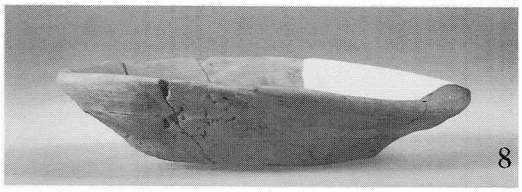

3

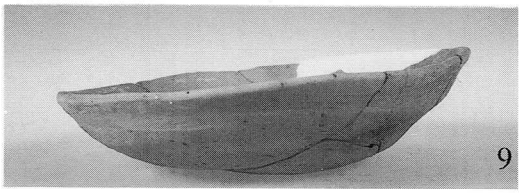

4

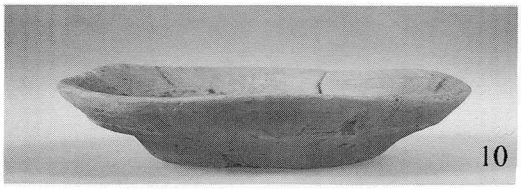

5

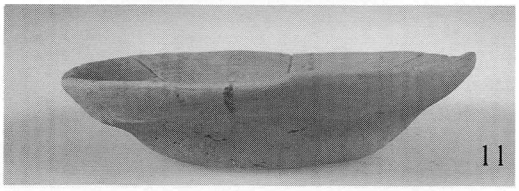

6

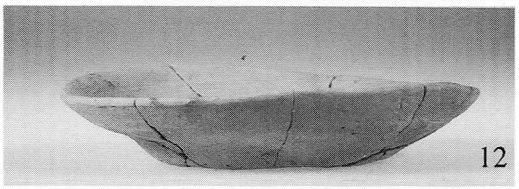

7

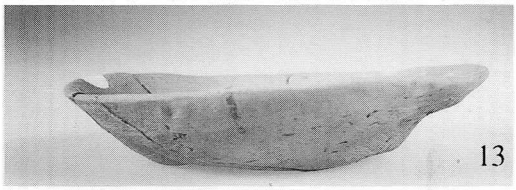

8

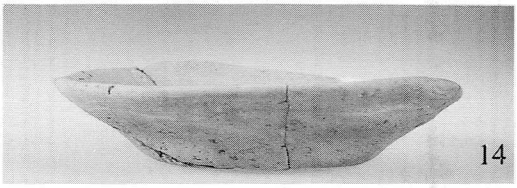

9

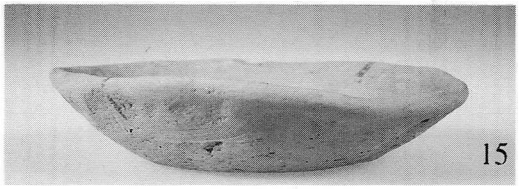

10

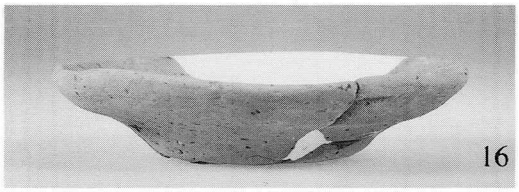

11

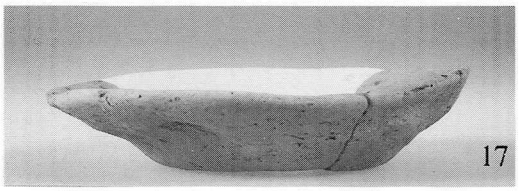

12

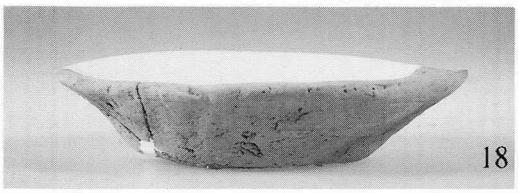

13


14

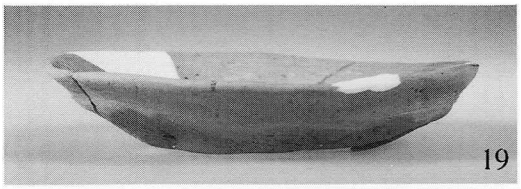

15

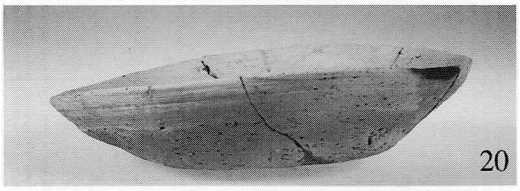

16

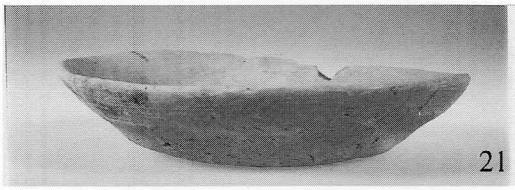

17

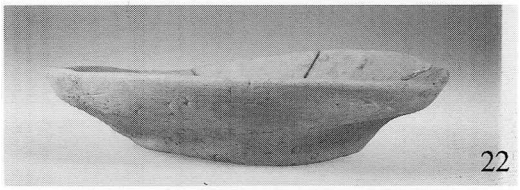

18

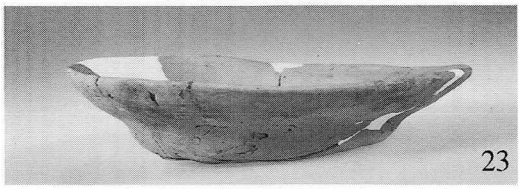
図版12　土壙1　出土遺物（土師皿）

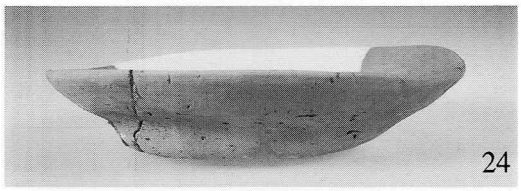

19

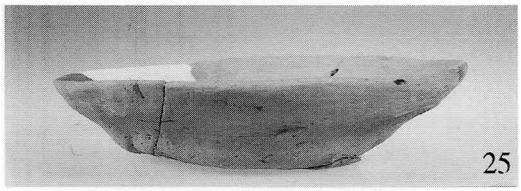

20

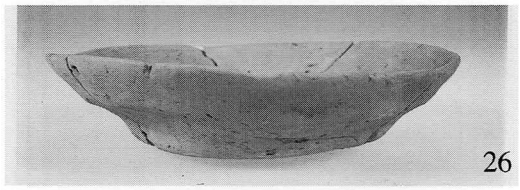

21

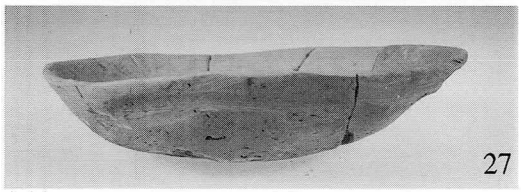

22

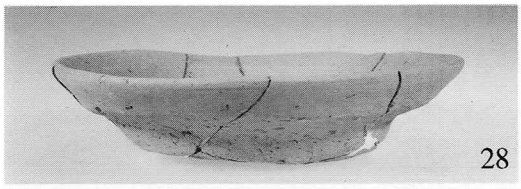

23


24

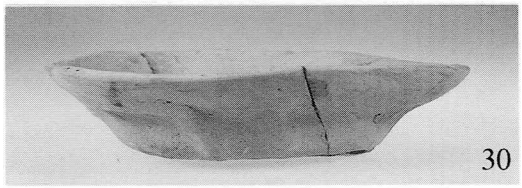

25

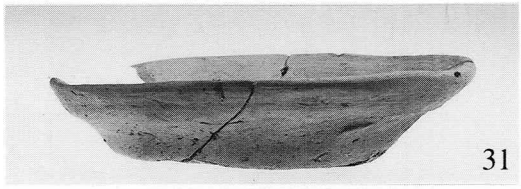

26

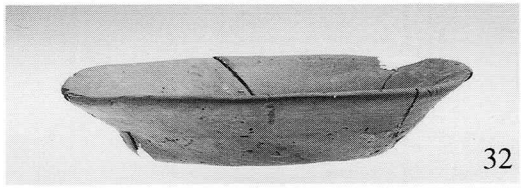

27

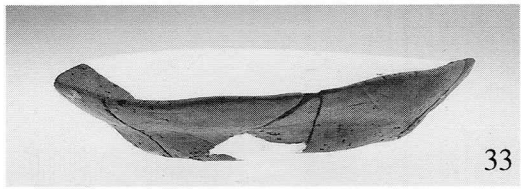

28

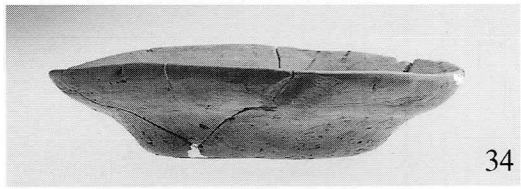
29

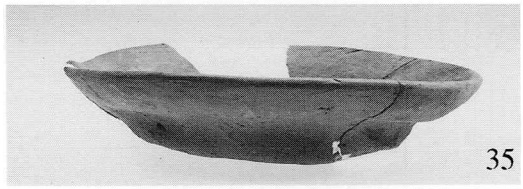

30

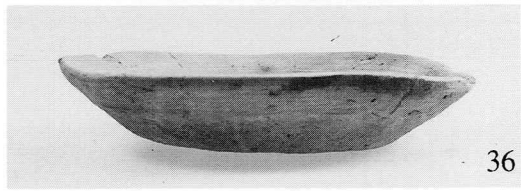

31


32

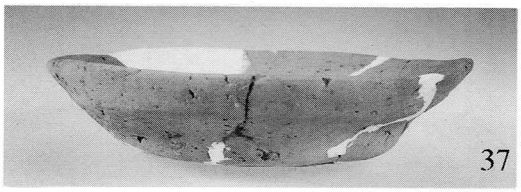

33

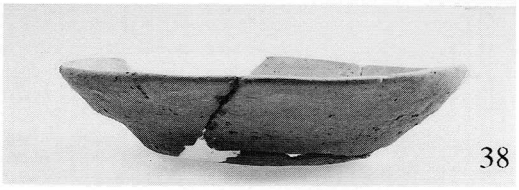

34

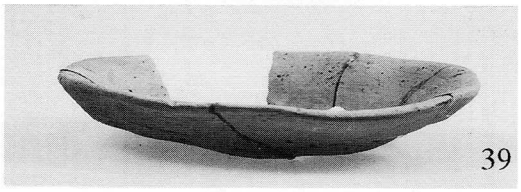

35

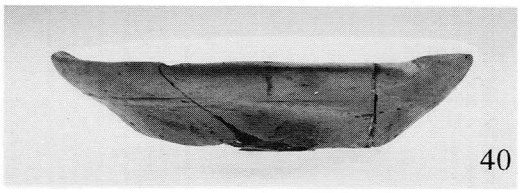

36

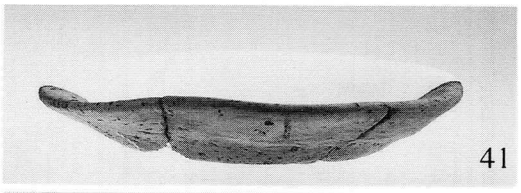
図版13　土壙1　出土遺物（土師皿）

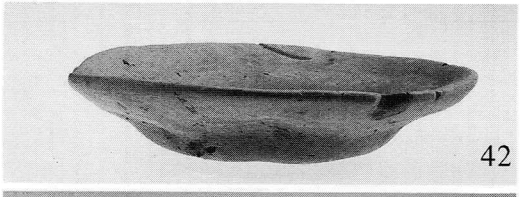

37

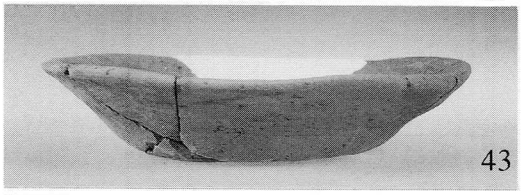

38

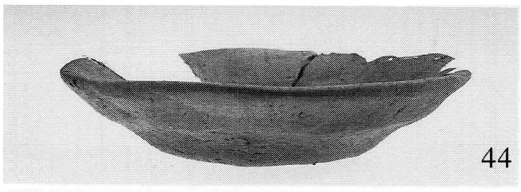

39

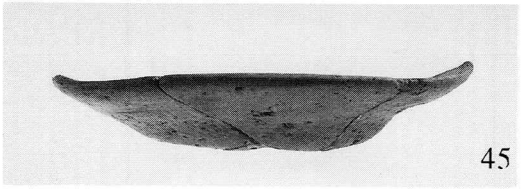

40

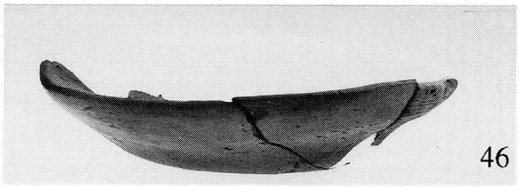

41

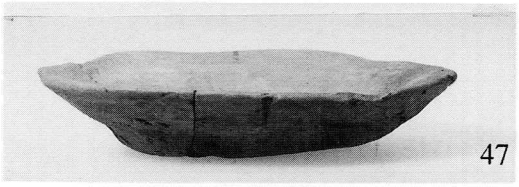

42

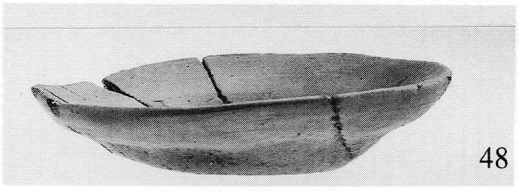

43

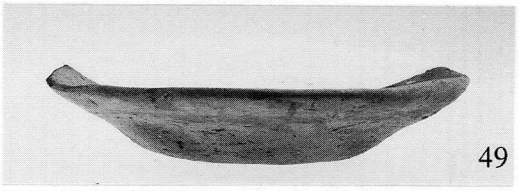

44

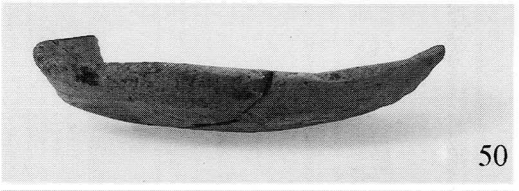

45

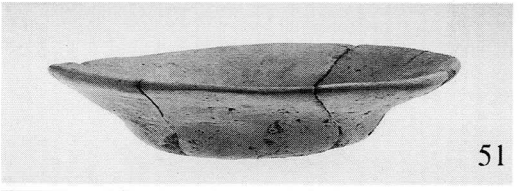

46

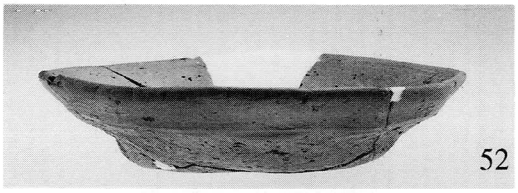

47

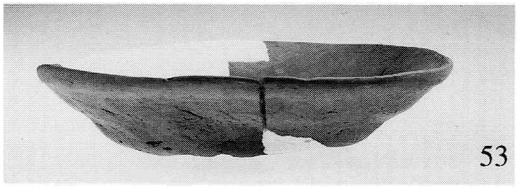

48

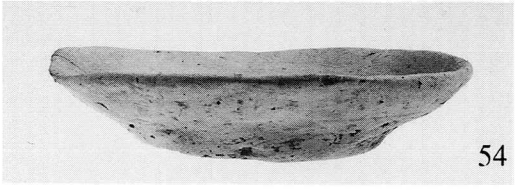

49


50

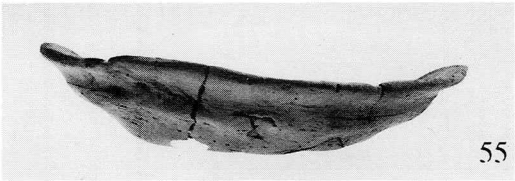

51

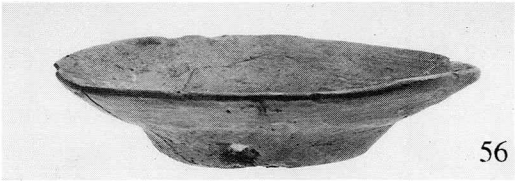

52

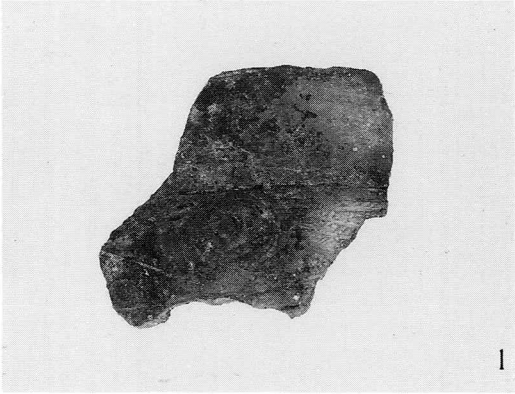

53

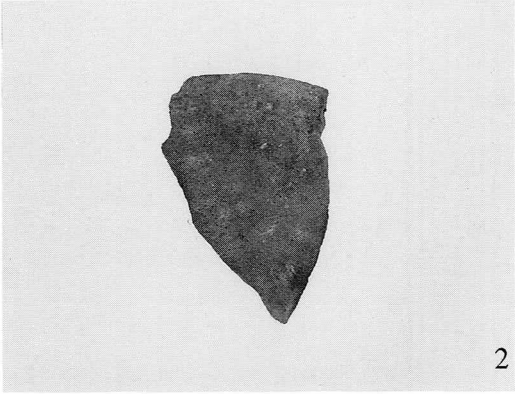

54

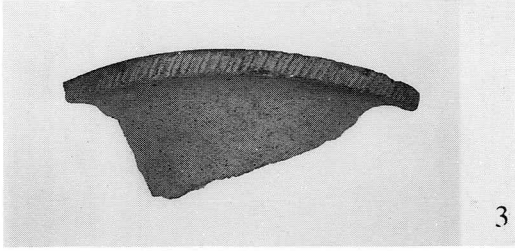
図版14　土壙1　出土遺物（土師皿）第3・第4層出土遺物（縄文・弥生土器）

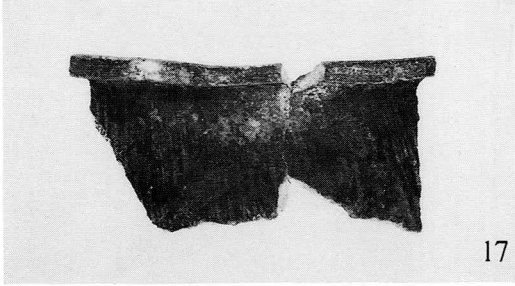

55

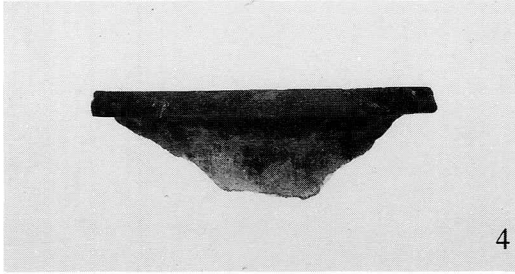

56

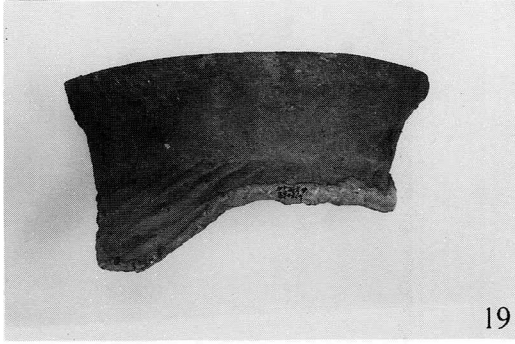

1

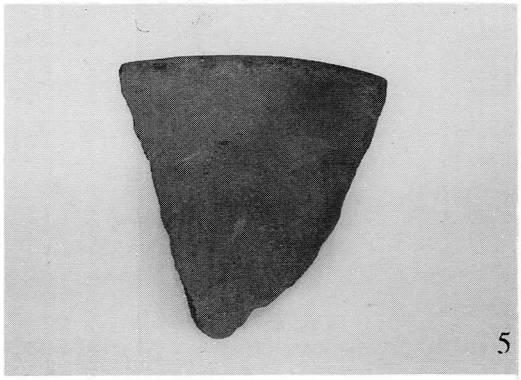

2

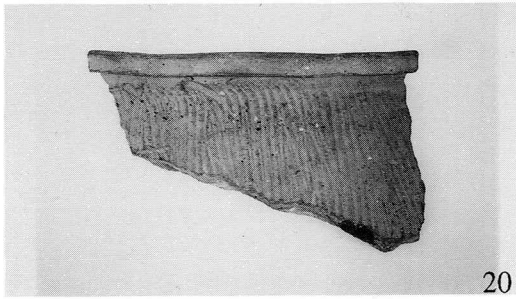

3


17

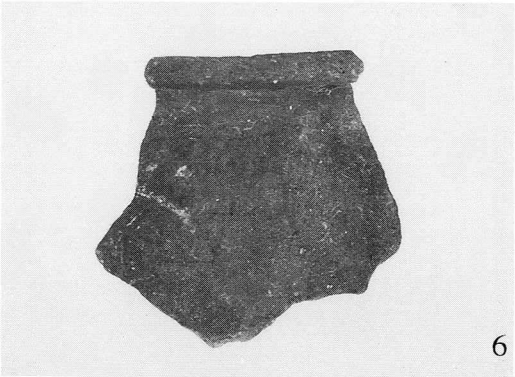

4


19

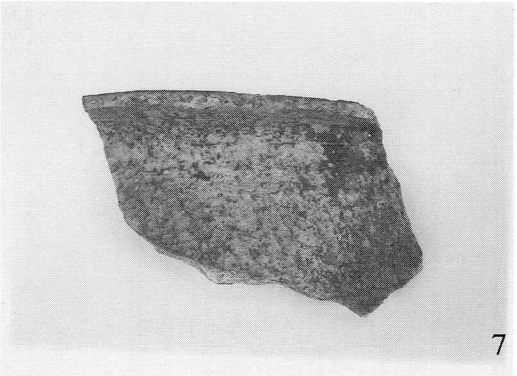

5

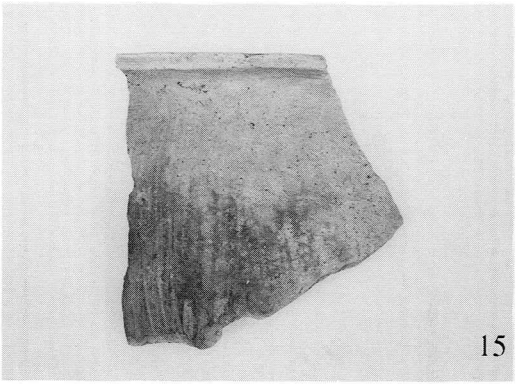

20

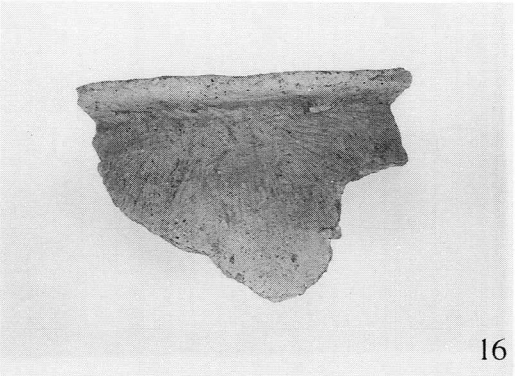
図版15　第3・第4層出土遺物（弥生土器）

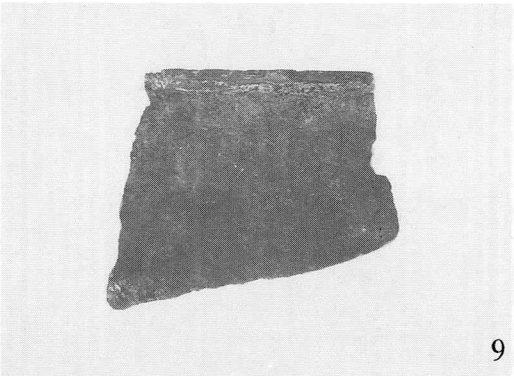

6

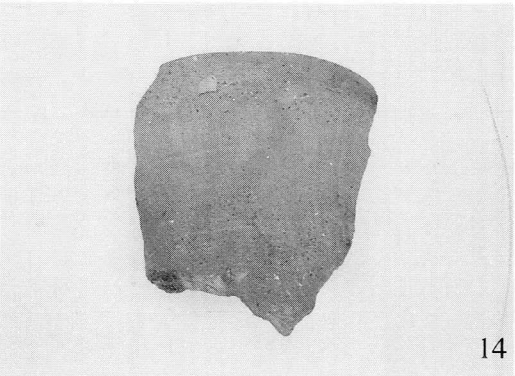
13

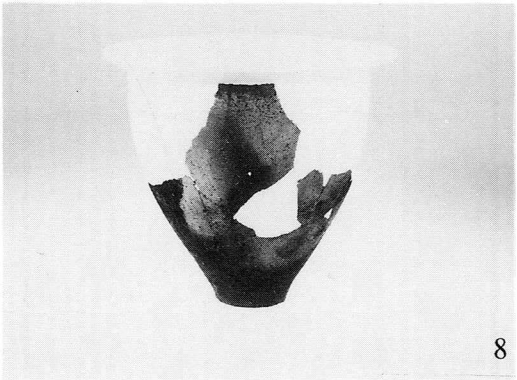

7


15

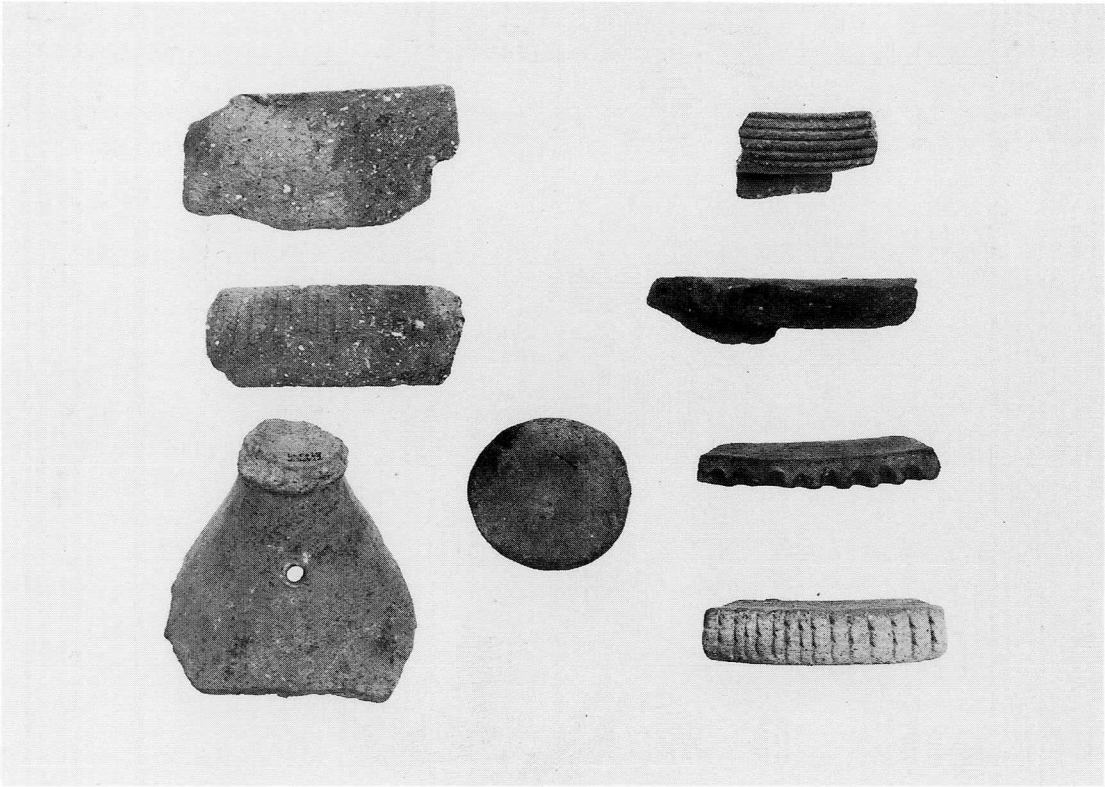

16

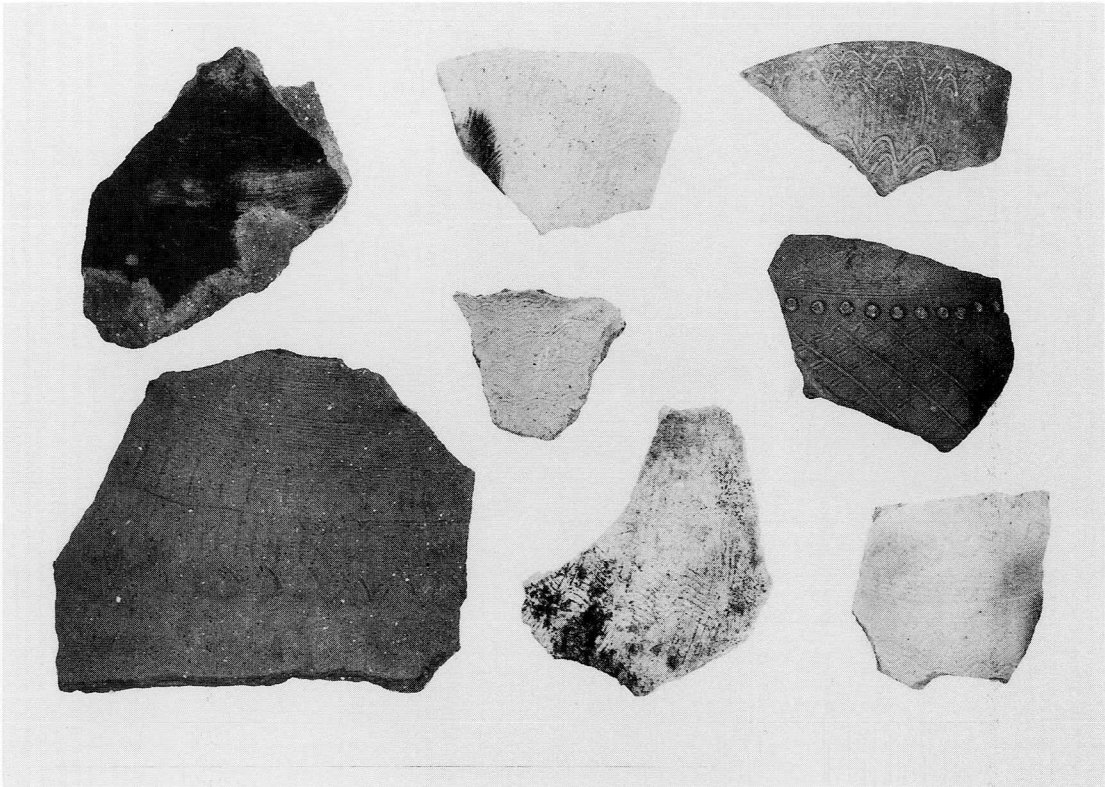

9


14

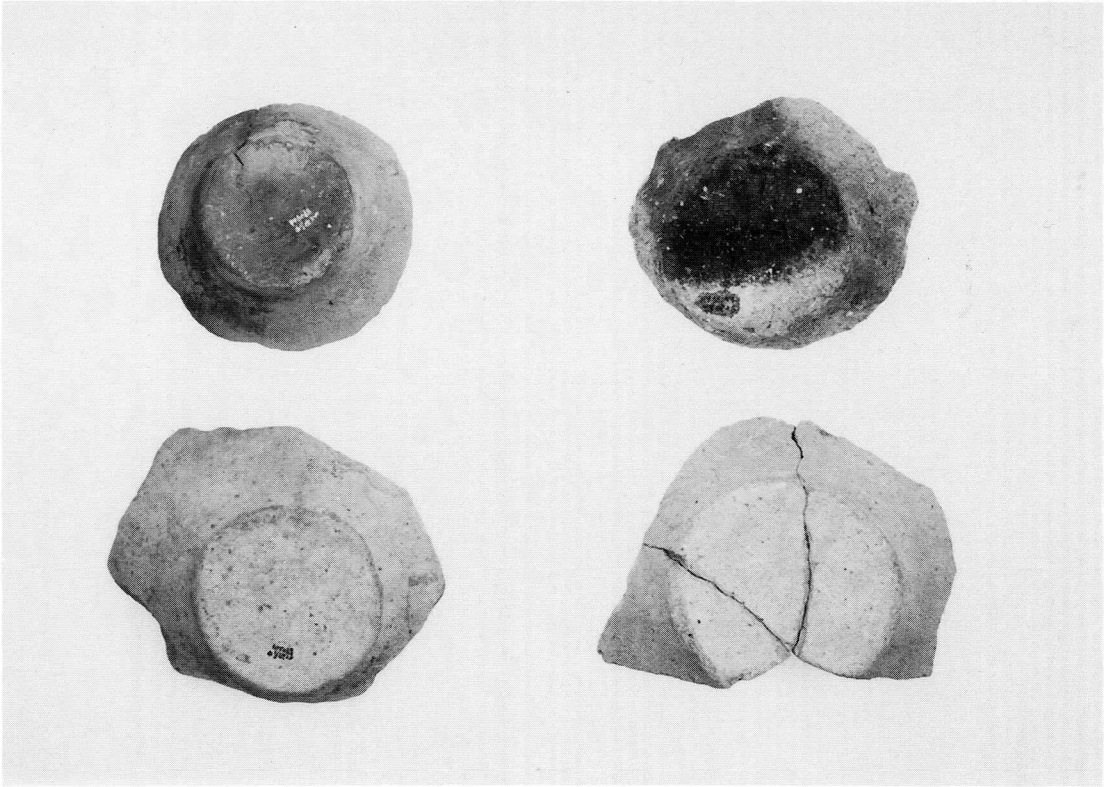

8

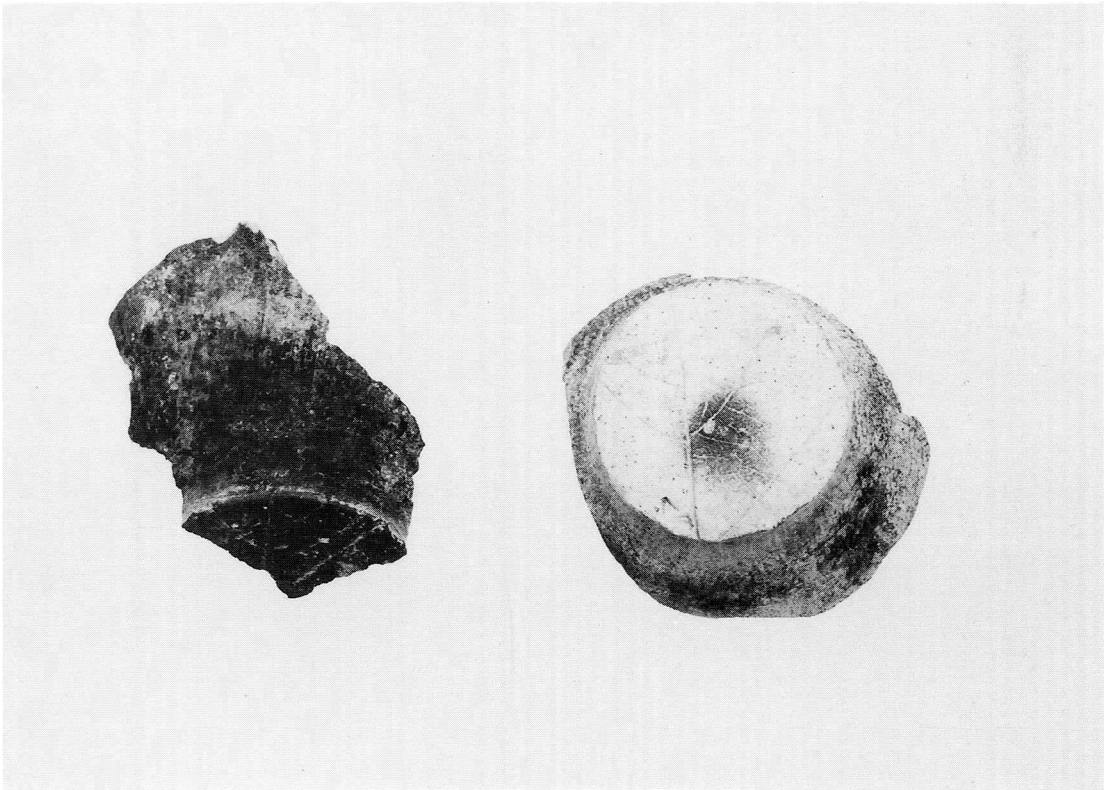
図版16　第3・第4層出土遺物（弥生土器）



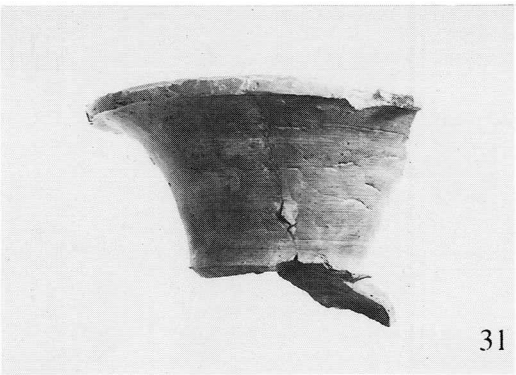


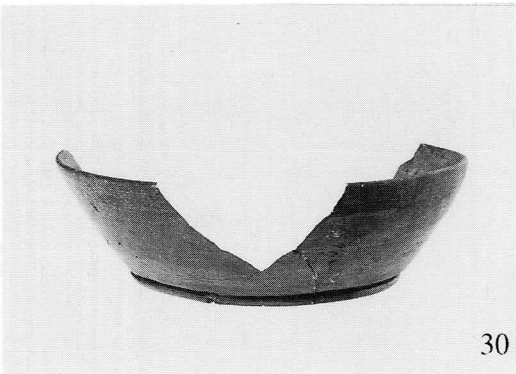
図版17　第3・第4層出土遺物（弥生土器）

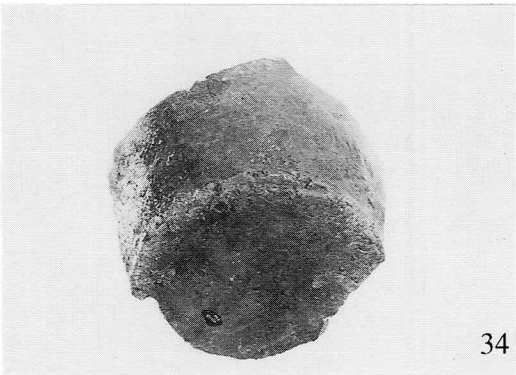


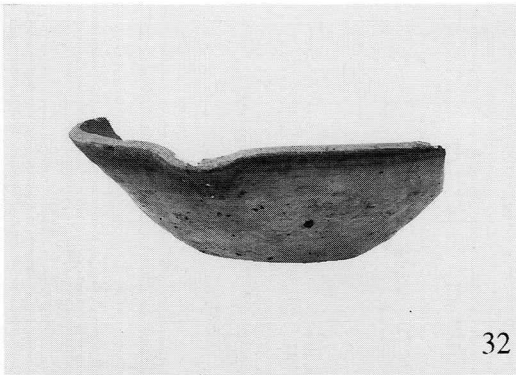


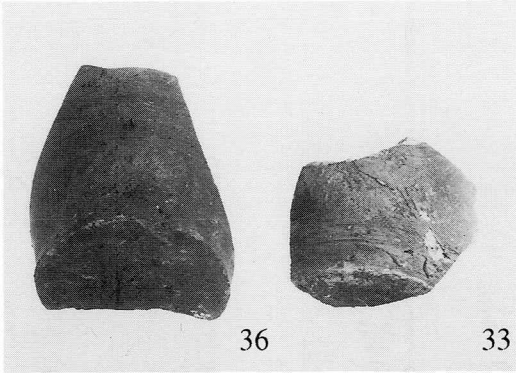
図版18　第3・第4層出土遺物（須恵器）

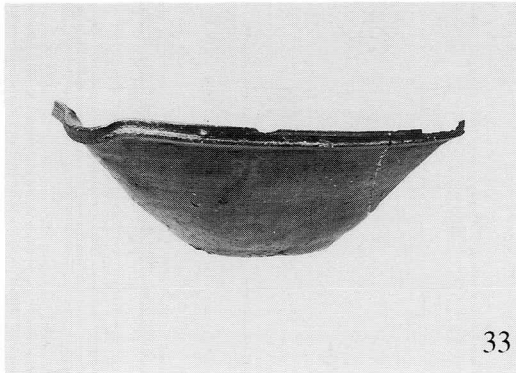


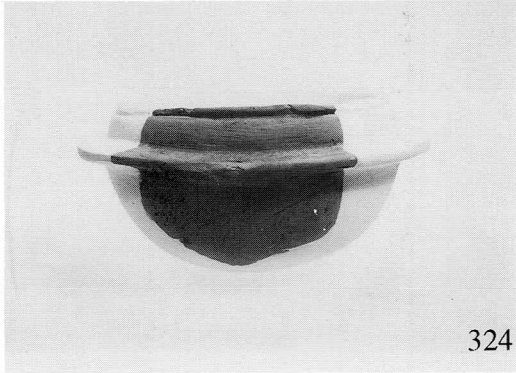




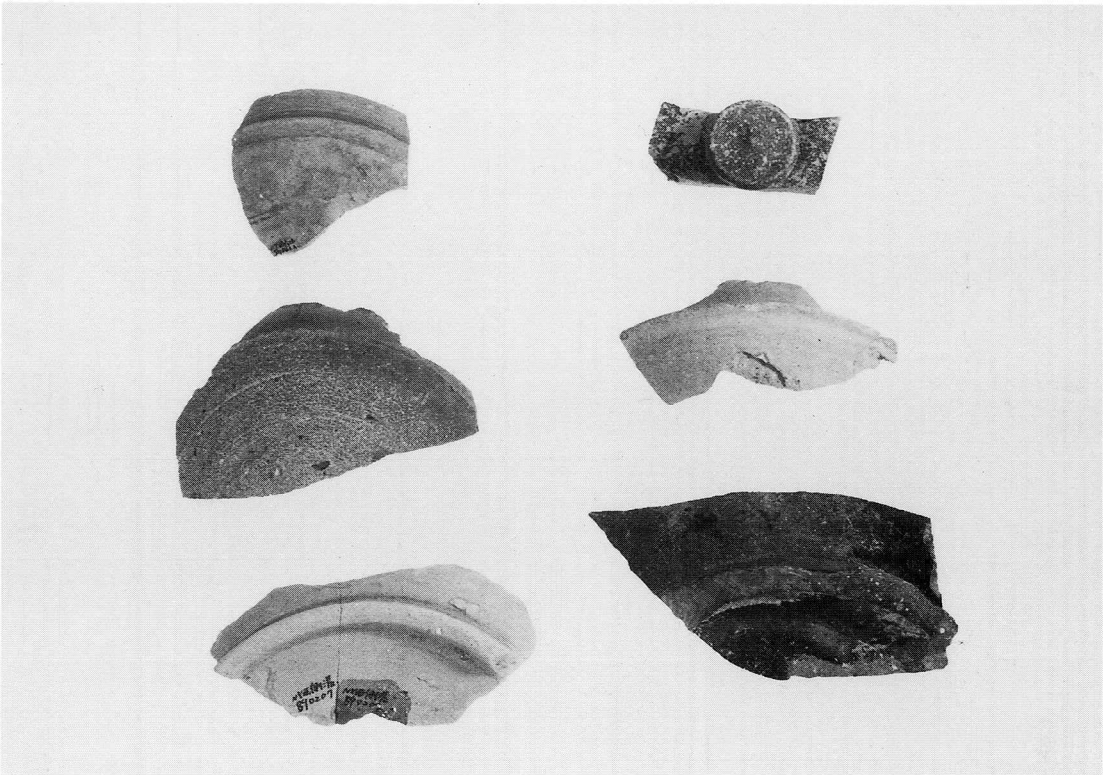


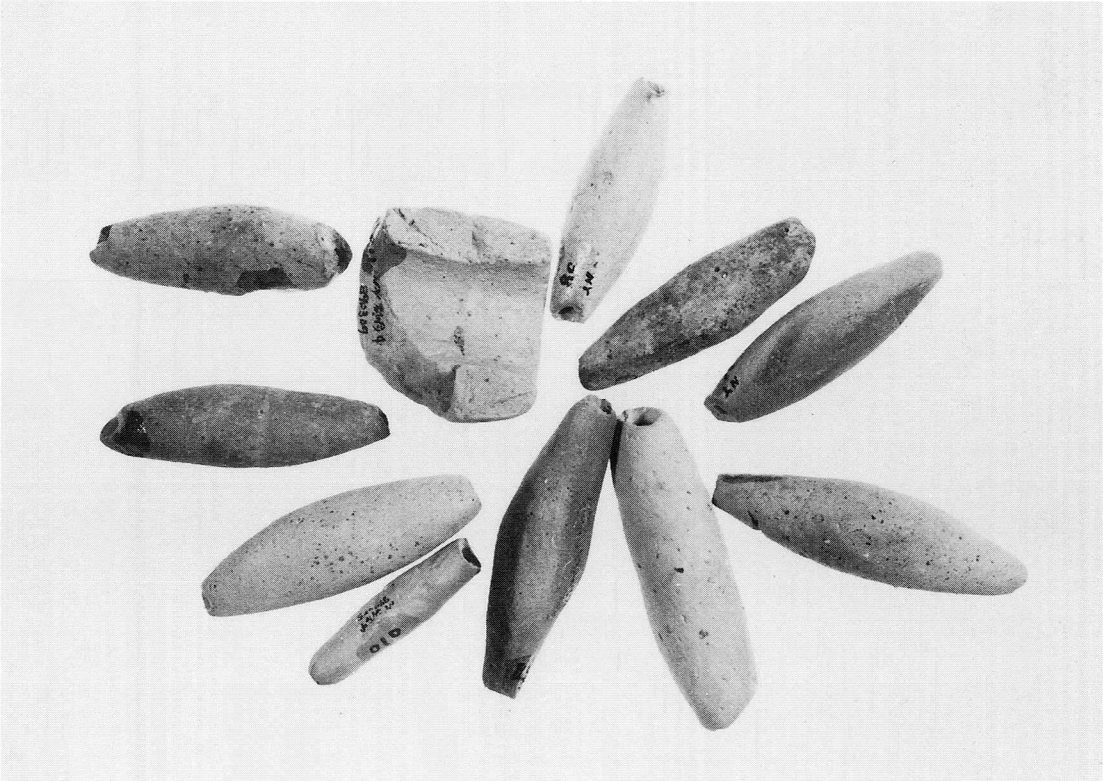




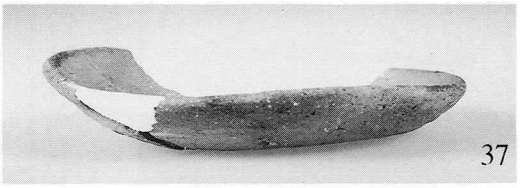


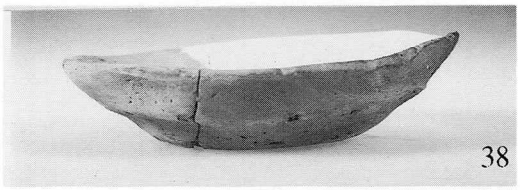
図版19　第3・第4層出土遺物（須恵器（上）、土錘）

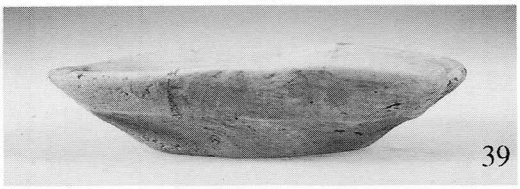


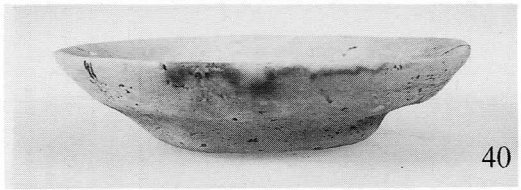


図版20　第3・第4層出土遺物（土師皿）

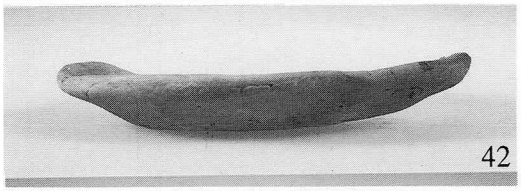

37

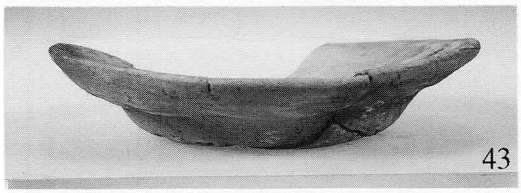

38

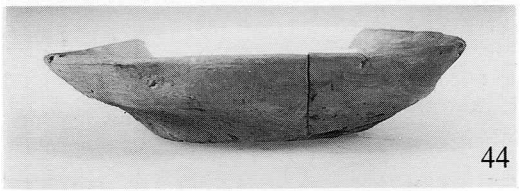

39

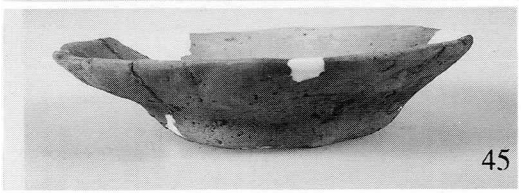

40

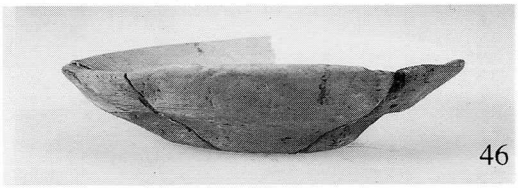
41

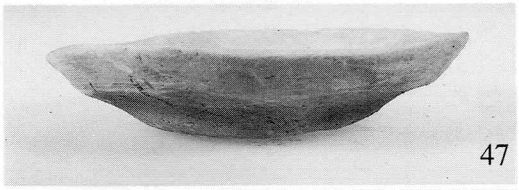

42

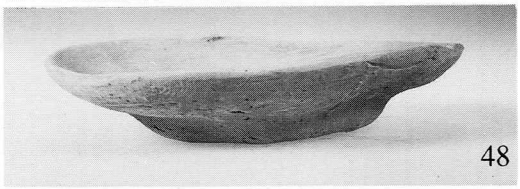

43


44

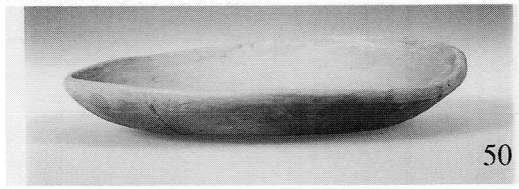

45

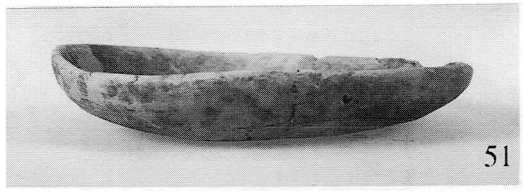

46


47

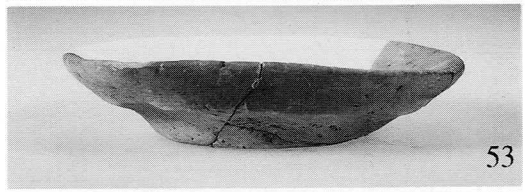

48

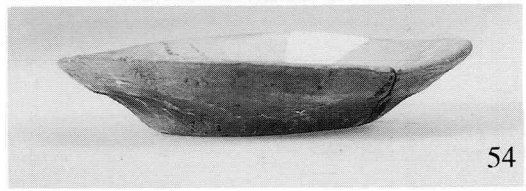
49


50

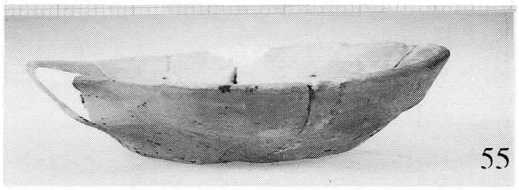

51

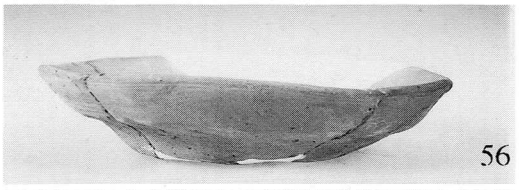
52

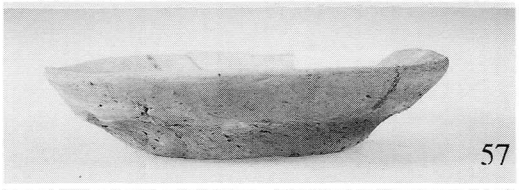

53

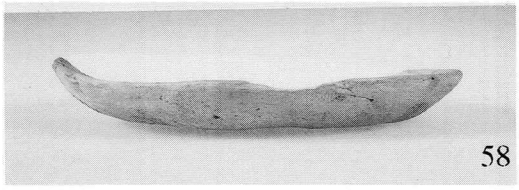

54

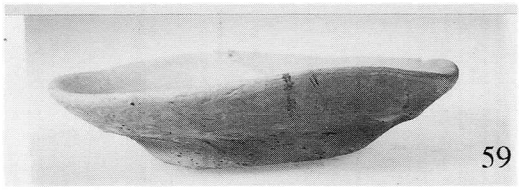
図版21　第3・第4層出土遺物（土師皿）

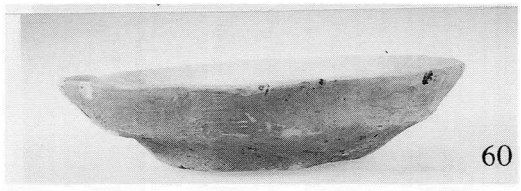

55

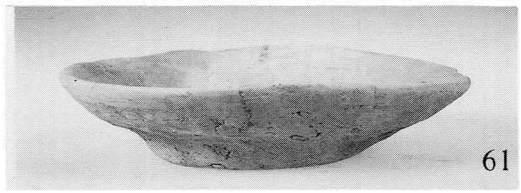

56

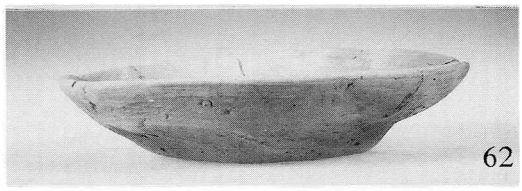

57

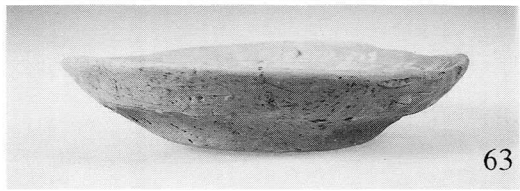

58


59

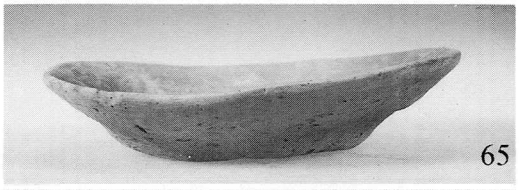

60

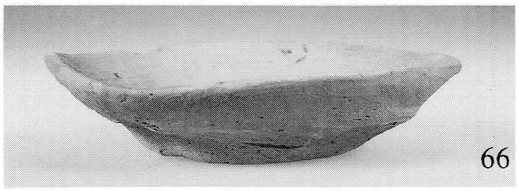

61

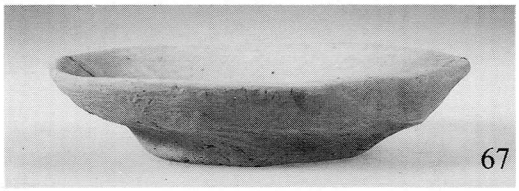

62

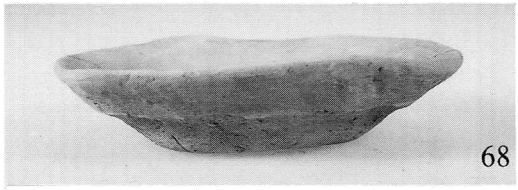

63

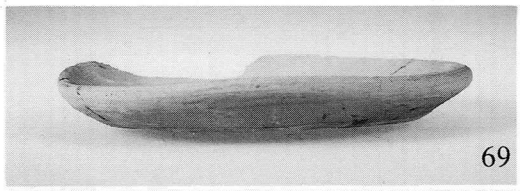
64

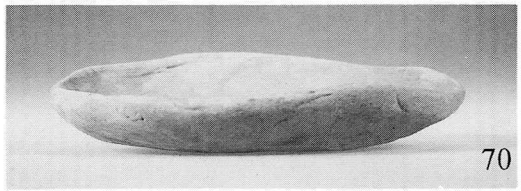

65

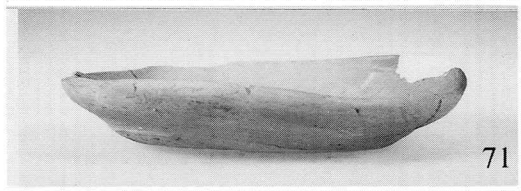

66

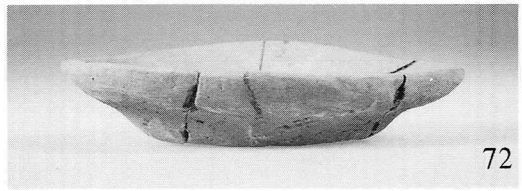

67


68

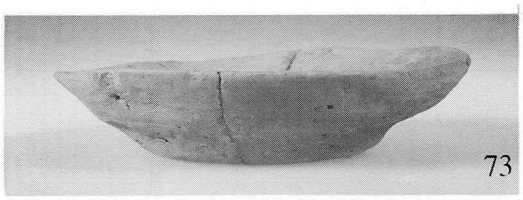

69

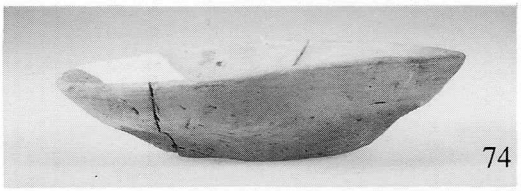

70


71


72

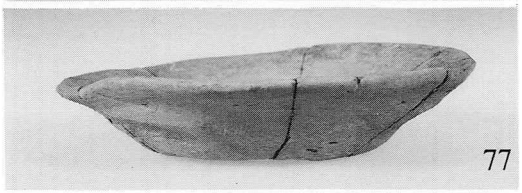
図版22　第3・第4層出土遺物（土師皿）

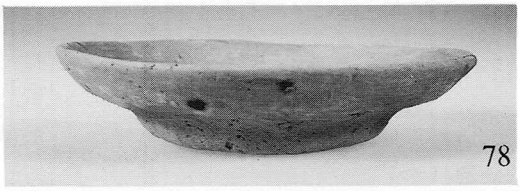

73

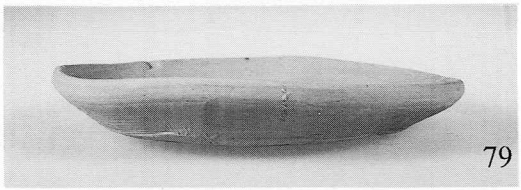

74

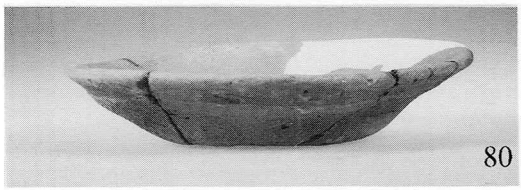
75

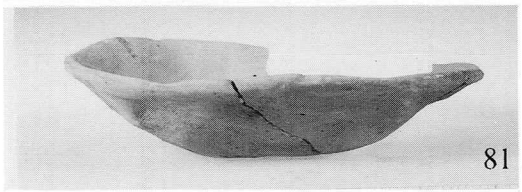
76

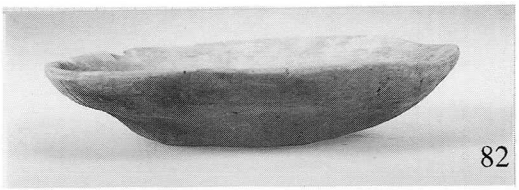

77


78

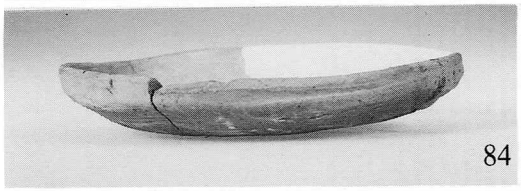

79

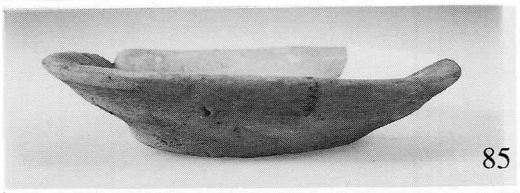

80

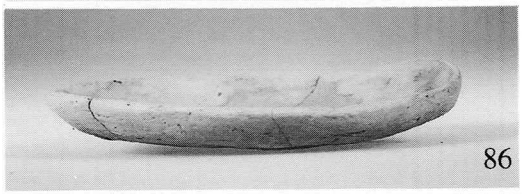

81


82

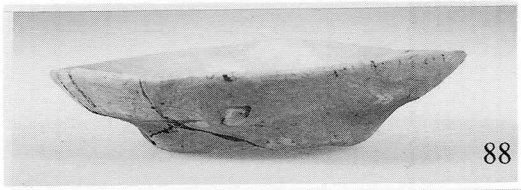
83

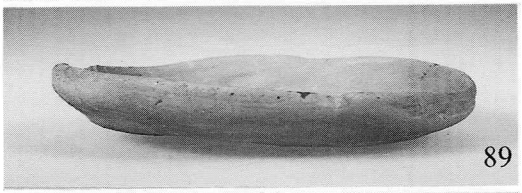

84

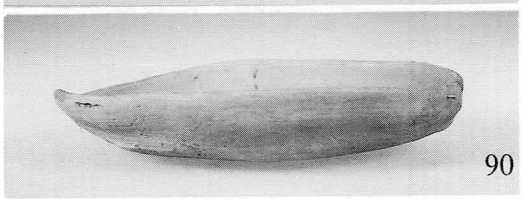

85


86

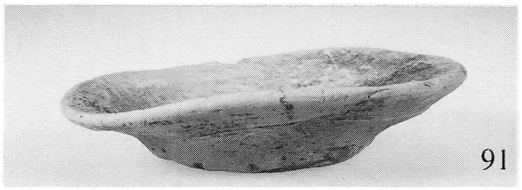
87


88

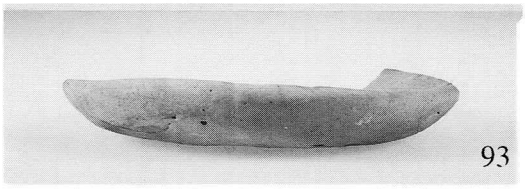

89

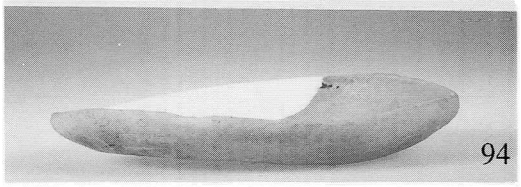

90

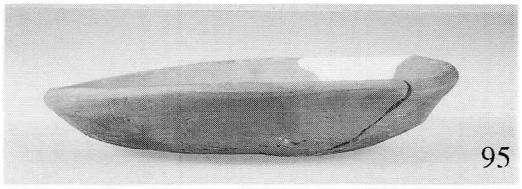
図版23　第3・第4層出土遺物（土師皿）

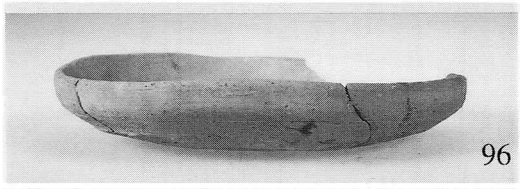

91

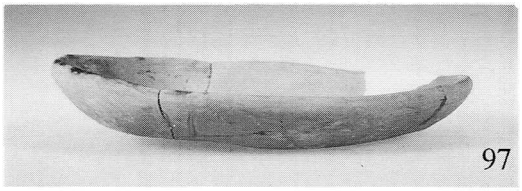
92

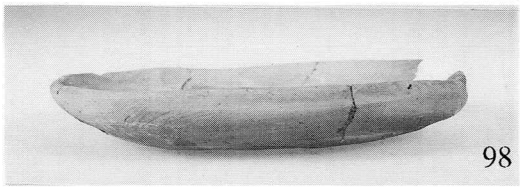

93

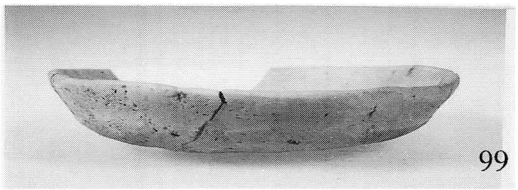

94

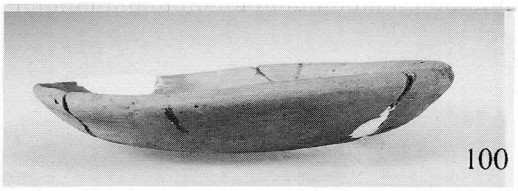

95

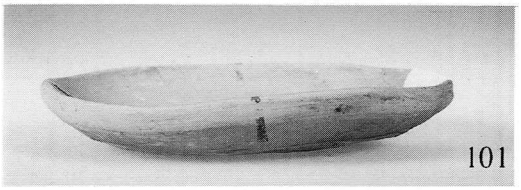

96


97

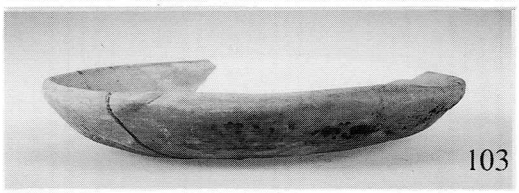

98

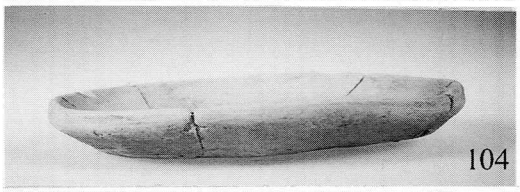

99

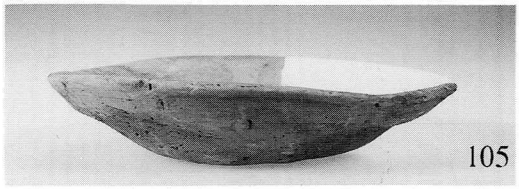

100

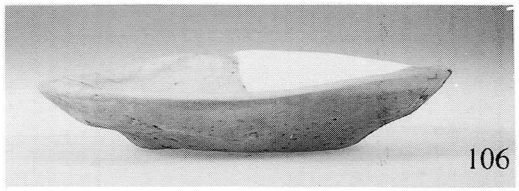

101

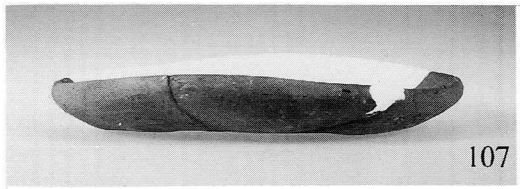
102

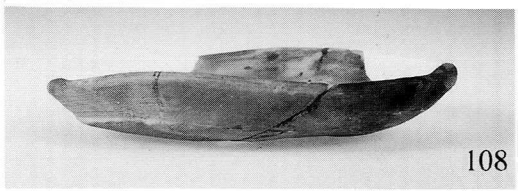

103


104


105

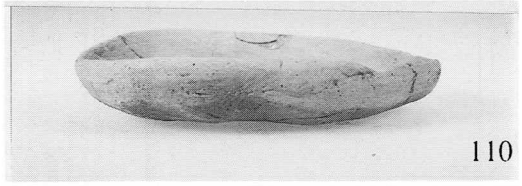

106

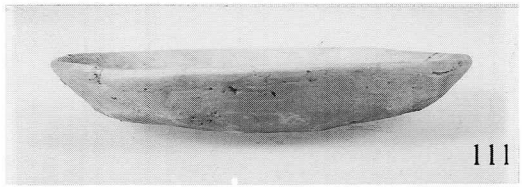

107

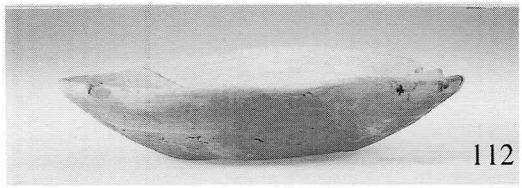

108

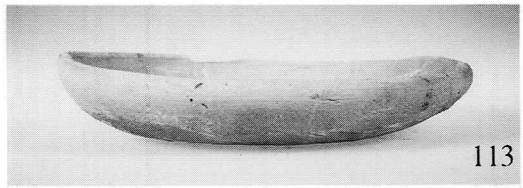
図版24　第3・第4層出土遺物（土師皿）

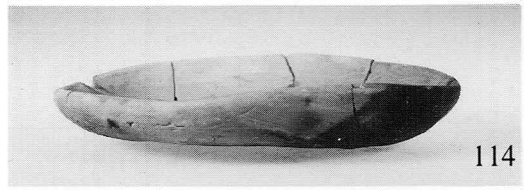
109

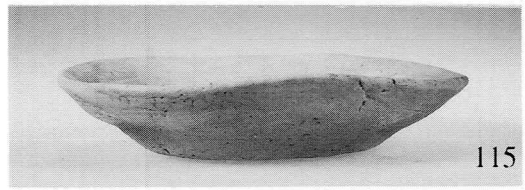

110

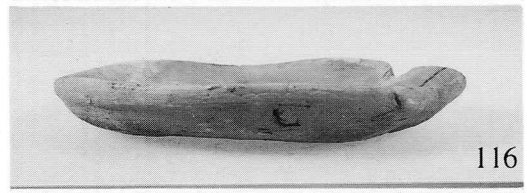

111

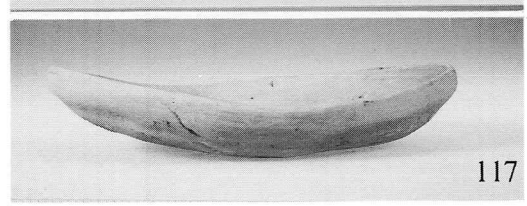

112

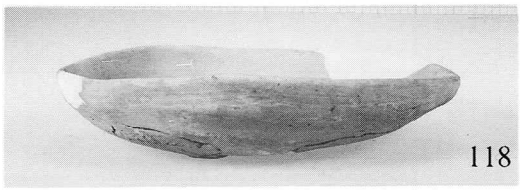

113

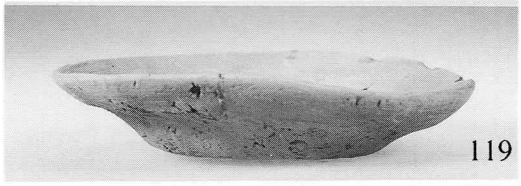

114

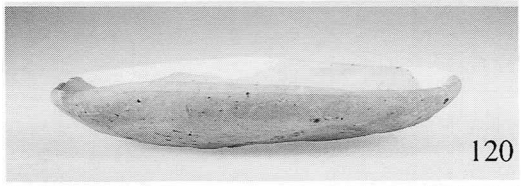

115

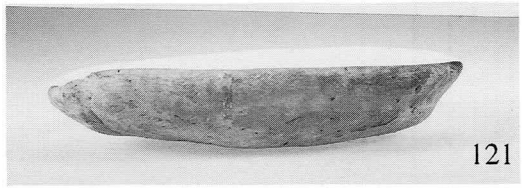

116

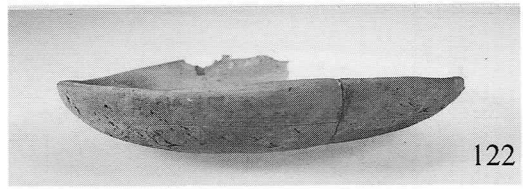

117

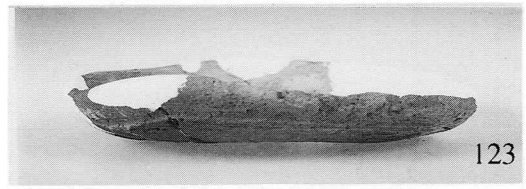

118


119

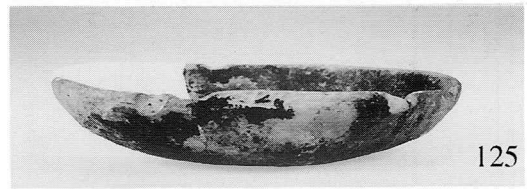

120

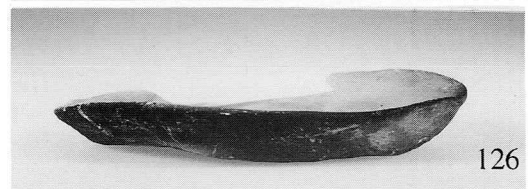

121


122

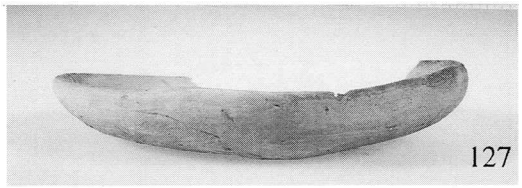

123

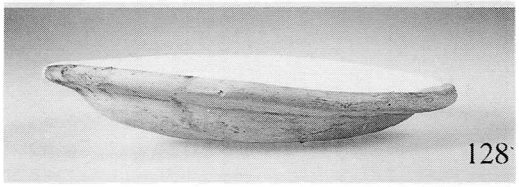
124

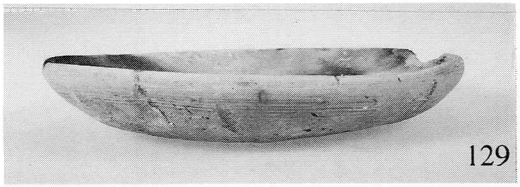

125

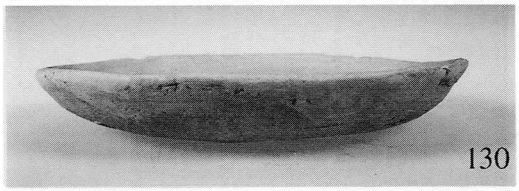

126

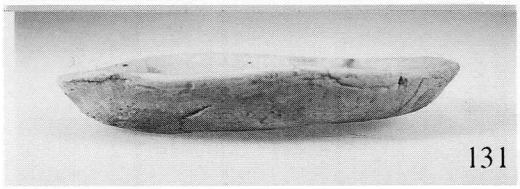
図版25　第3・第4層出土遺物（土師皿）

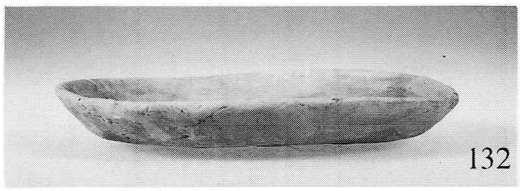

127


128

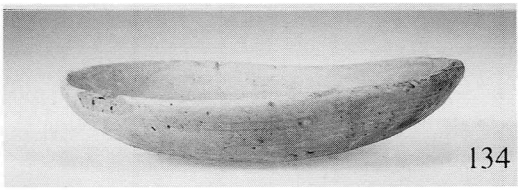

129

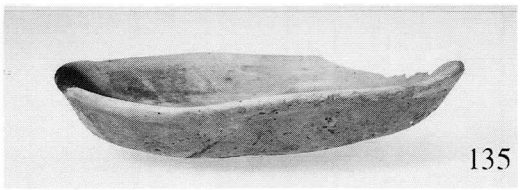

130

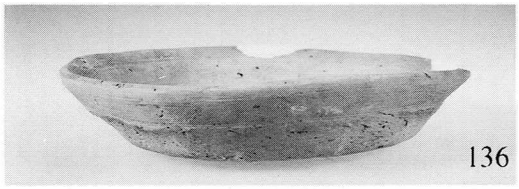

131

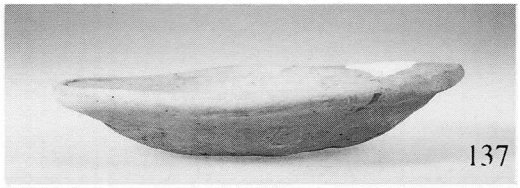

132

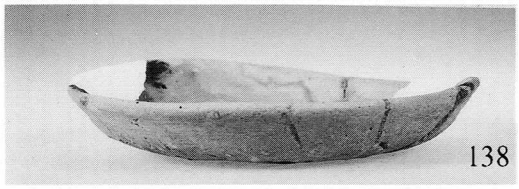
133

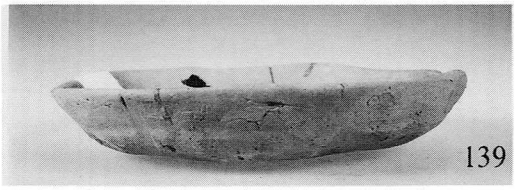

134

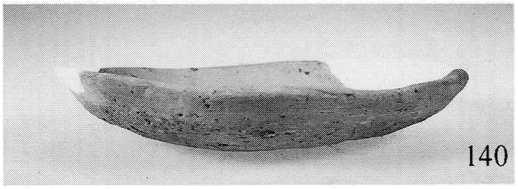

135

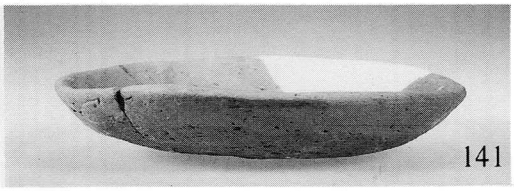

136

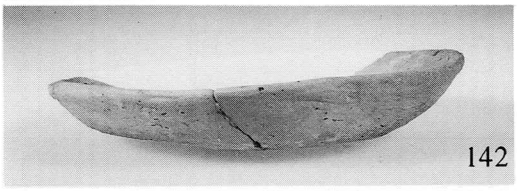

137

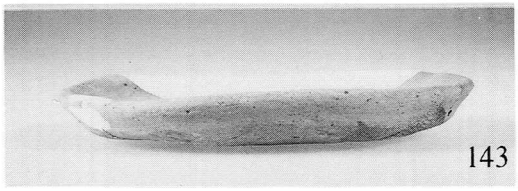

138

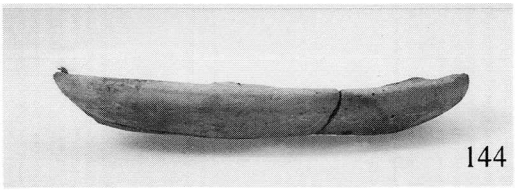

139

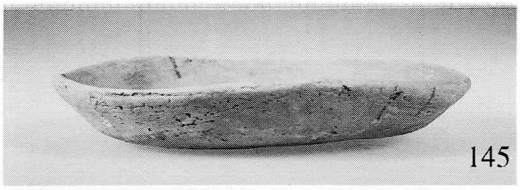

140


141

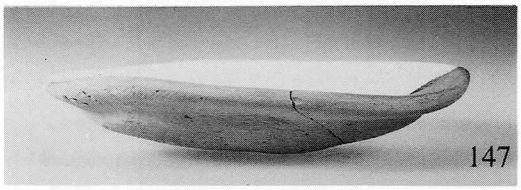

142

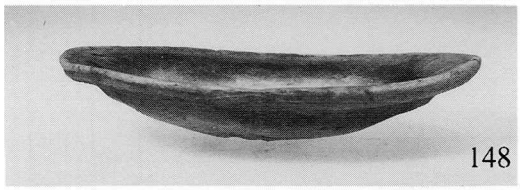

143


144

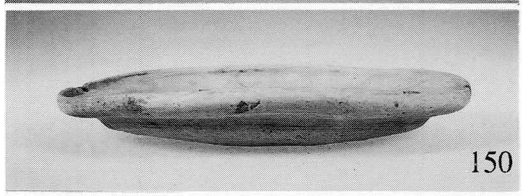

145

146


147

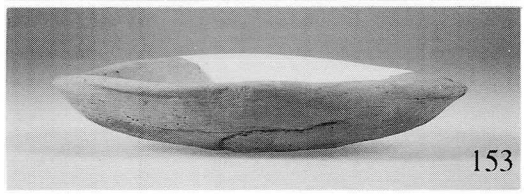

148

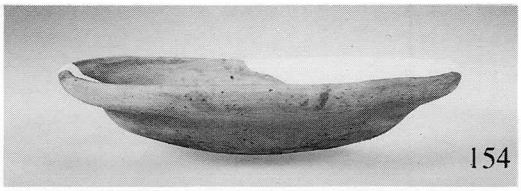
149

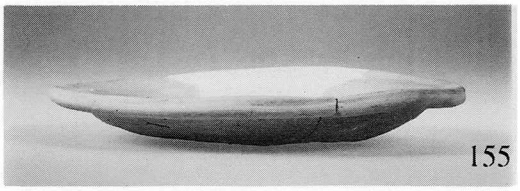

150

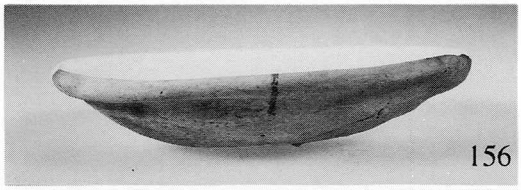
151

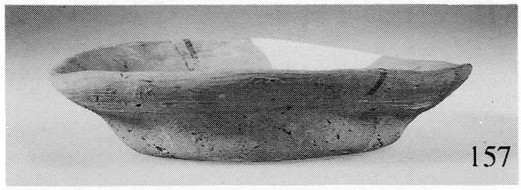
152

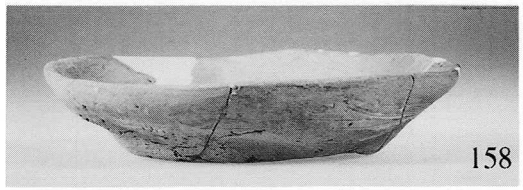

153

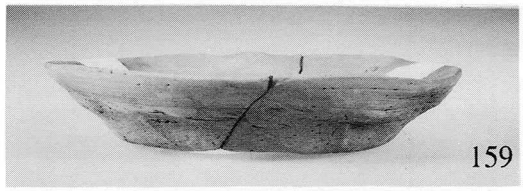

154


155

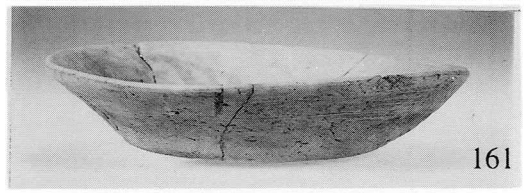

156


157


158

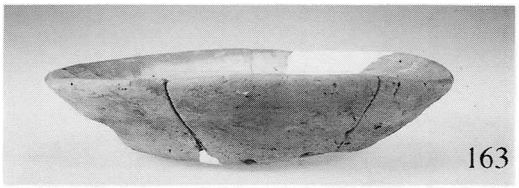

159

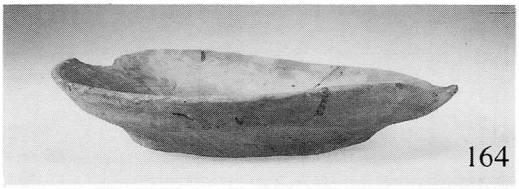
160

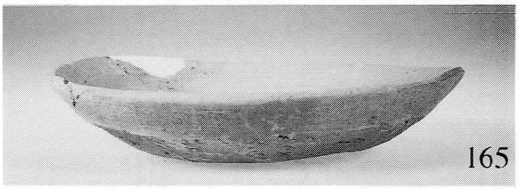

161

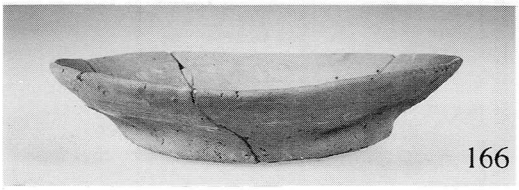
162

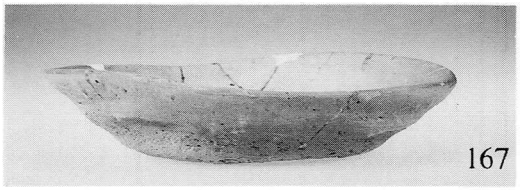
図版27　第3・第4層出土遺物（土師皿）

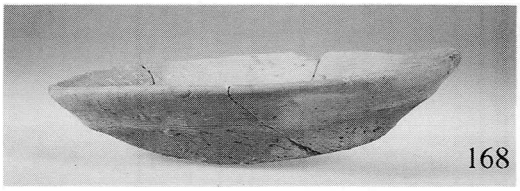

163

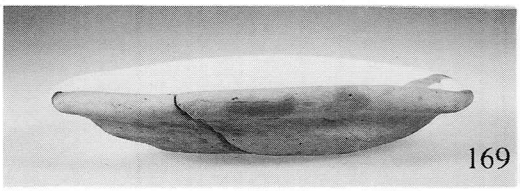

164

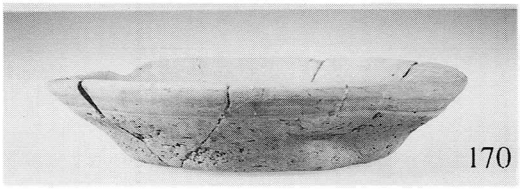

165


166

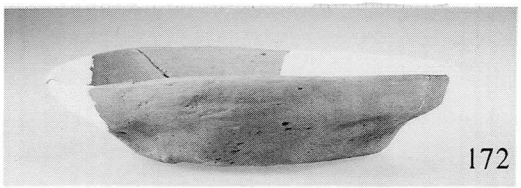

167

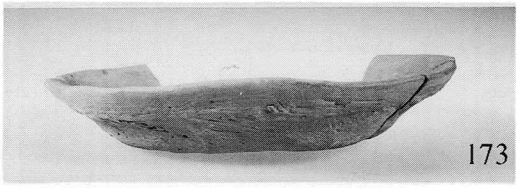

168

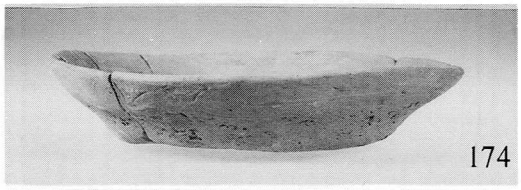

169

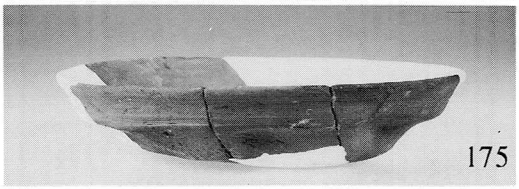

170

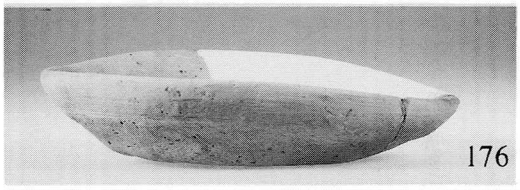
171

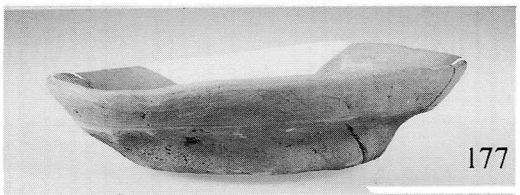

172

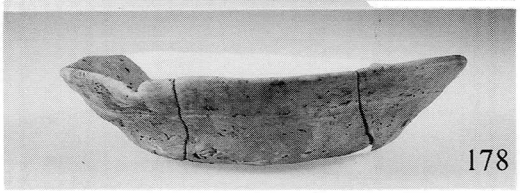

173

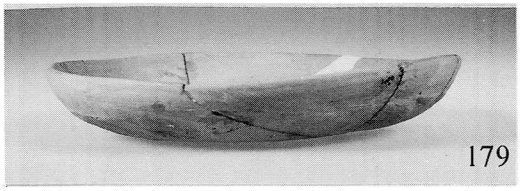

174

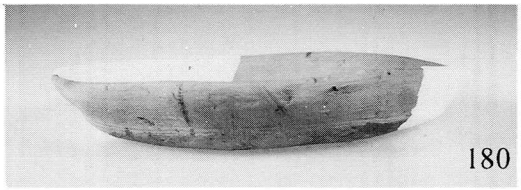

175


176

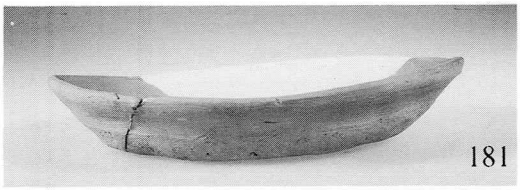

177

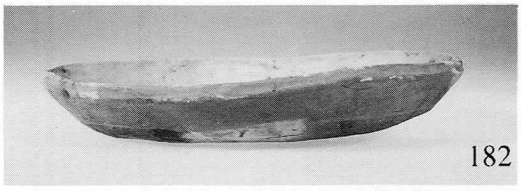

178

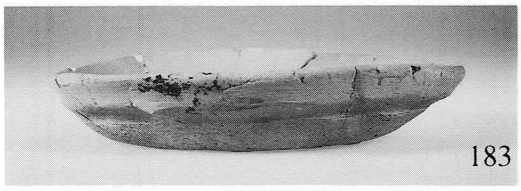

179


180

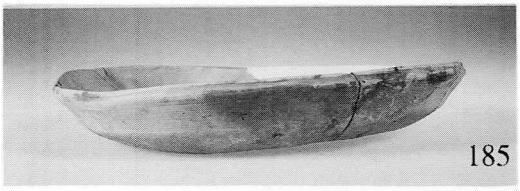
図版28　第3・第4層出土遺物（土師皿）

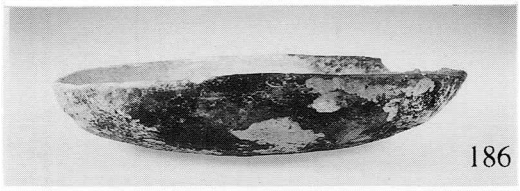

181

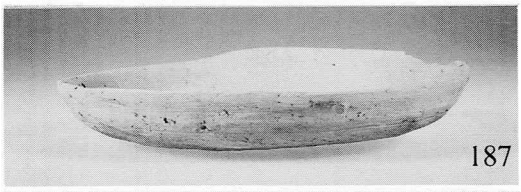

182

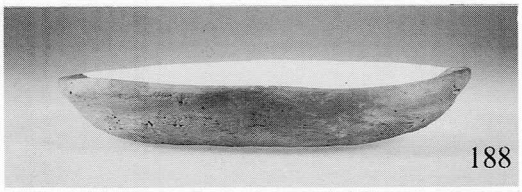

183

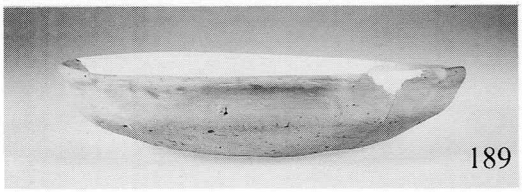
184

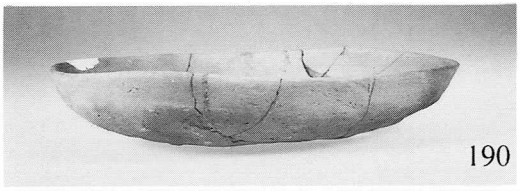

185

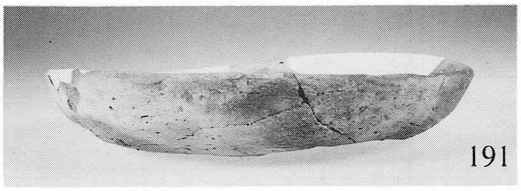

186

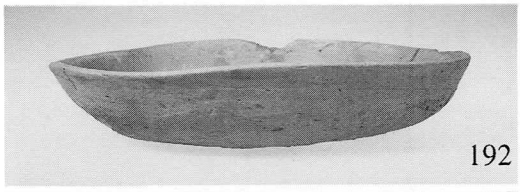

187

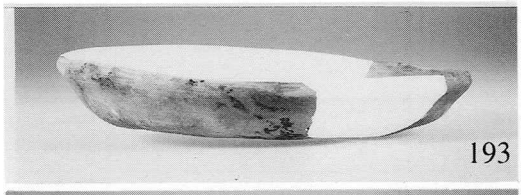

188

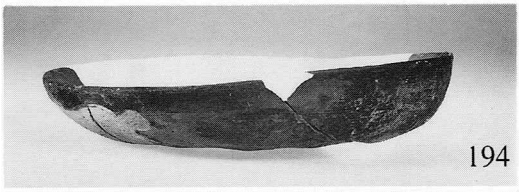

189

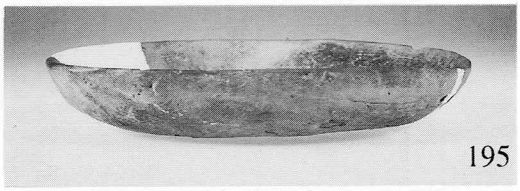

190

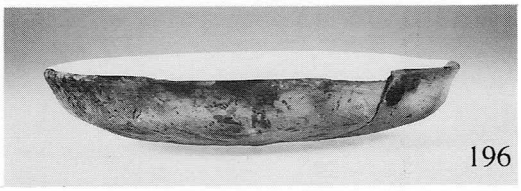

191

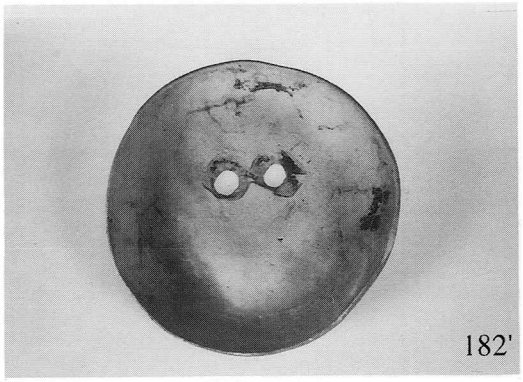

192


193

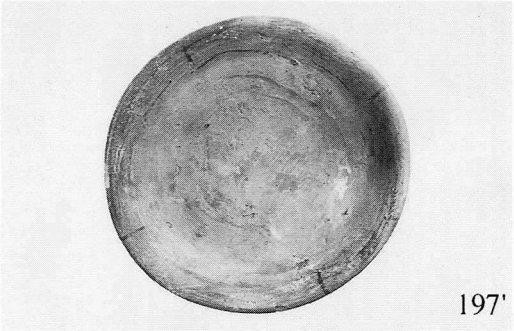

194

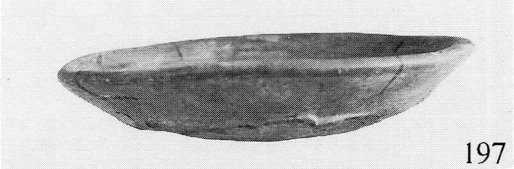

195


196

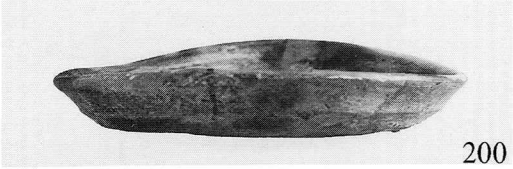

182'

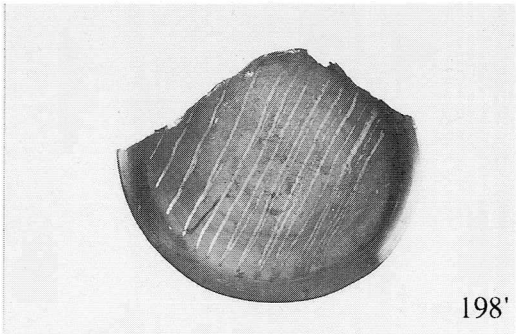
図版29　第3・第4層出土遺物（瓦器皿）

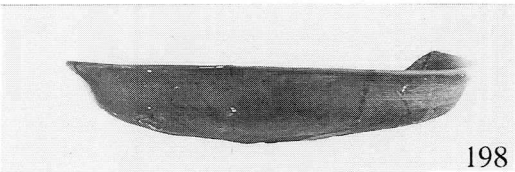

197'

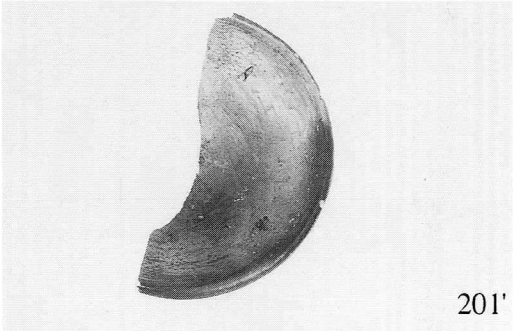

197

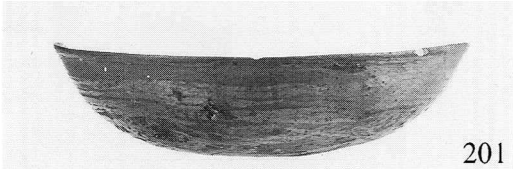
200'

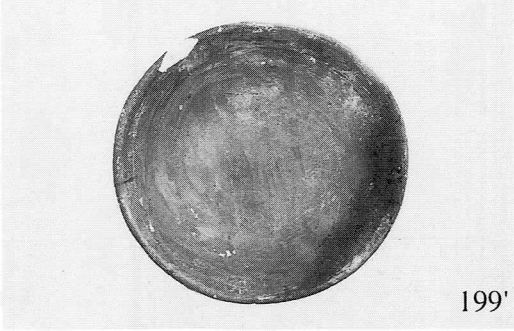

200

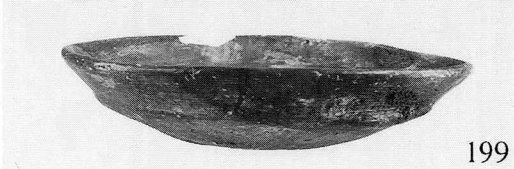

198'

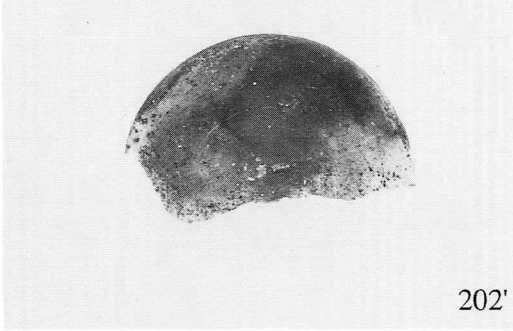

198

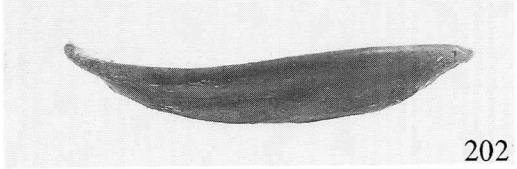

201'


201

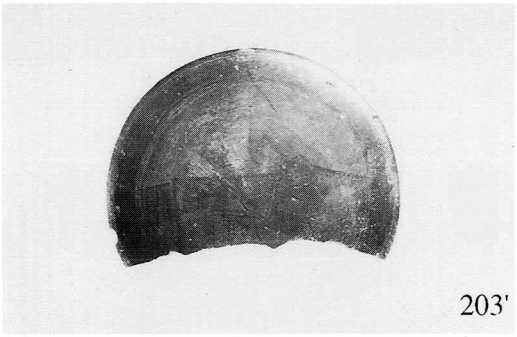

199'

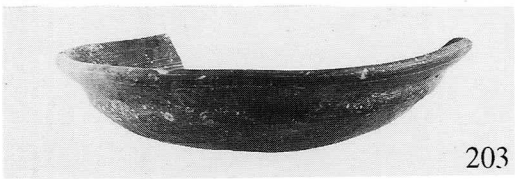

199

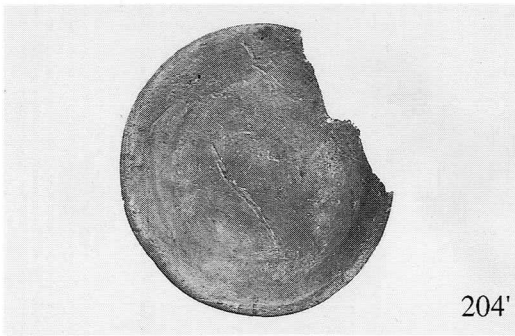

202'

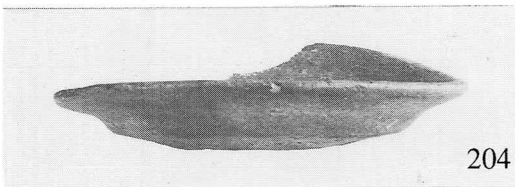

202

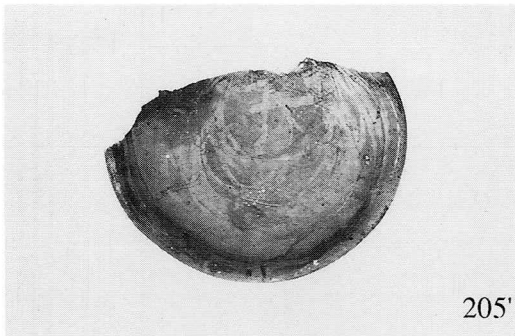
図版30　第3・第4層出土遺物（瓦器皿）

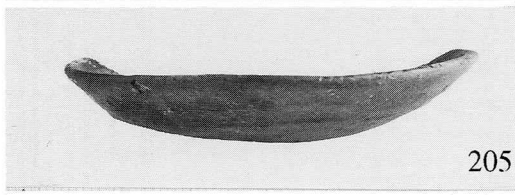

203'

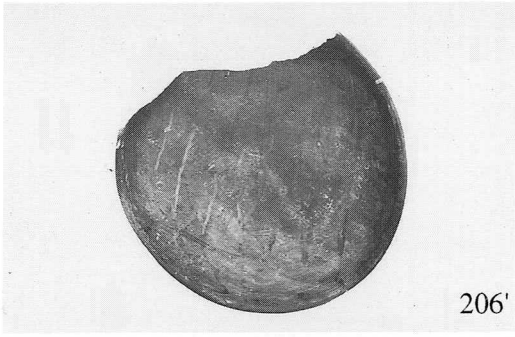

203

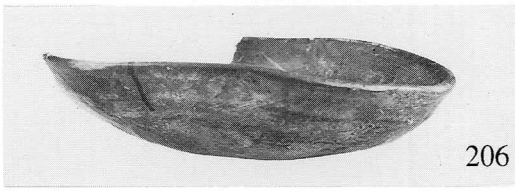

204'

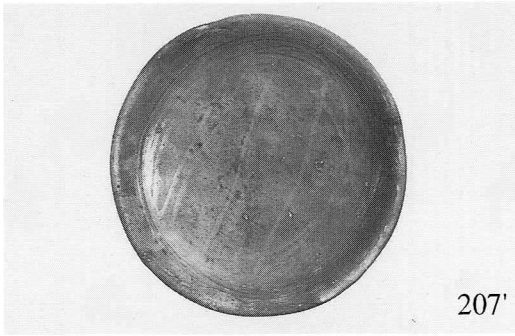

204

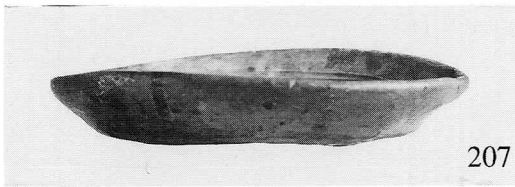

205'

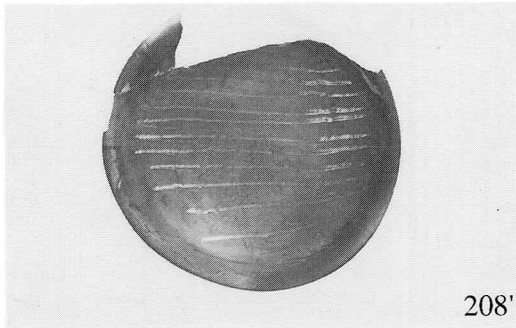

205

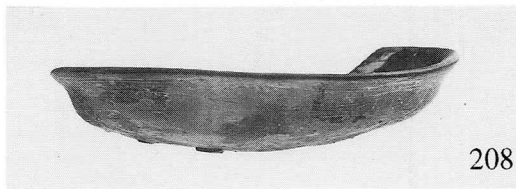

206'


206

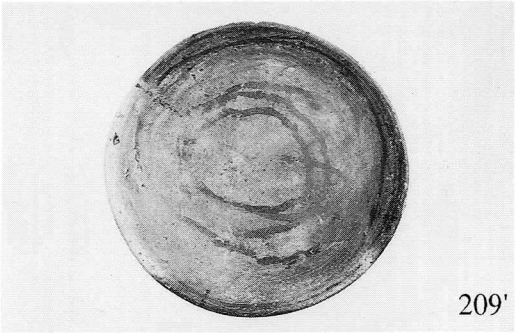

207'

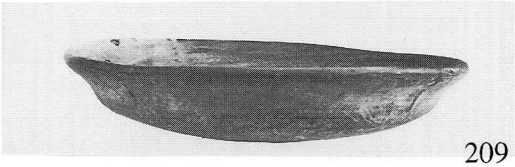

207

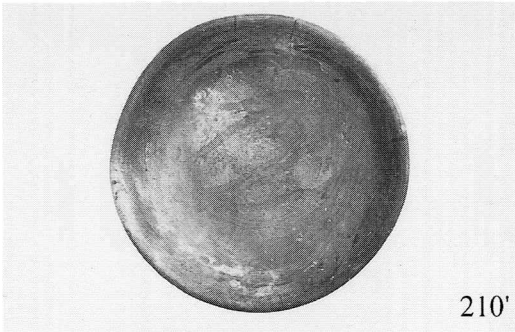

208'

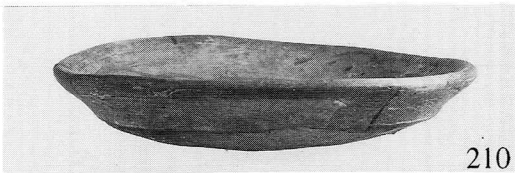

208

図版31　第3・第4層出土遺物（瓦器皿）

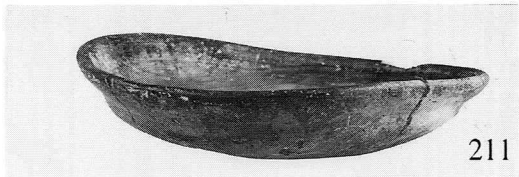

209'

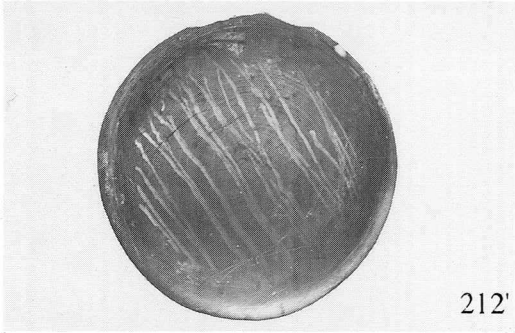

209

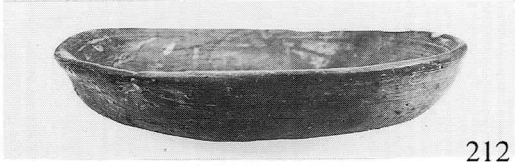

210'

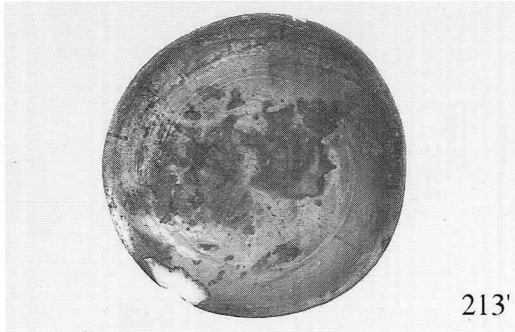

210

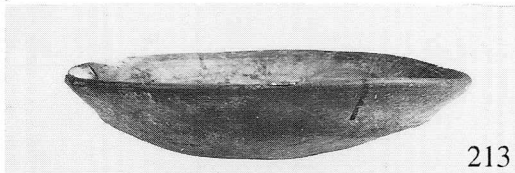
211'

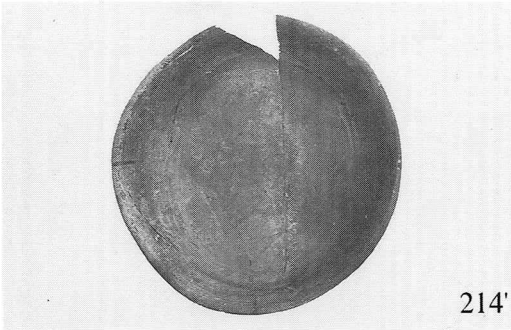

211

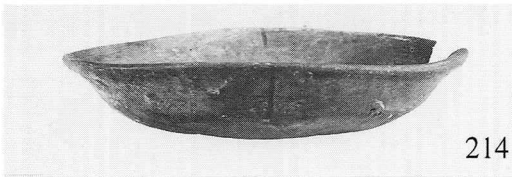

212'


212

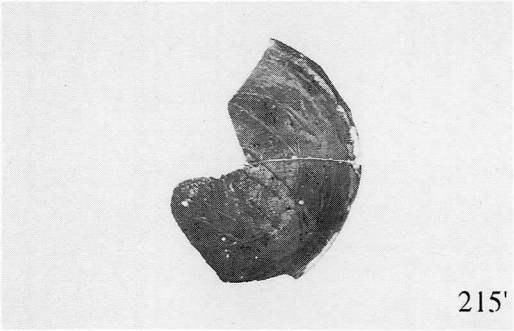

213'

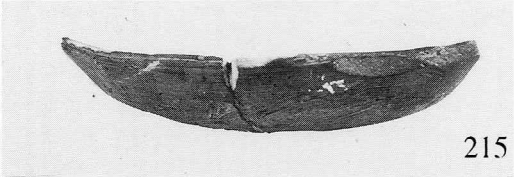

213


214'

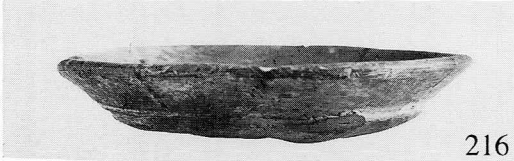

214

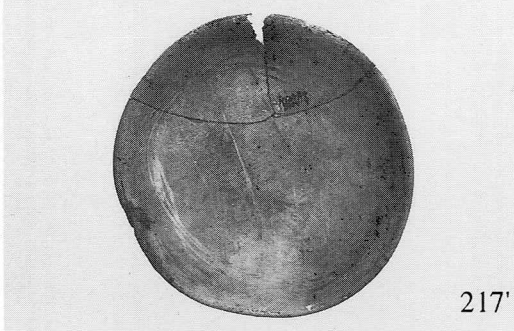
図版32　第3・第4層出土遺物（瓦器皿）

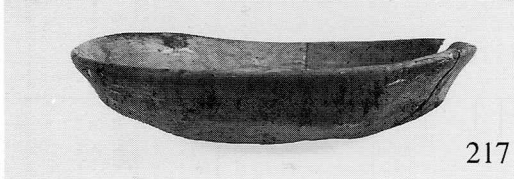

215'

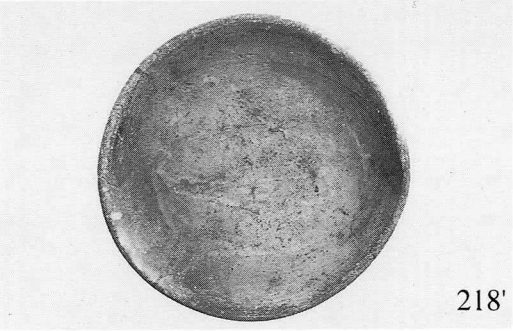

215

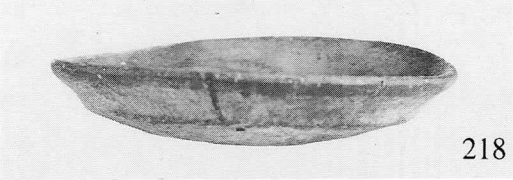
216'

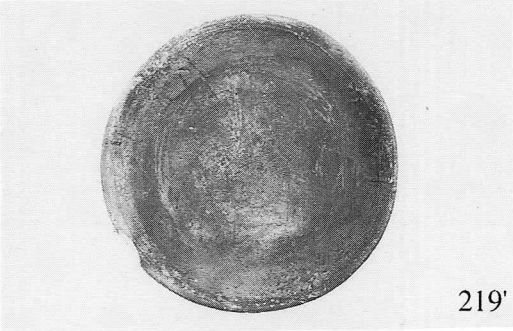

216

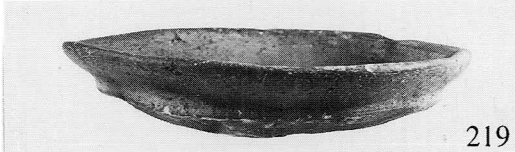

217'

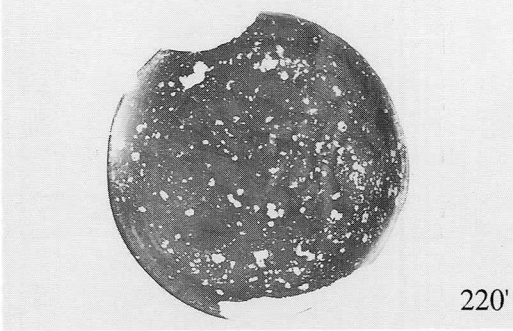

217

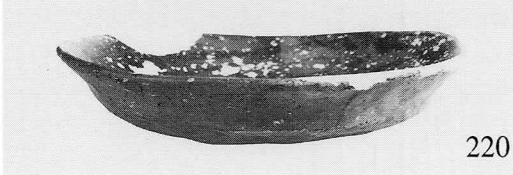

218'


218

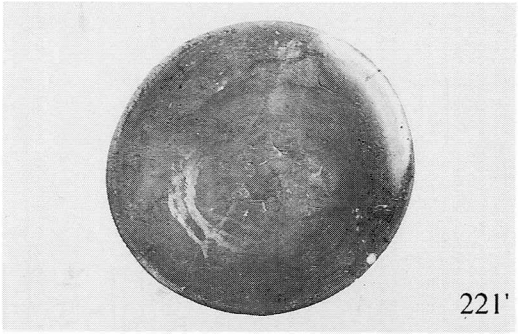

219'

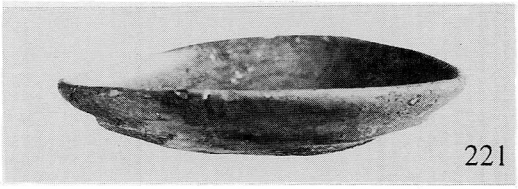

219

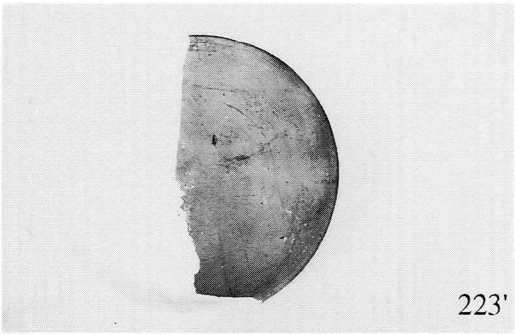

220'

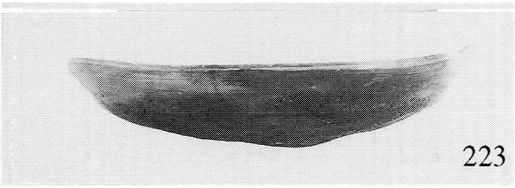

220

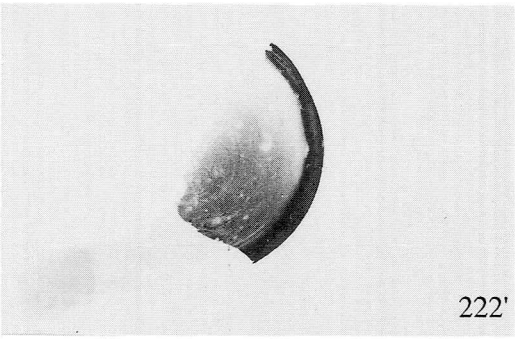
図版33　第3・第4層出土遺物（瓦器皿）

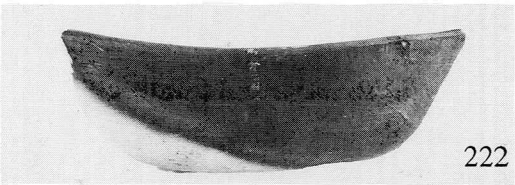

221'

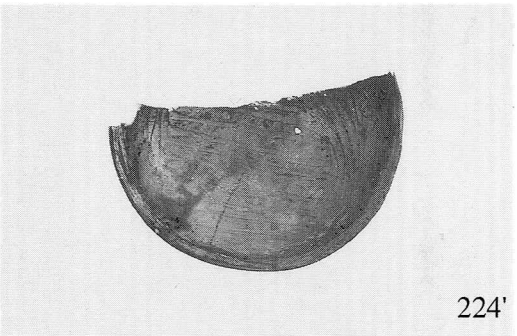

221


223'


223

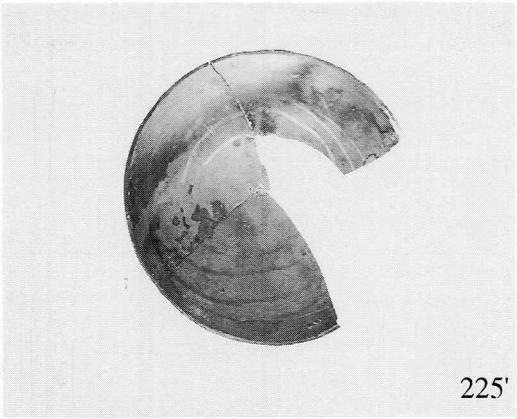

222'

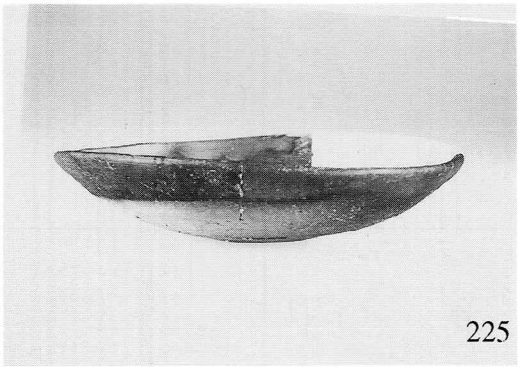

222

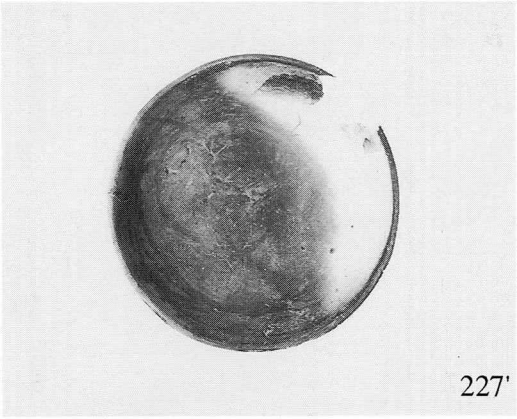

224'

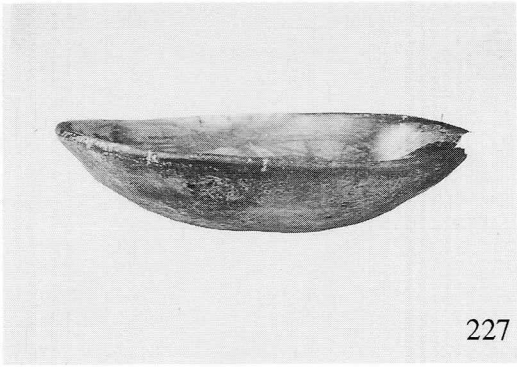
224

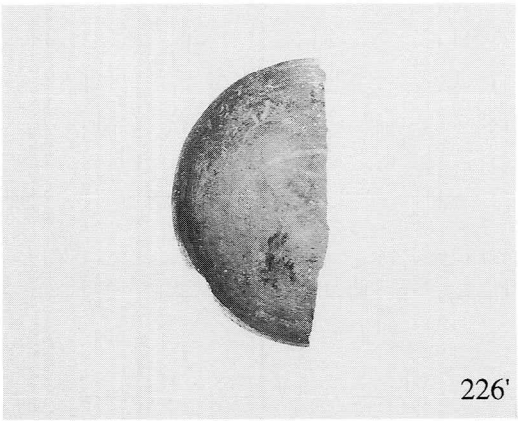
図版34　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

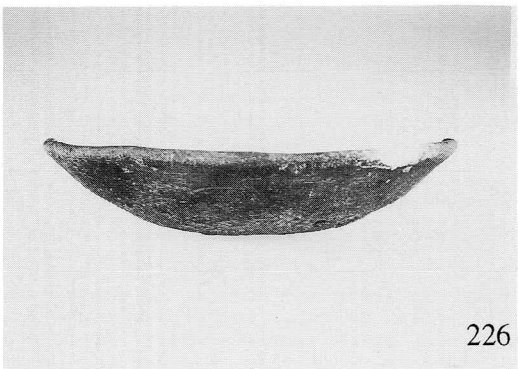

225'

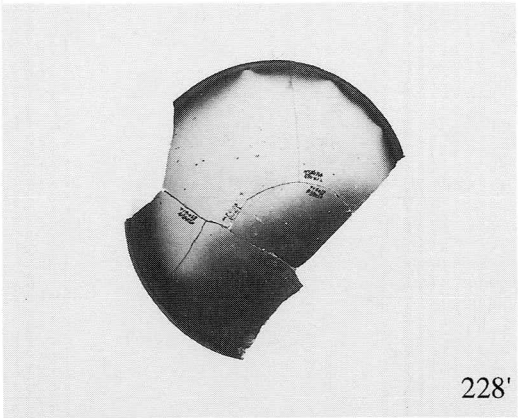

225

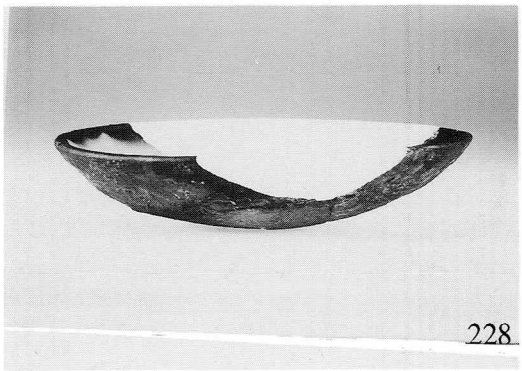

227'


227

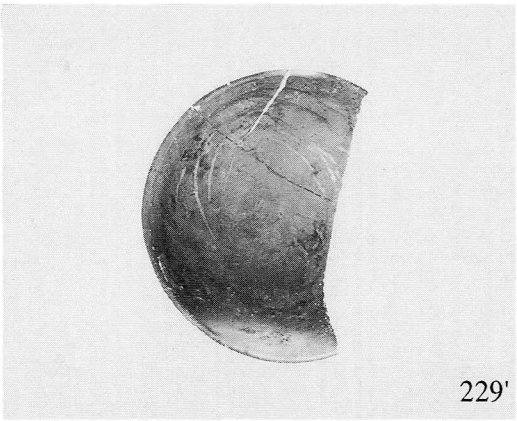

226'

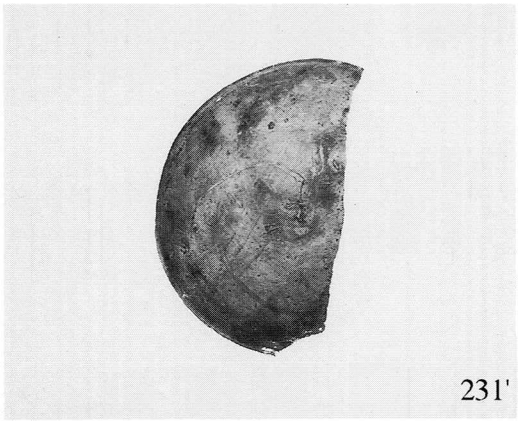

226

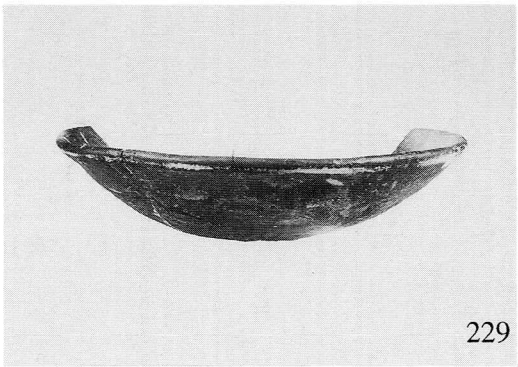

228'

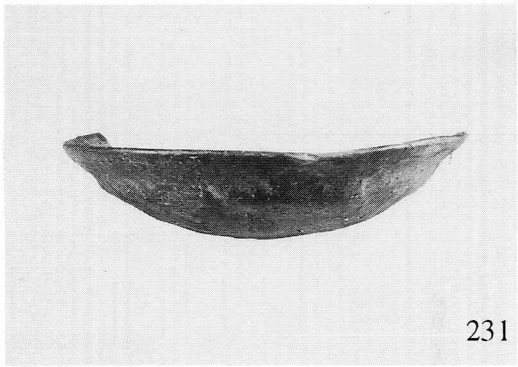

228

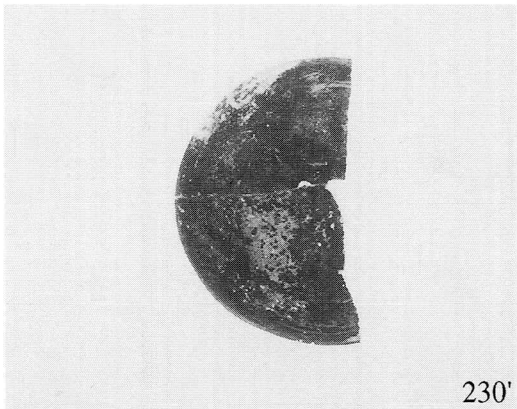
図版35　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

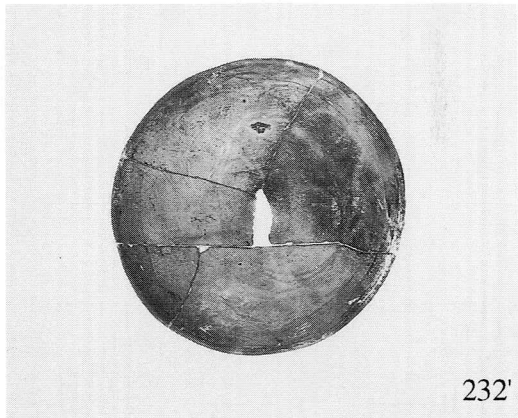

229'

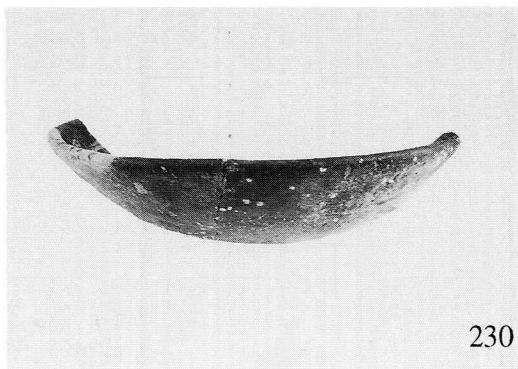

231'


229


231

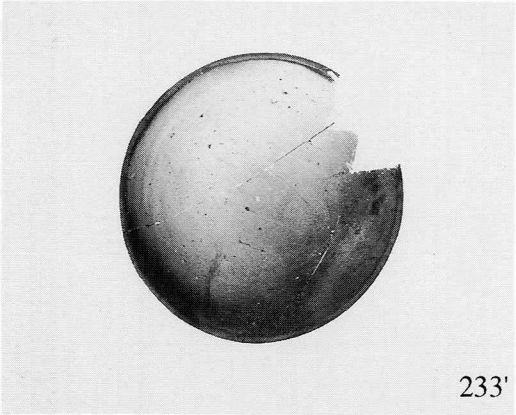

230'

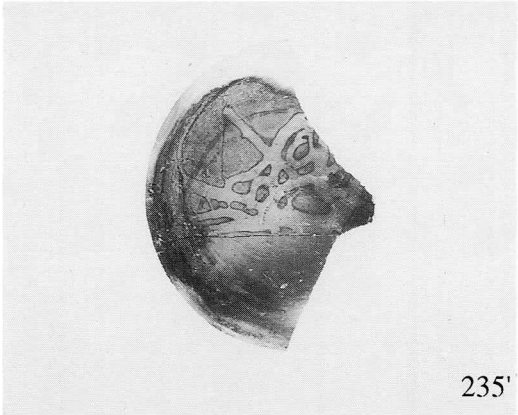

232'

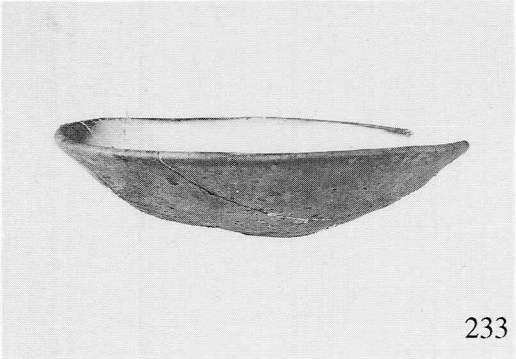

230

232

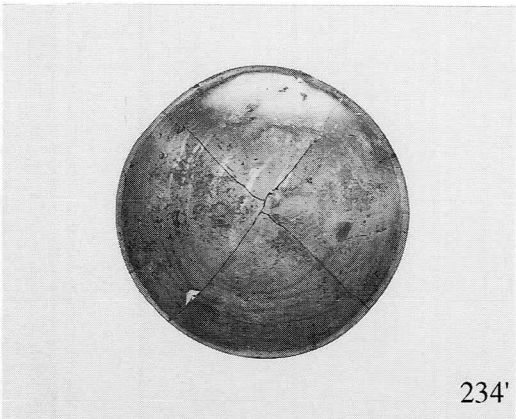
図版36　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

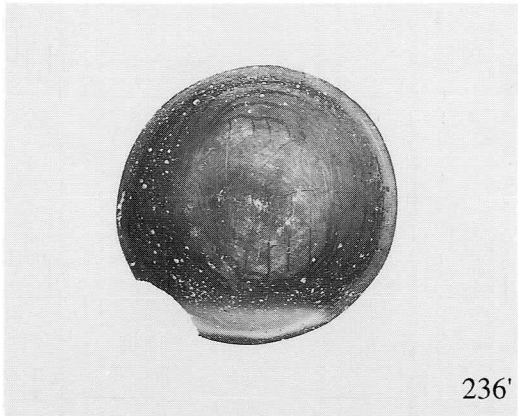

233'


235'

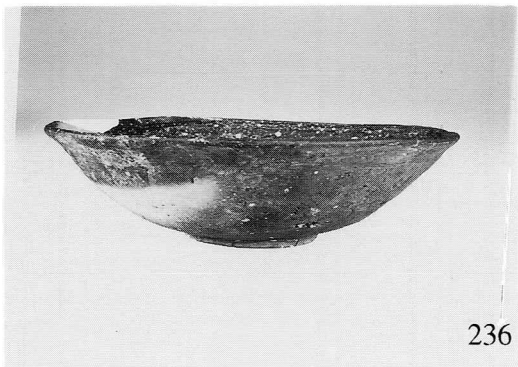

233

235


234'

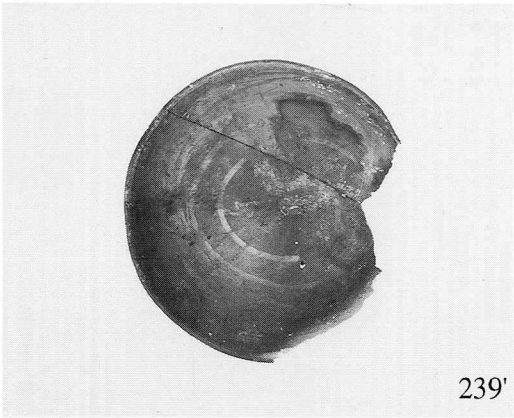

236'

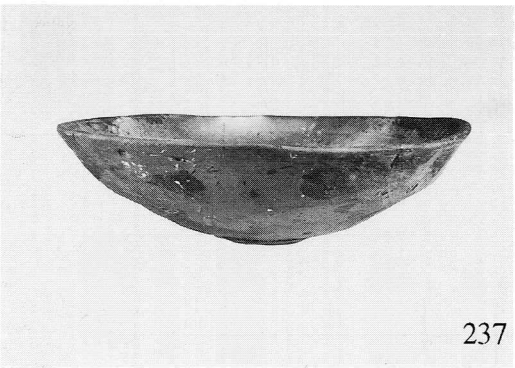
234

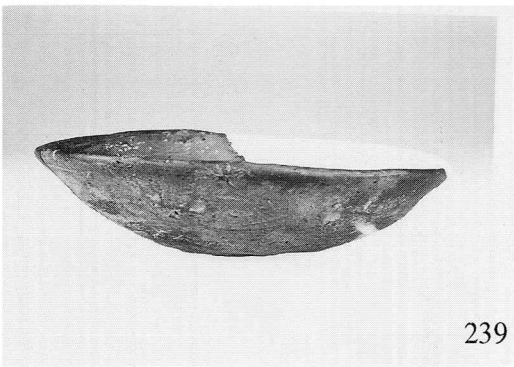

236

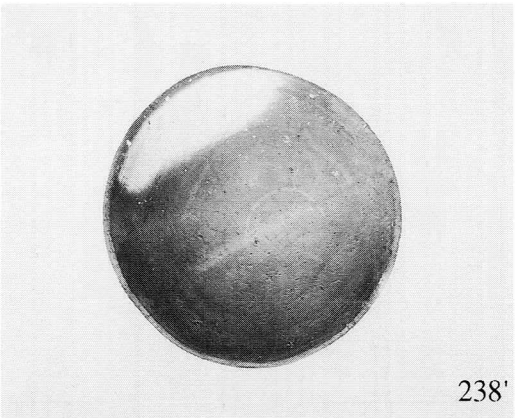
図版37　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

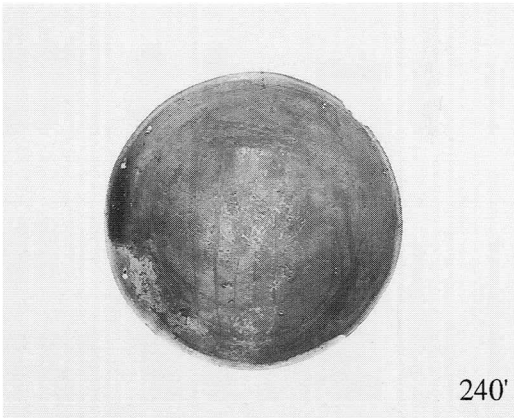
237'


239'


237


239

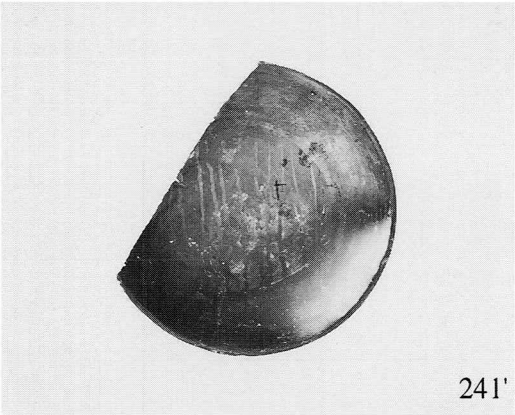

238'

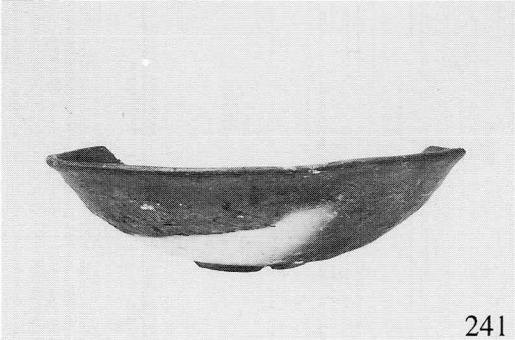

240'

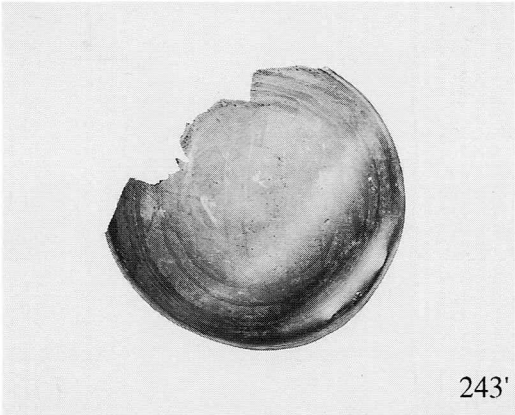
238

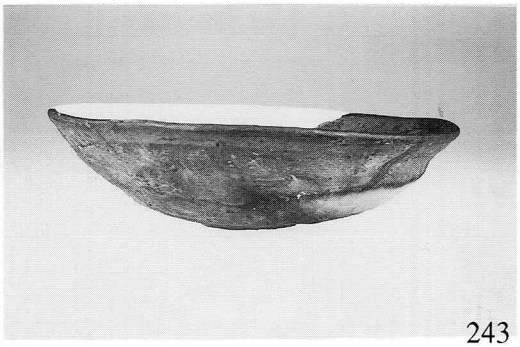
240

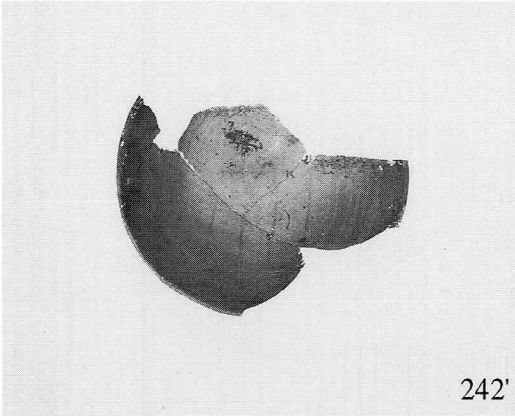
図版38　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

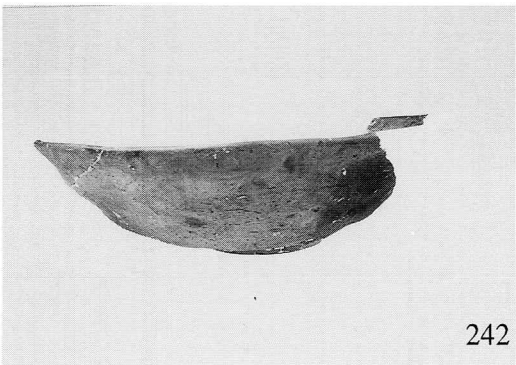

241'

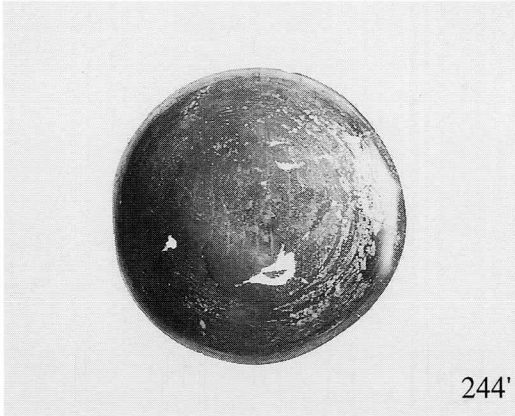

241

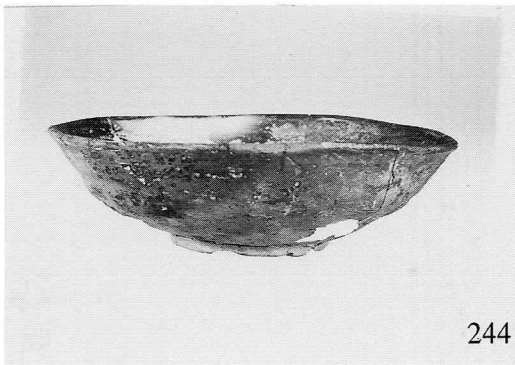

243'


243

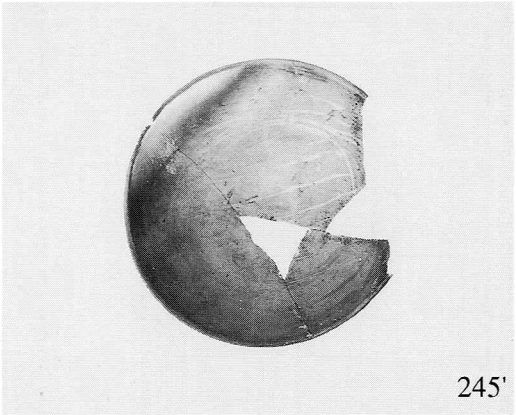

242'

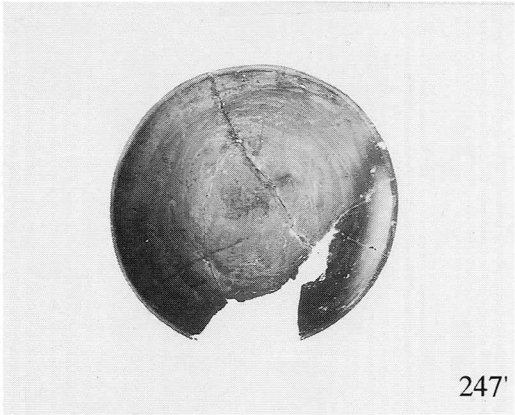

242

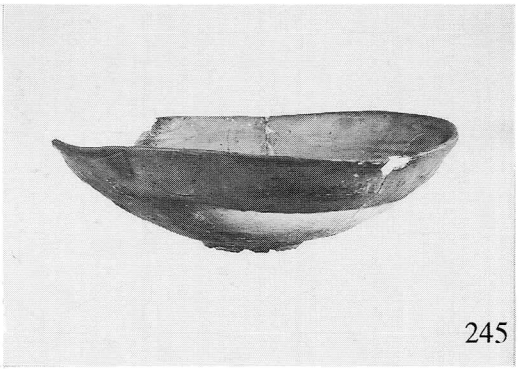

244'


244

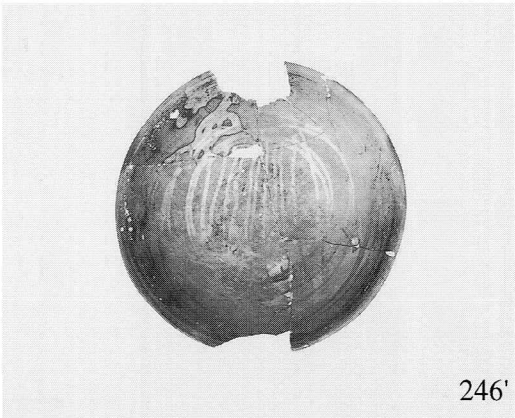
図版39　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

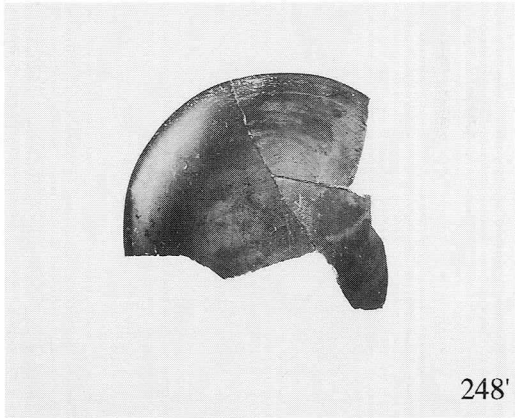

245'


247'

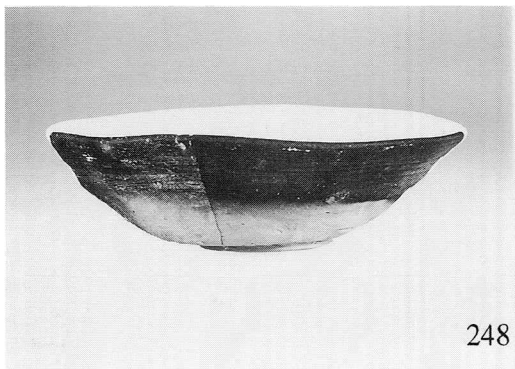

245

247


246'

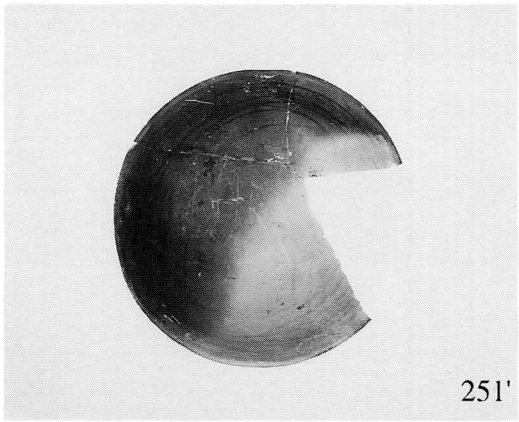

248'

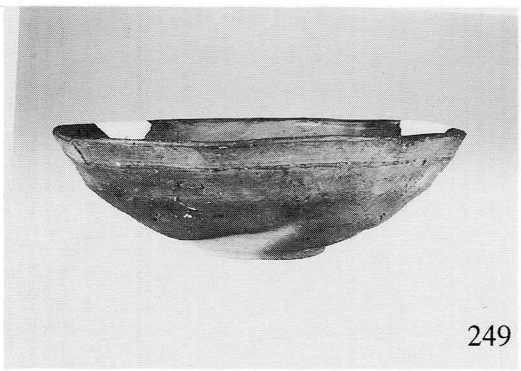
246

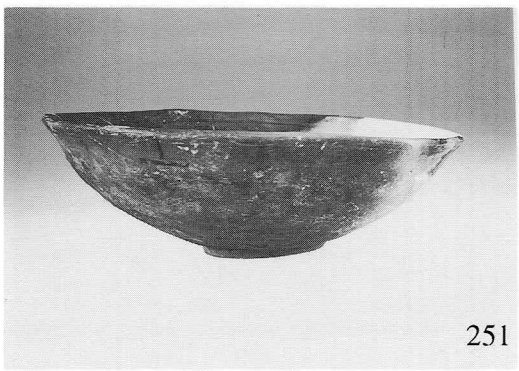

248

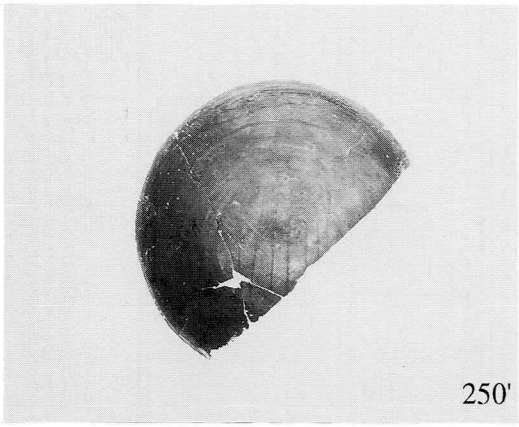
図版40　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

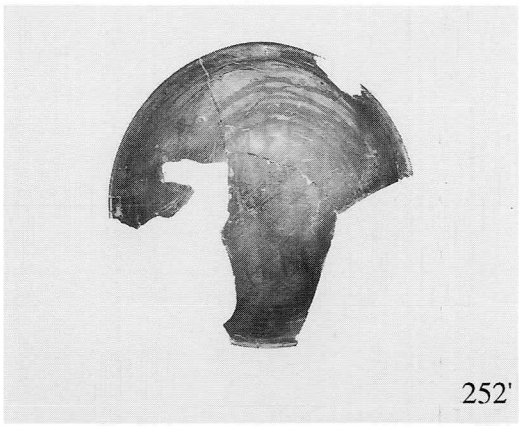
249'

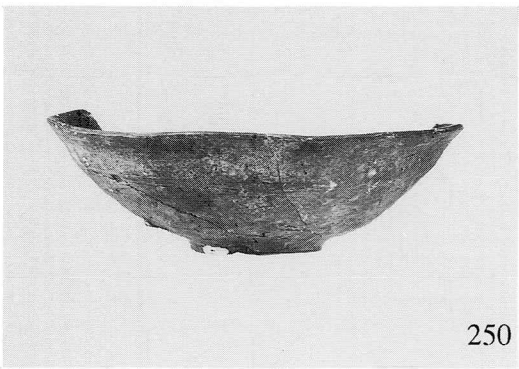

251'


249


251

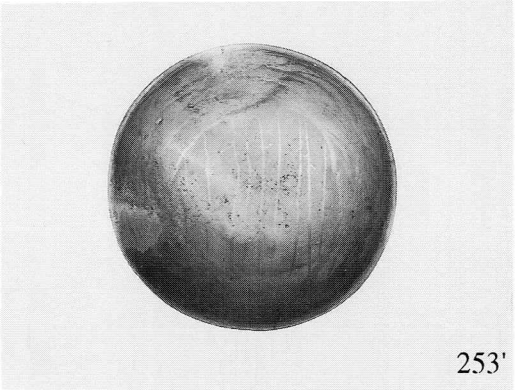

250'

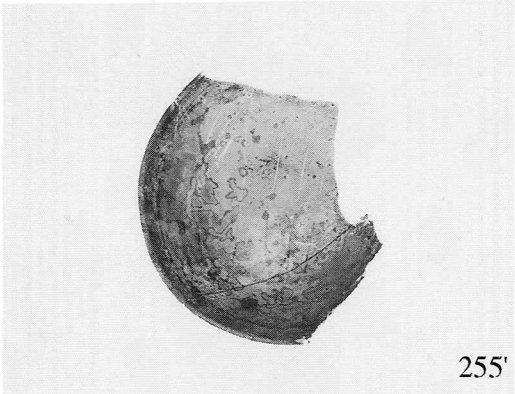

252'


250

252

図版41　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

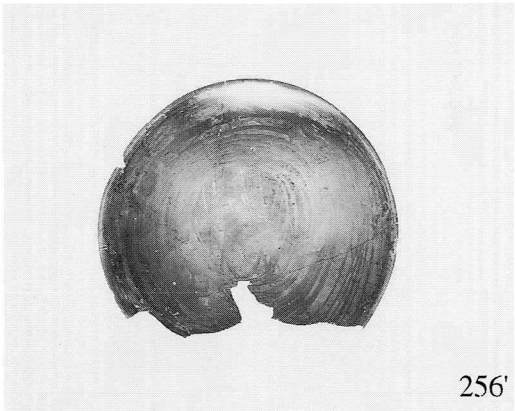

253'

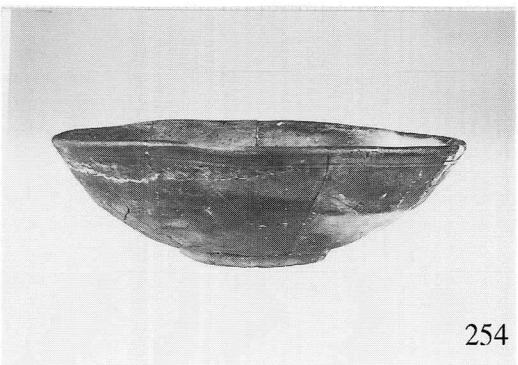

255'

253

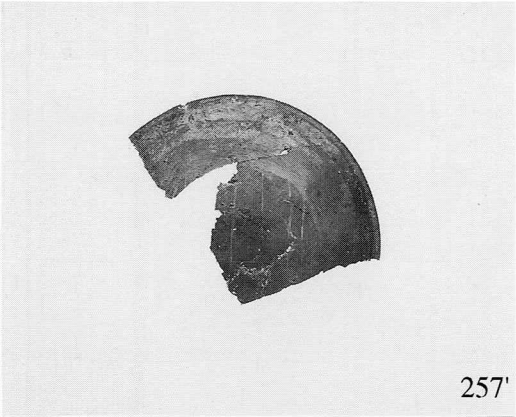
255

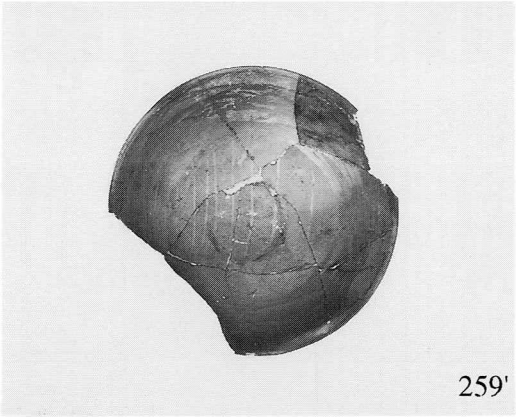
254'

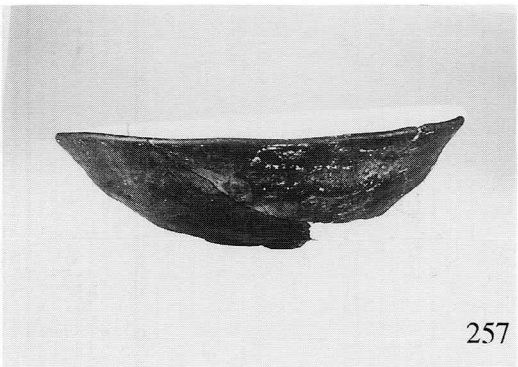

256'


254

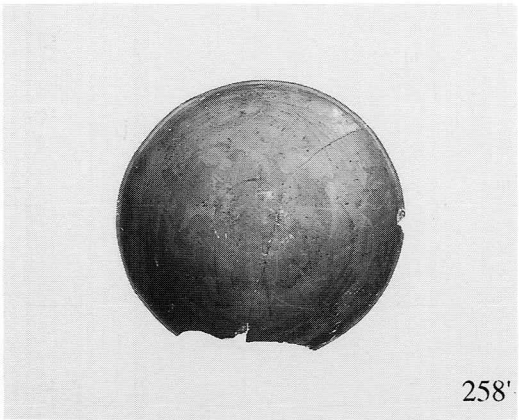
256

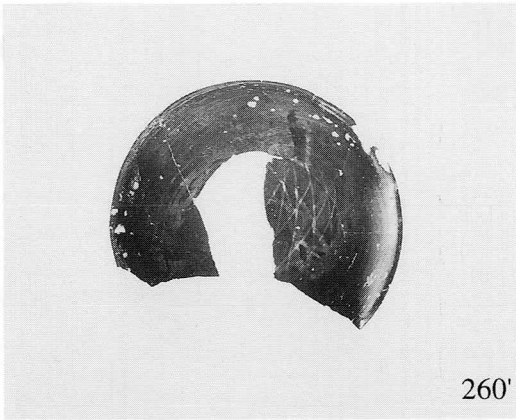

257'


259'

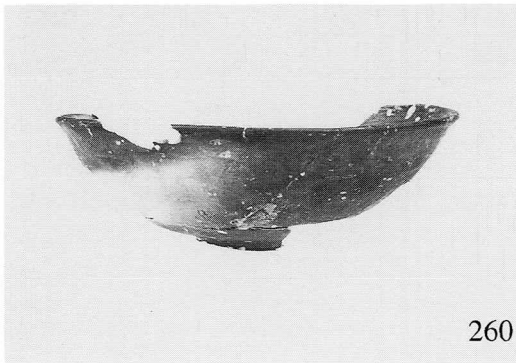

257

259

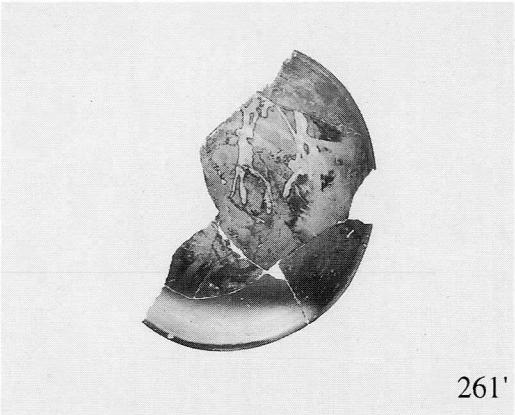

258'

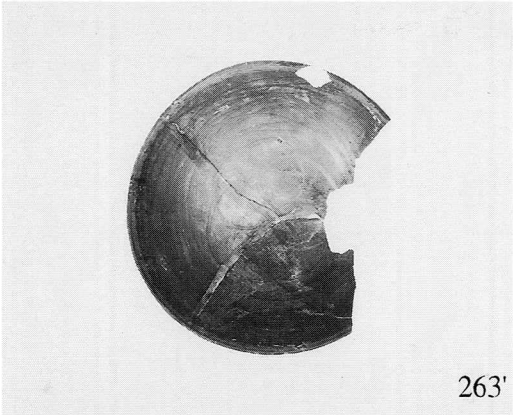

260'

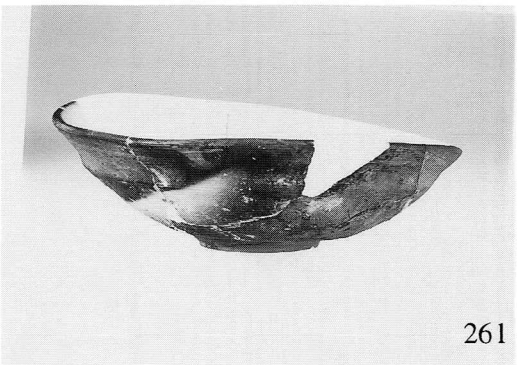
258

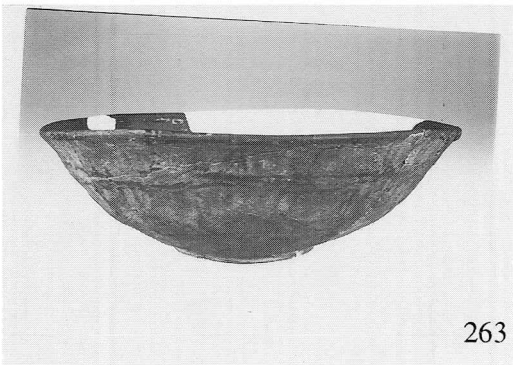

260

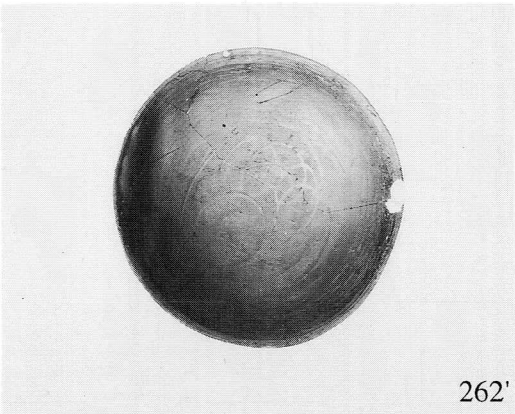
図版43　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

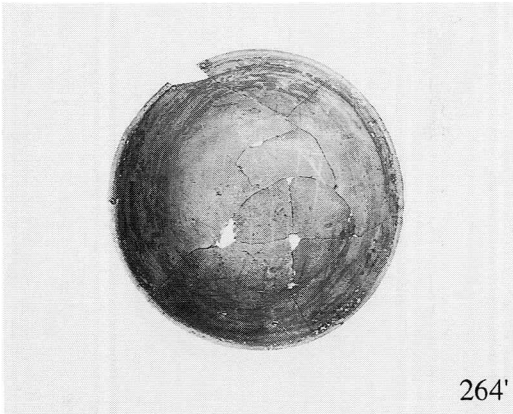

261'


263'


261


263


262'

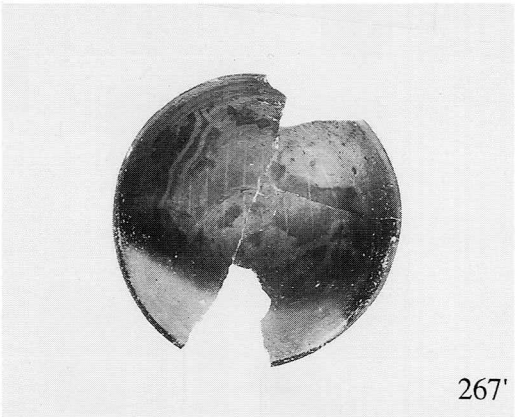

264'

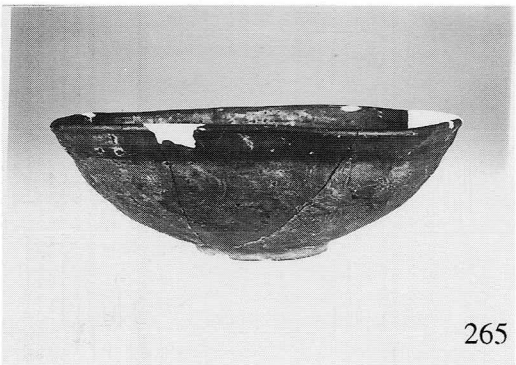
262

264

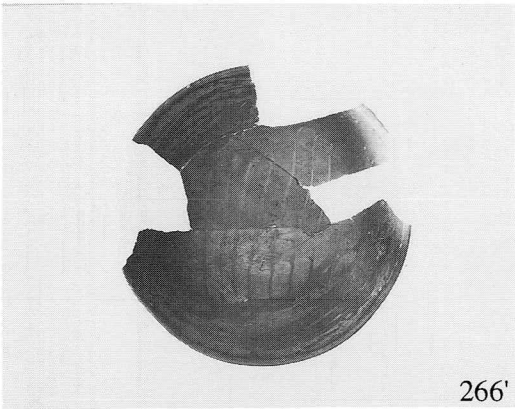
図版44　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

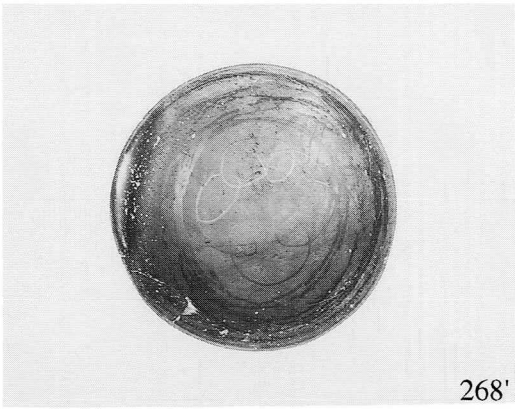
265'


267'

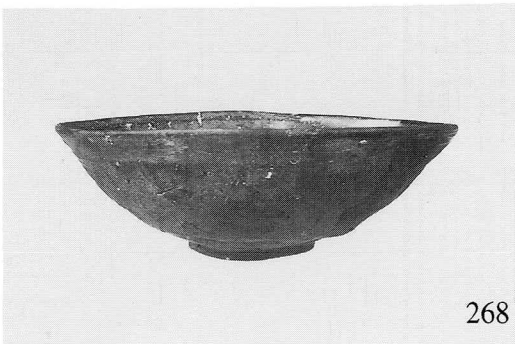

265

267

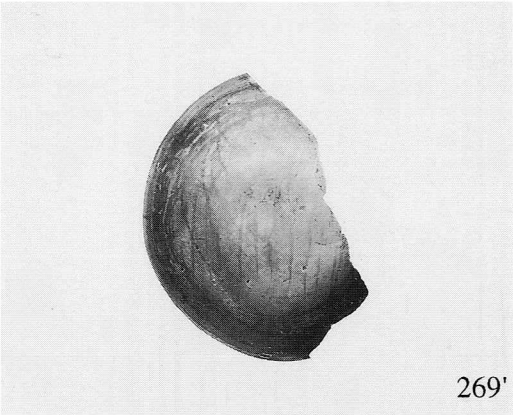

266'

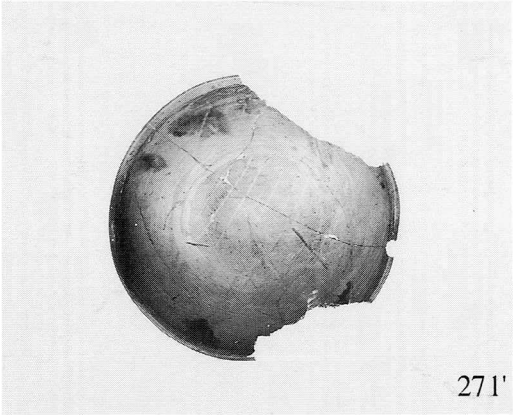

268'

266

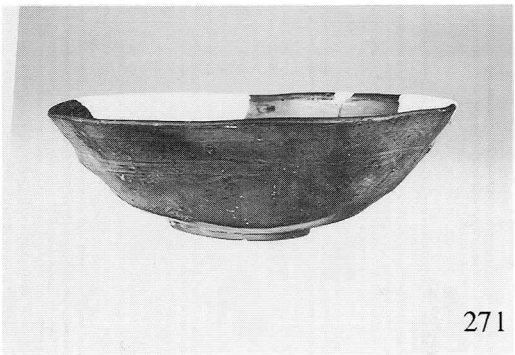

268

図版45　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

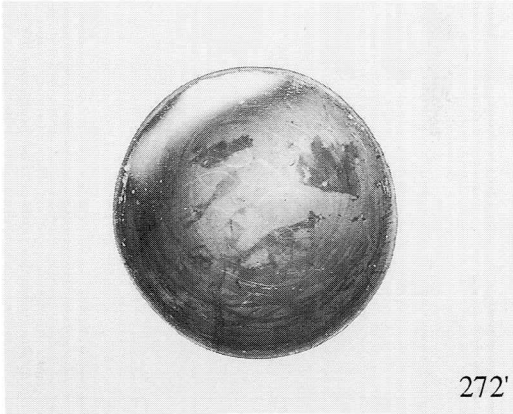

269'

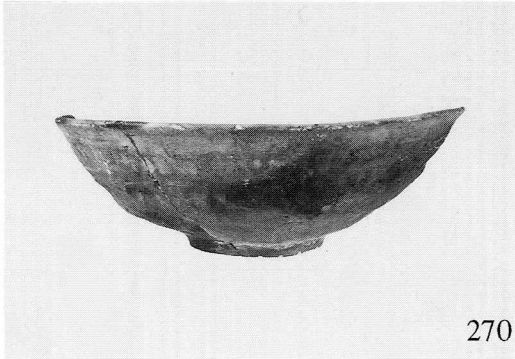

271'

269


271

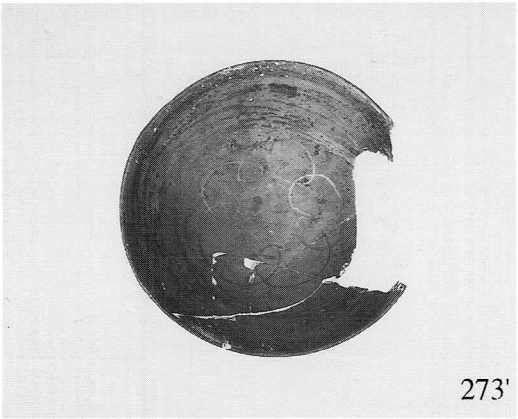
270'

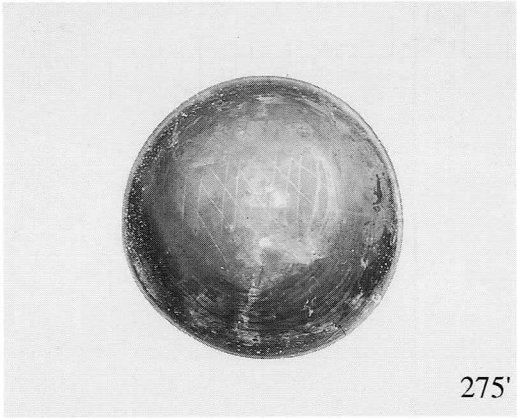

272'


270

272

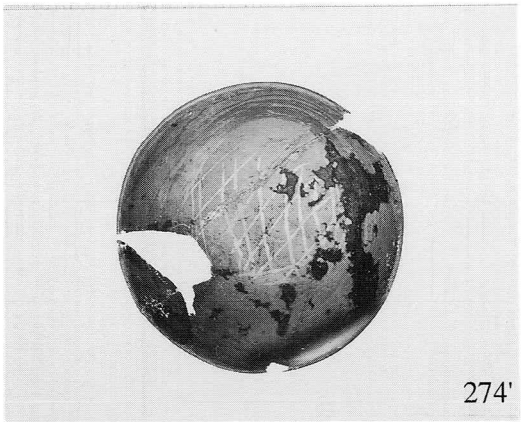
図版46　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

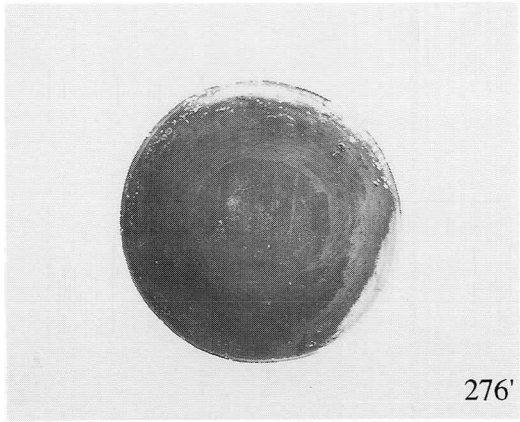

273'

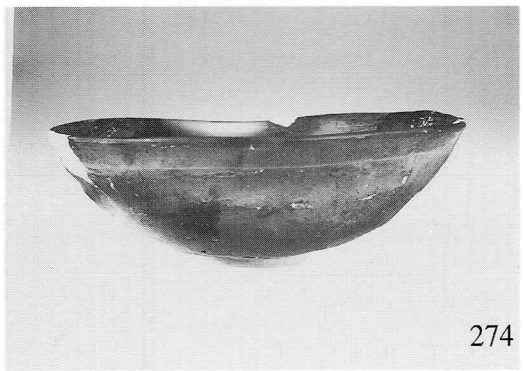

275'

273

275

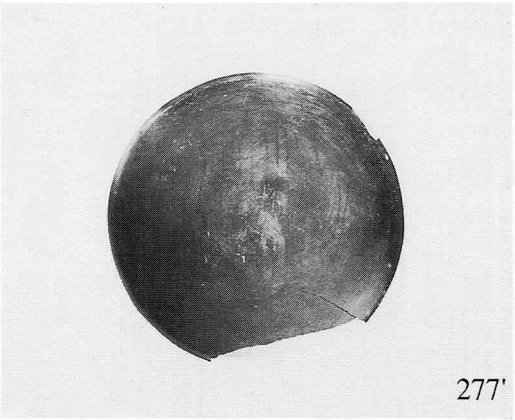

274'

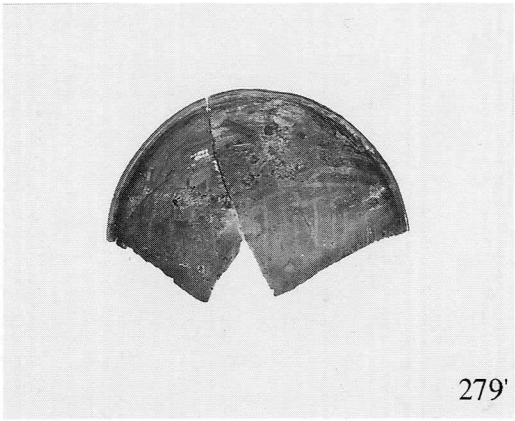

276'

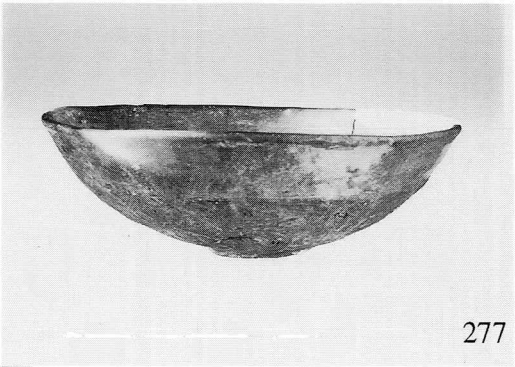

274

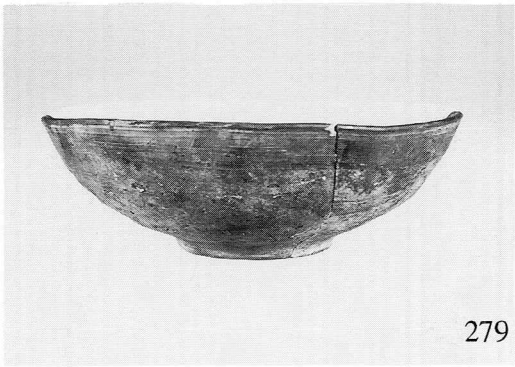
276

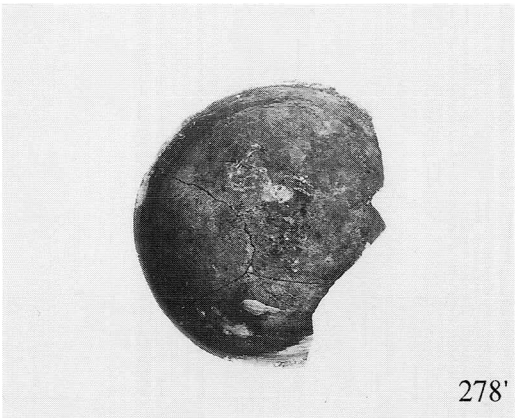
図版47　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

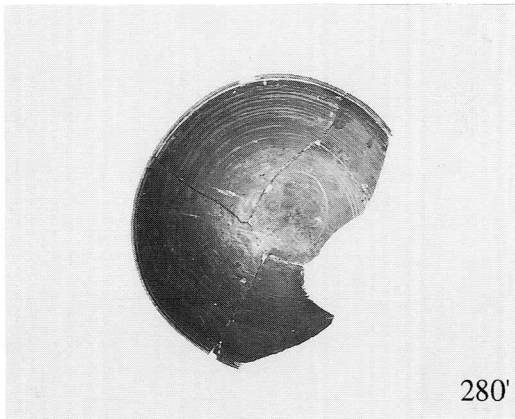

277'


279'

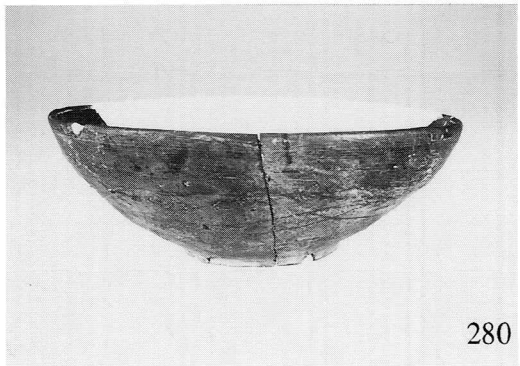

277


279

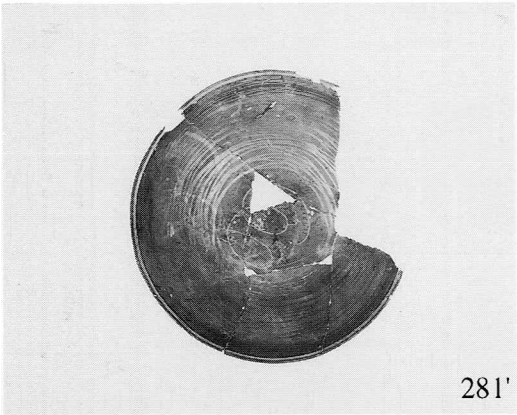

278'


280'

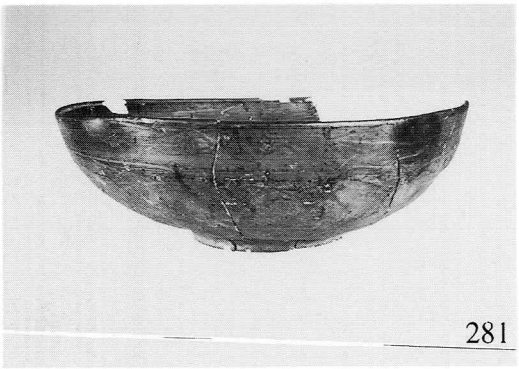
278


280

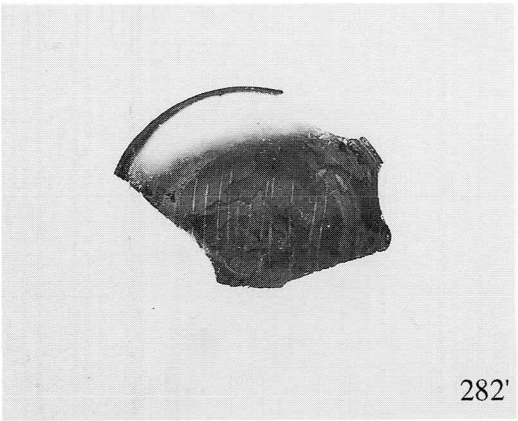
図版48　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

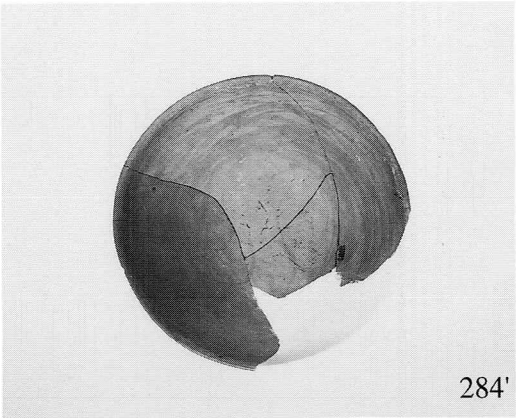

281'

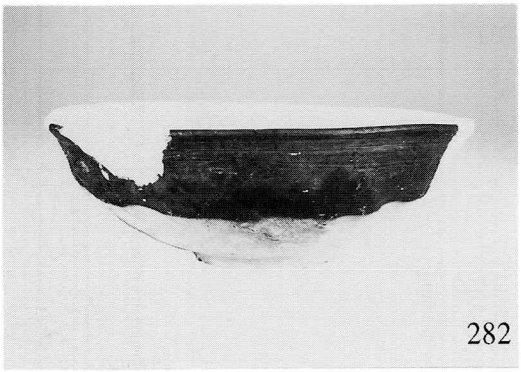
283'

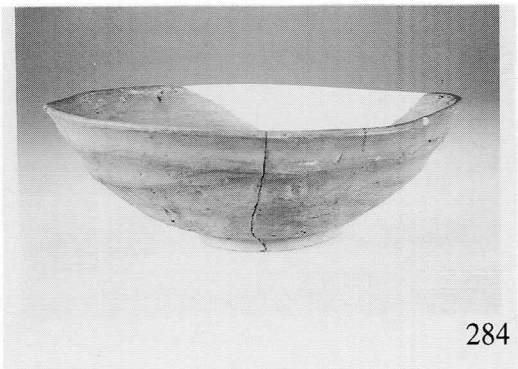

281

283


282'

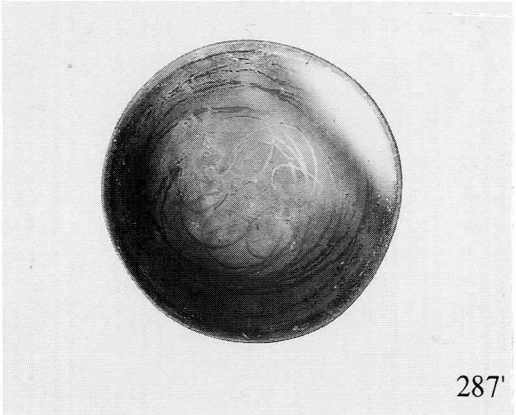

284'


282

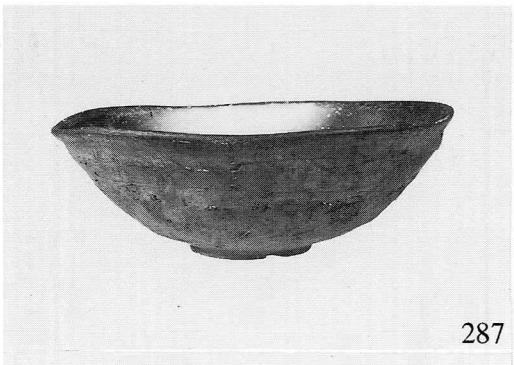

284

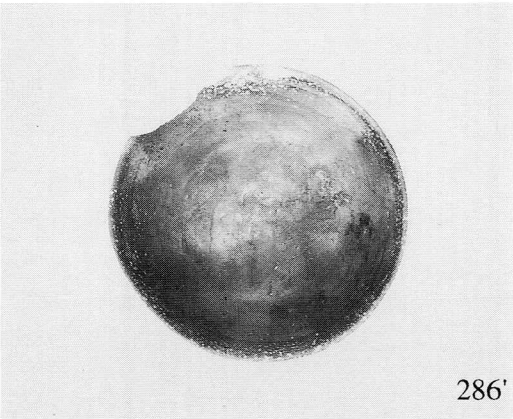
図版49　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

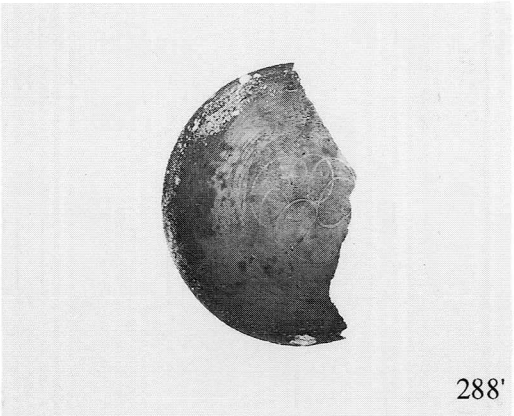
285'


287'

285


287

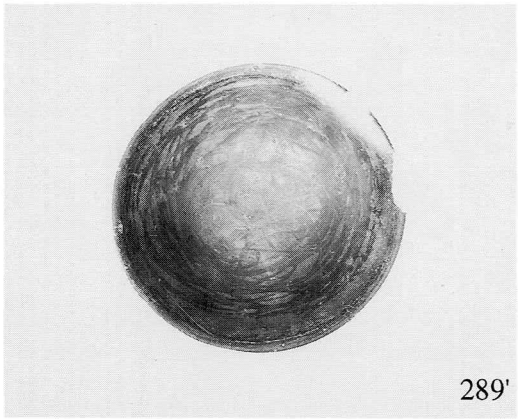

286'


288'

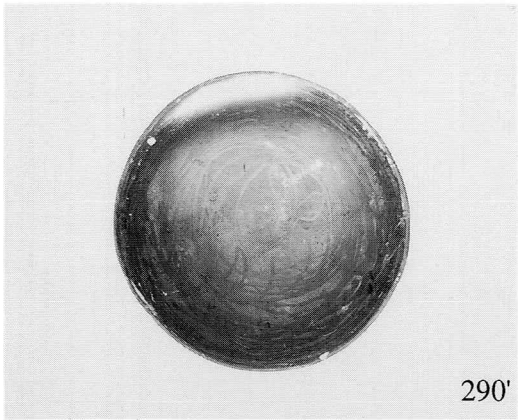
286

288

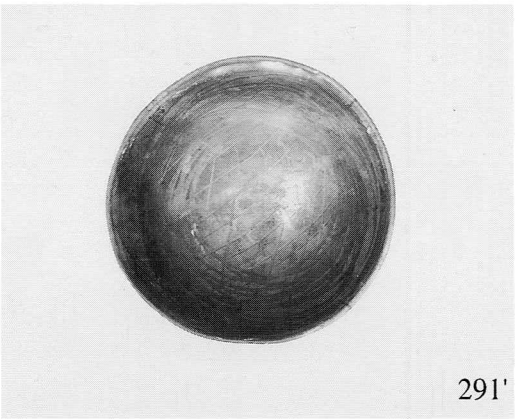
図版50　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）


289'

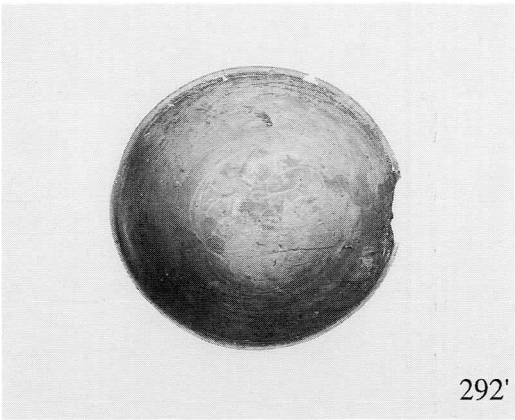
289


290'

290

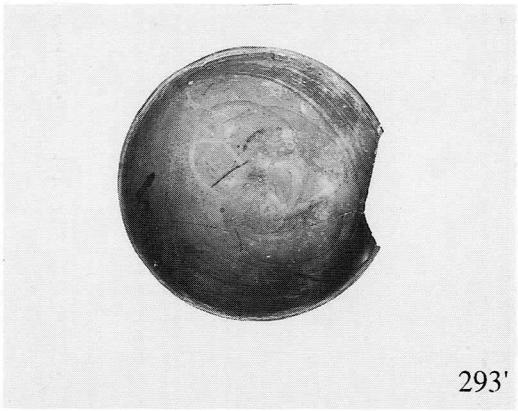

291'

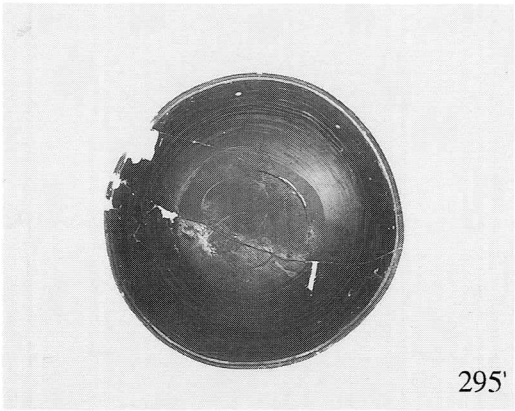
291


292'

292

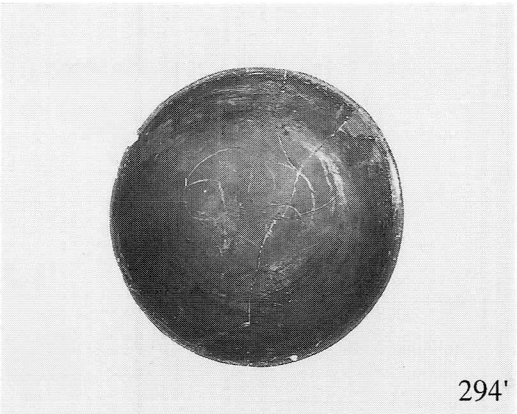
図版51　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

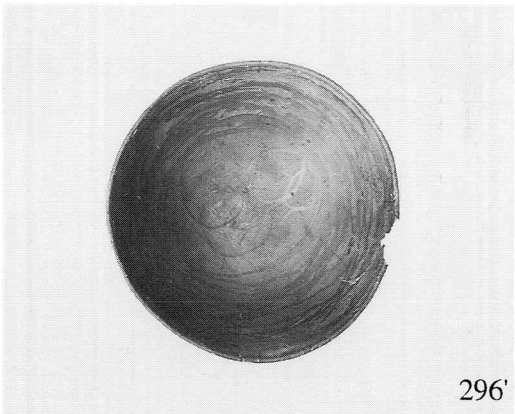

293'


295'

293

295

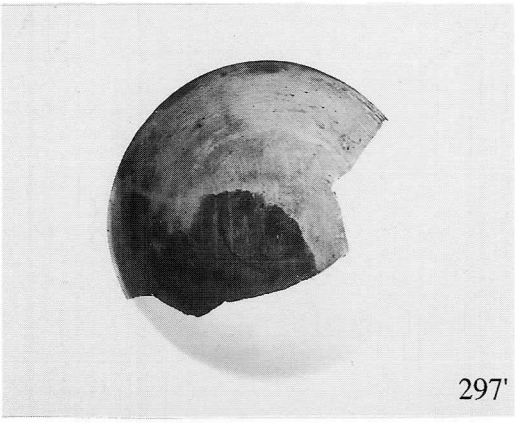

294'

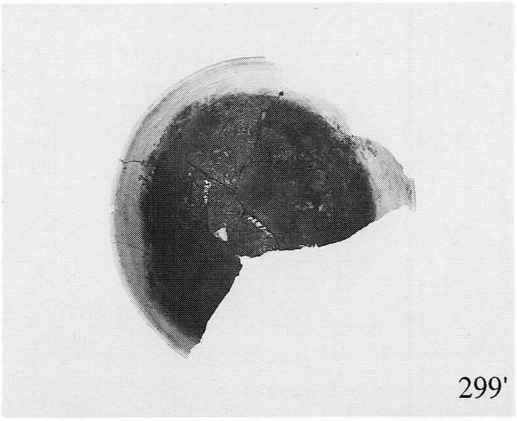

296'

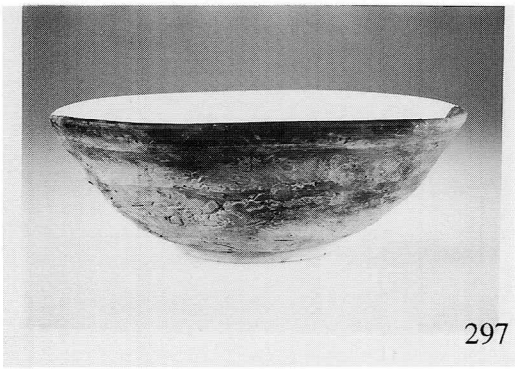
294

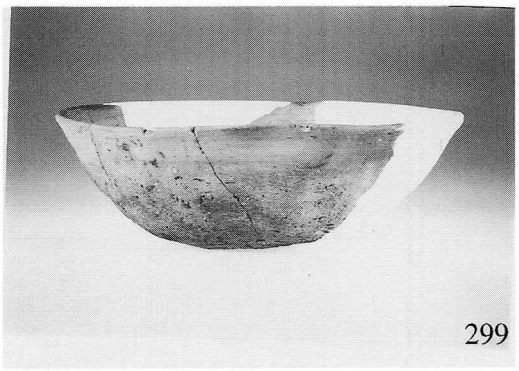
296

図版52　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

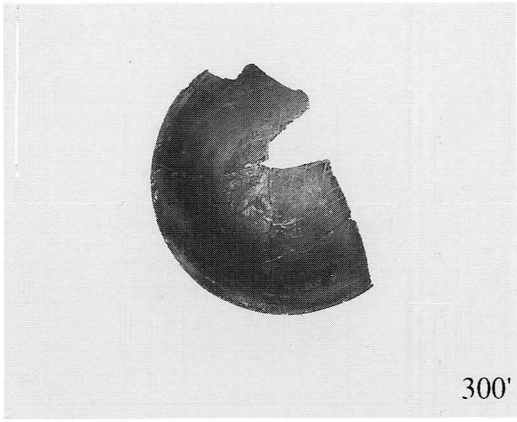

297'


299'

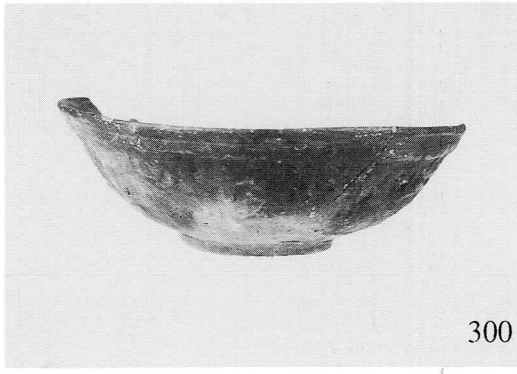

297


299

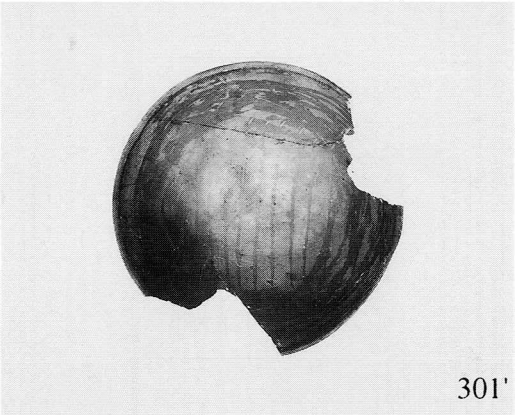
298'

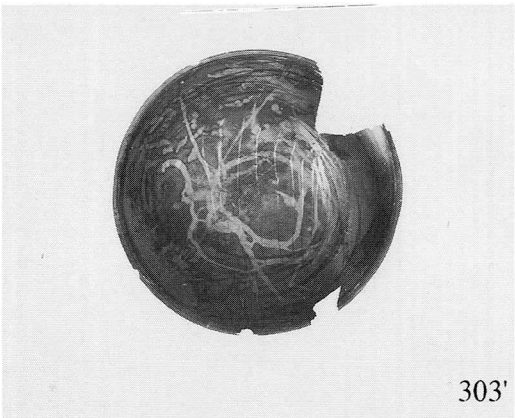

300'

298


300

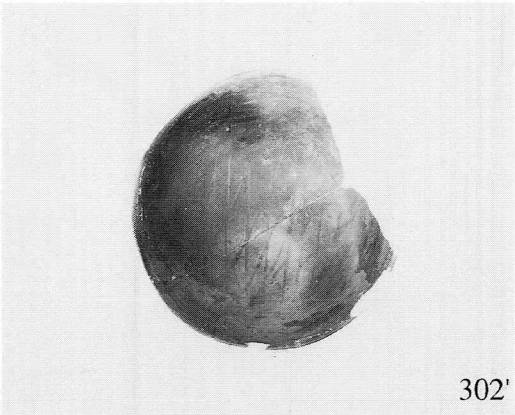
図版53　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

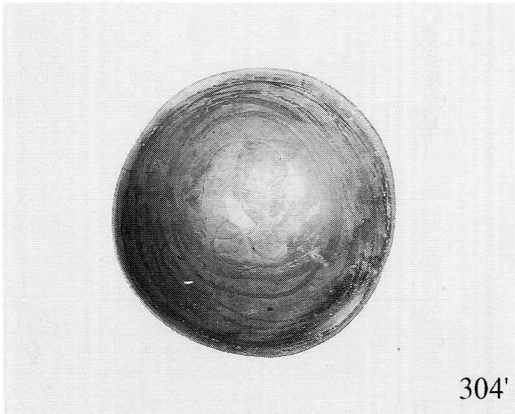

301'

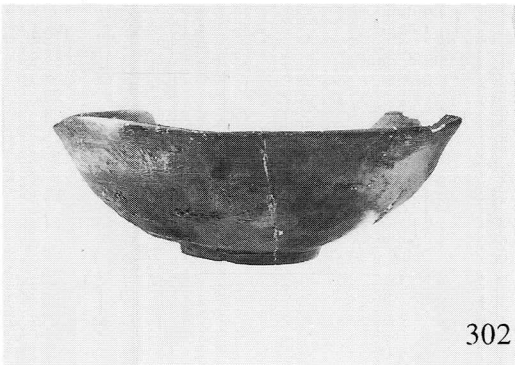

303'

301

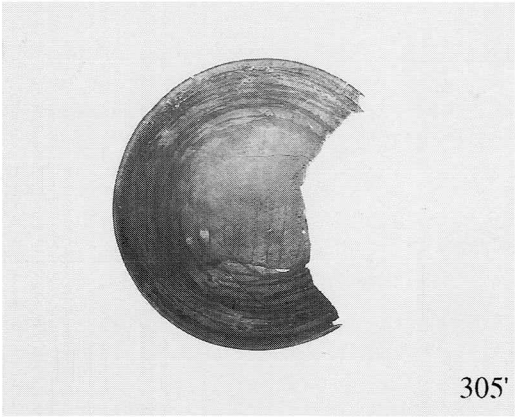
303

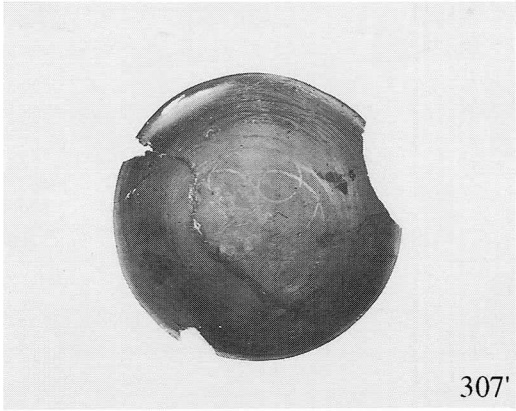

302'

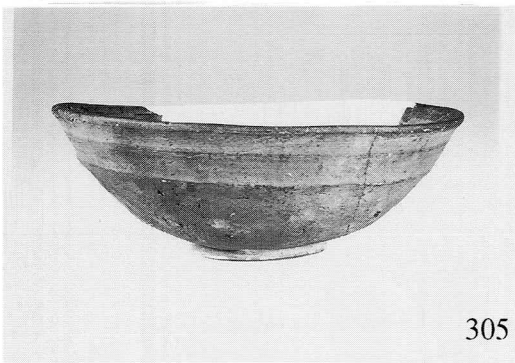

304'


302

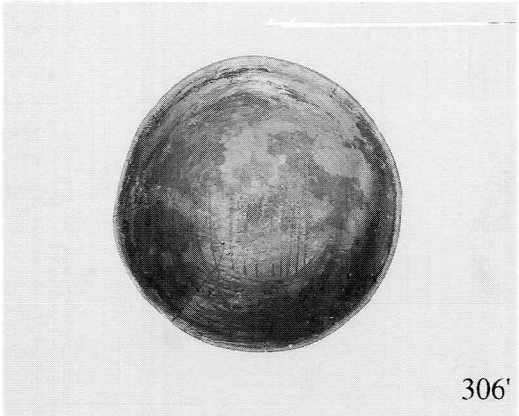
304

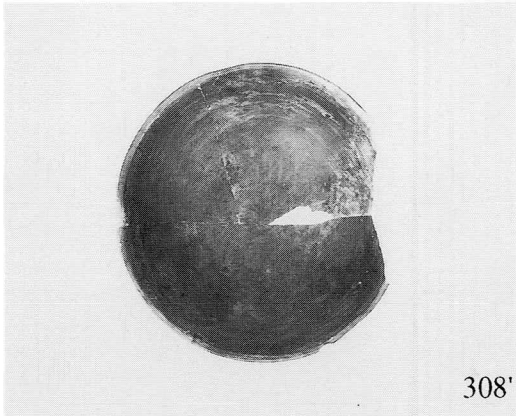

305'


307'


305

307

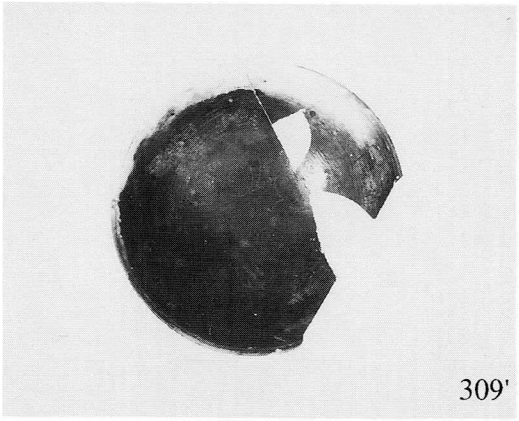

306'

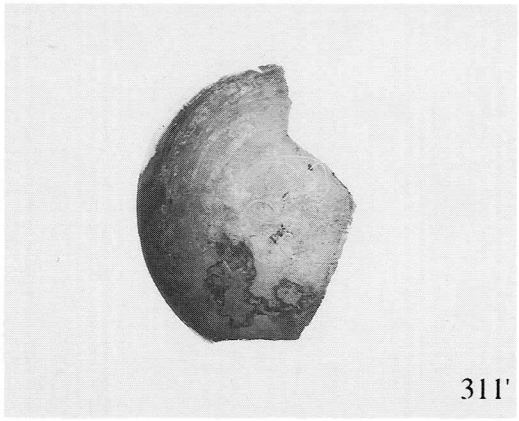

308'

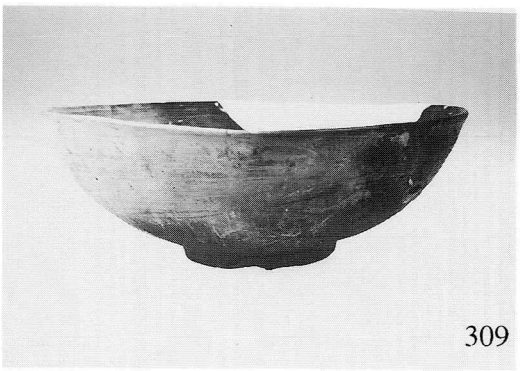
306

308

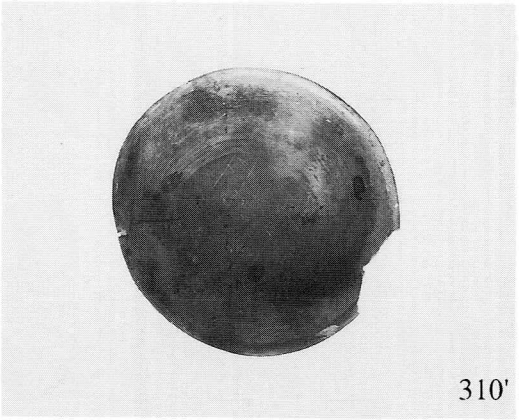
図版55　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

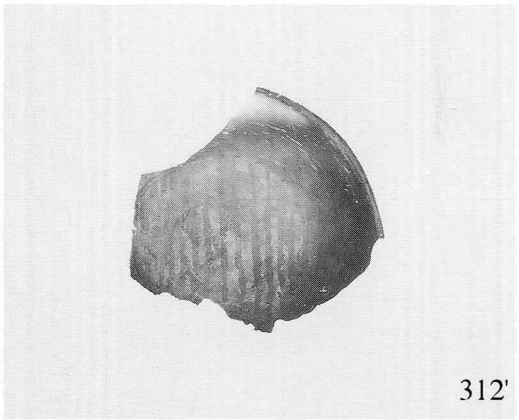

309'

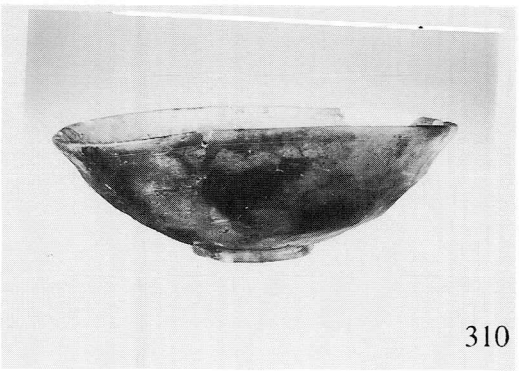

311'

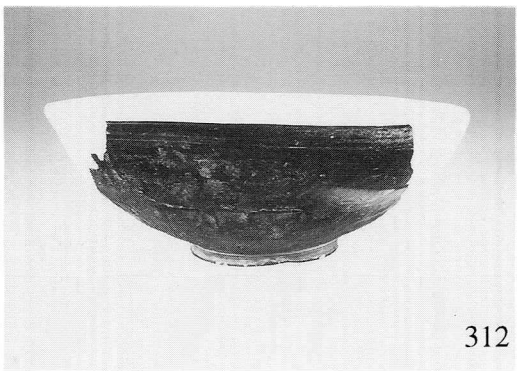

309

311

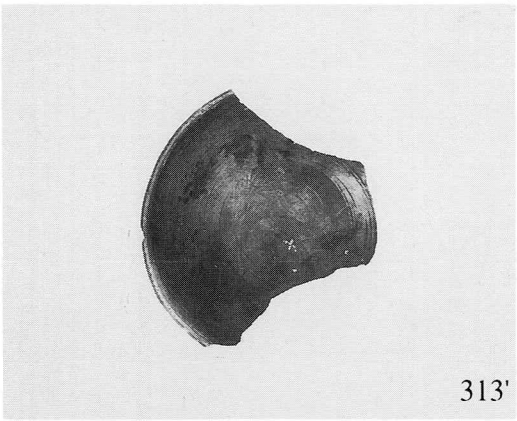

310'

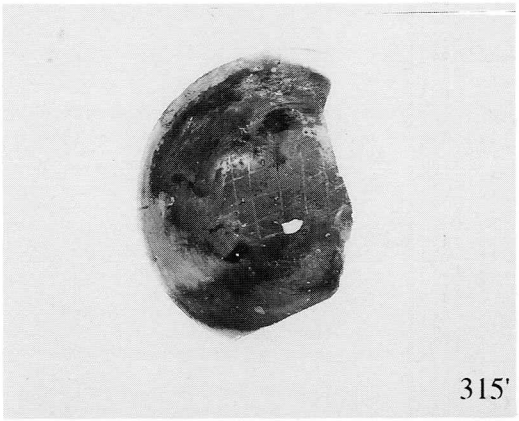

312'

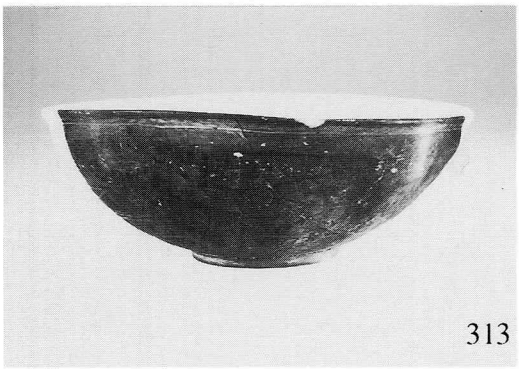

310

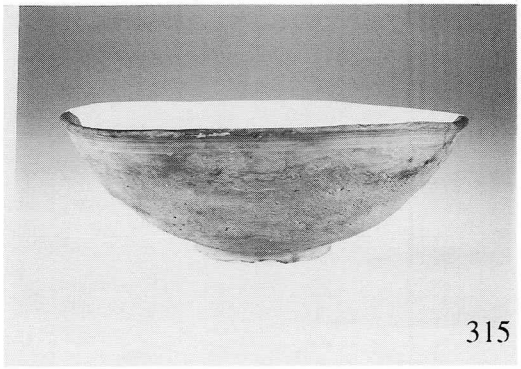

312

図版56　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

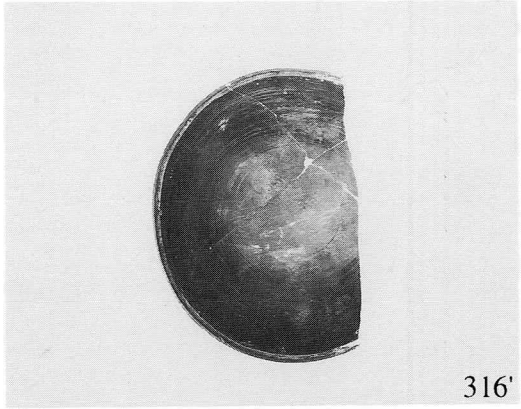

313'


315'

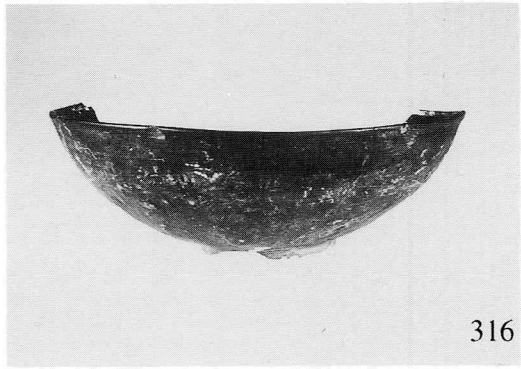

313


315

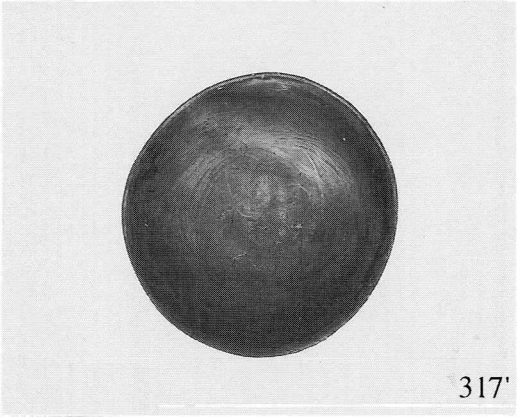
314'

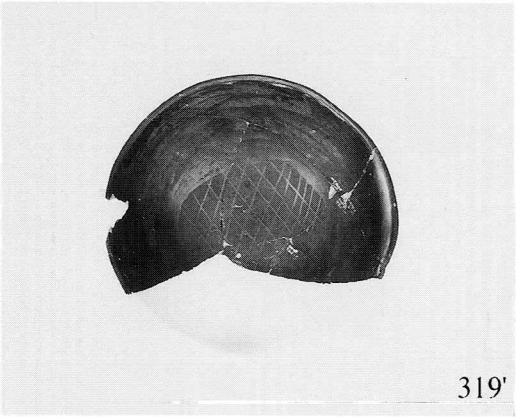

316'

314


316

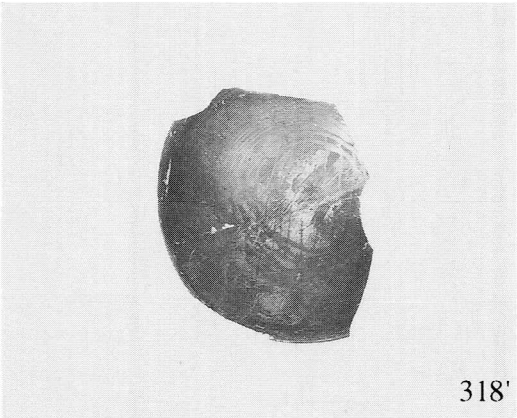
図版57　第3・第4層出土遺物（瓦器椀）

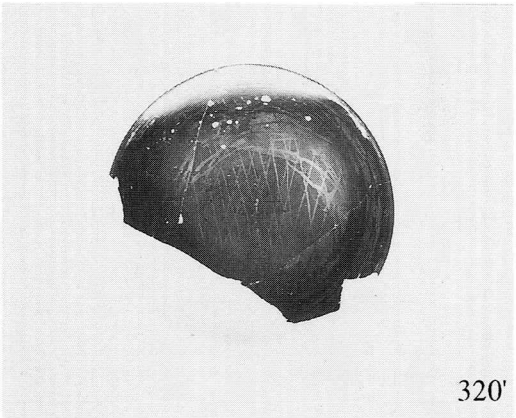

317'


319'

317

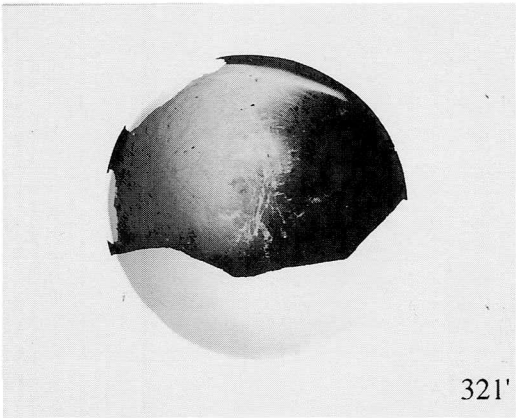
319

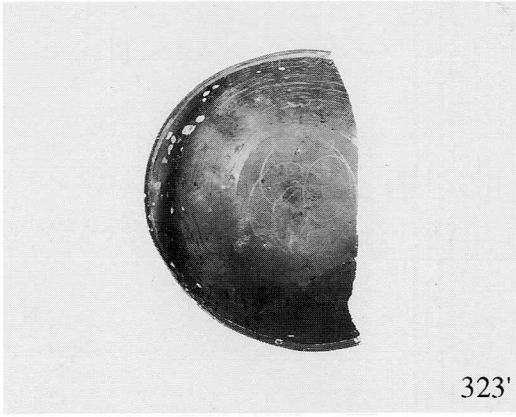

318'


320'

318

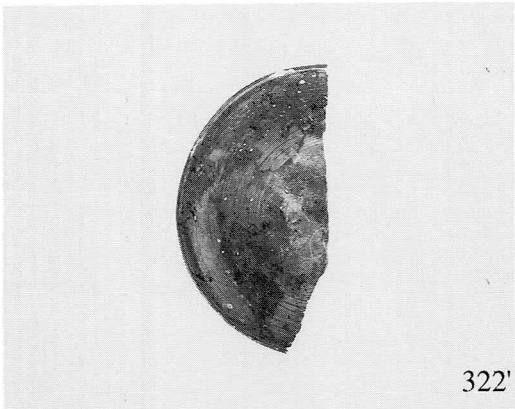
320

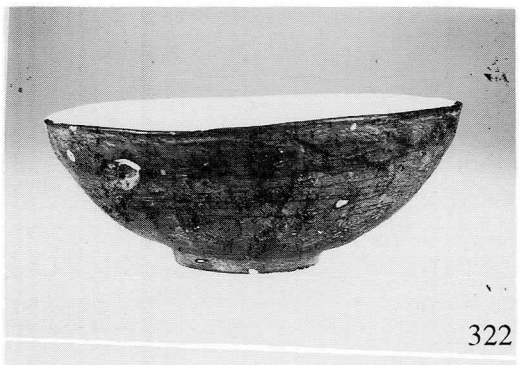

321'


323'

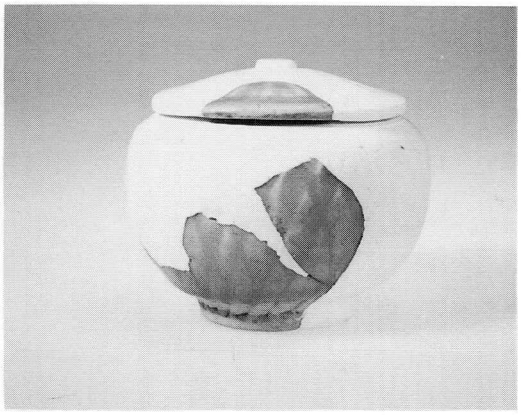
321

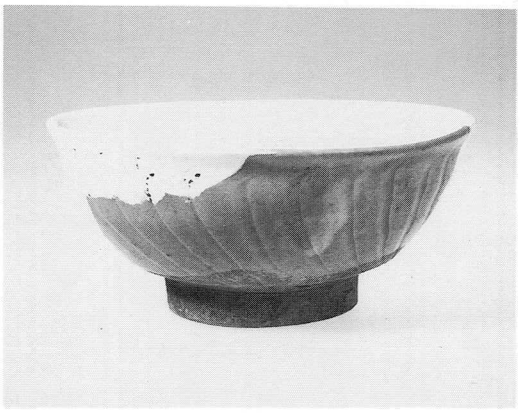
323

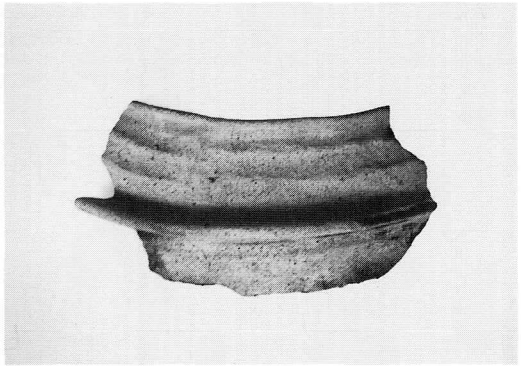

322'

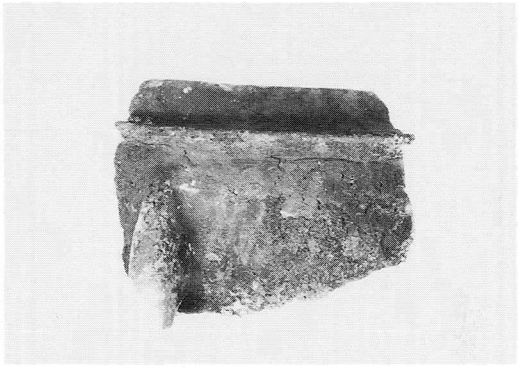

322

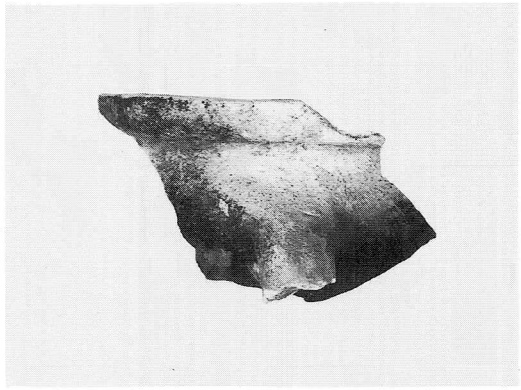
図版59　第3・第4層出土遺物（陶磁器・土師器・瓦器・石器）

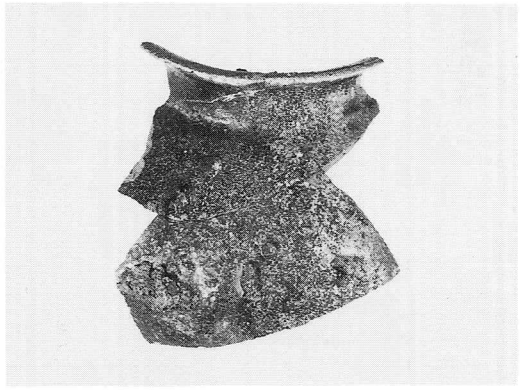


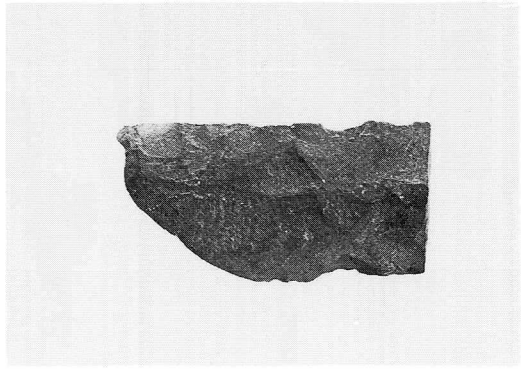


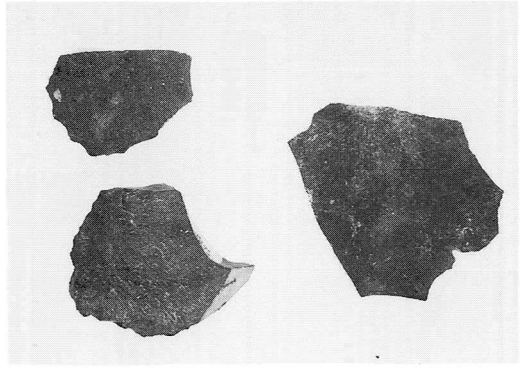


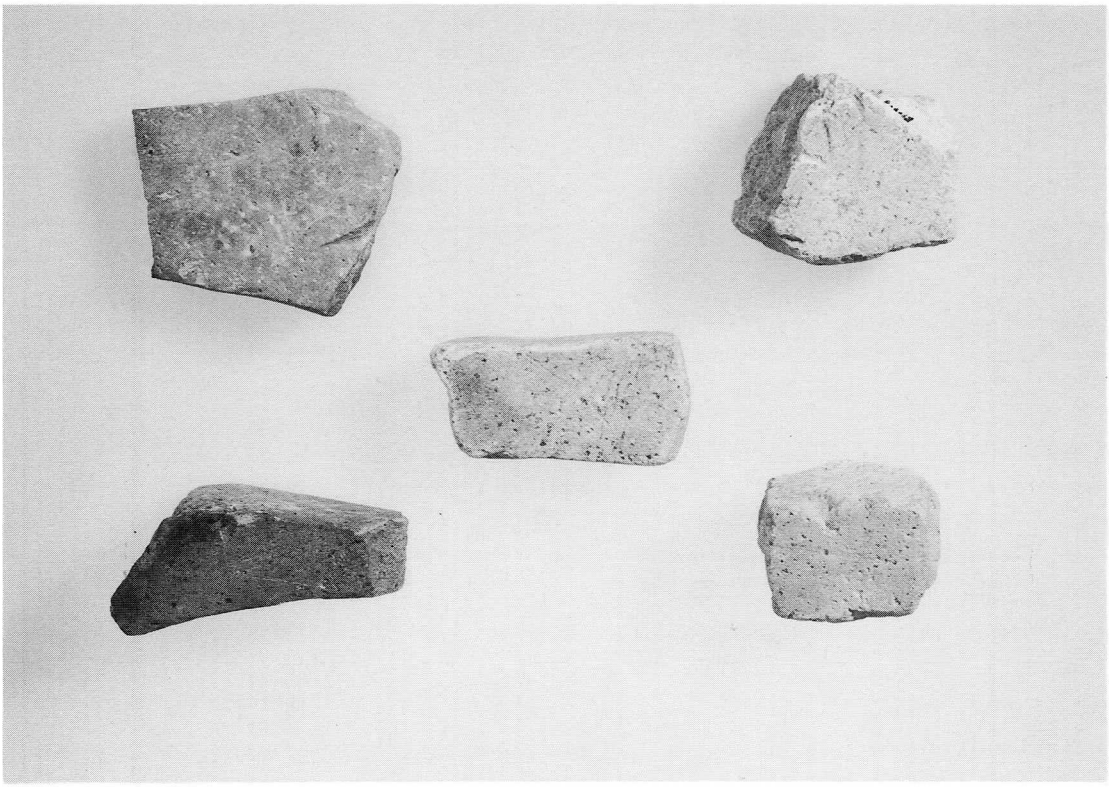




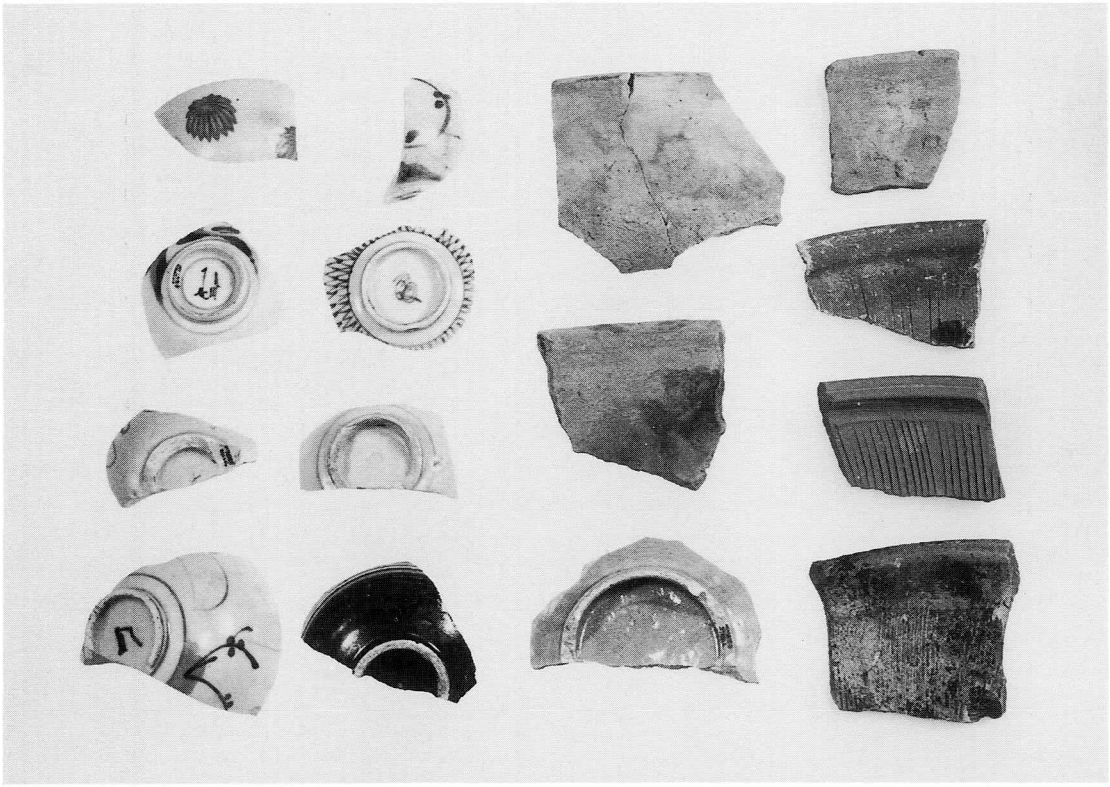






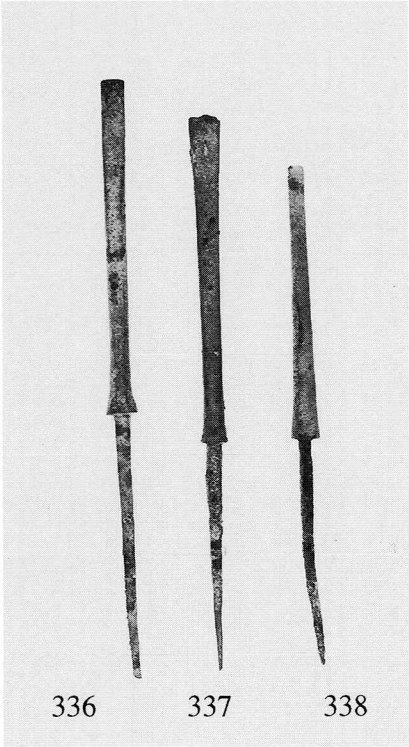


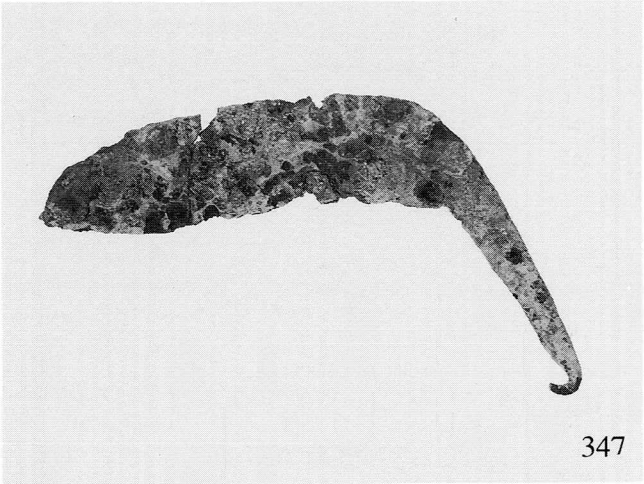
第3・第4層出土遺物（砥石）

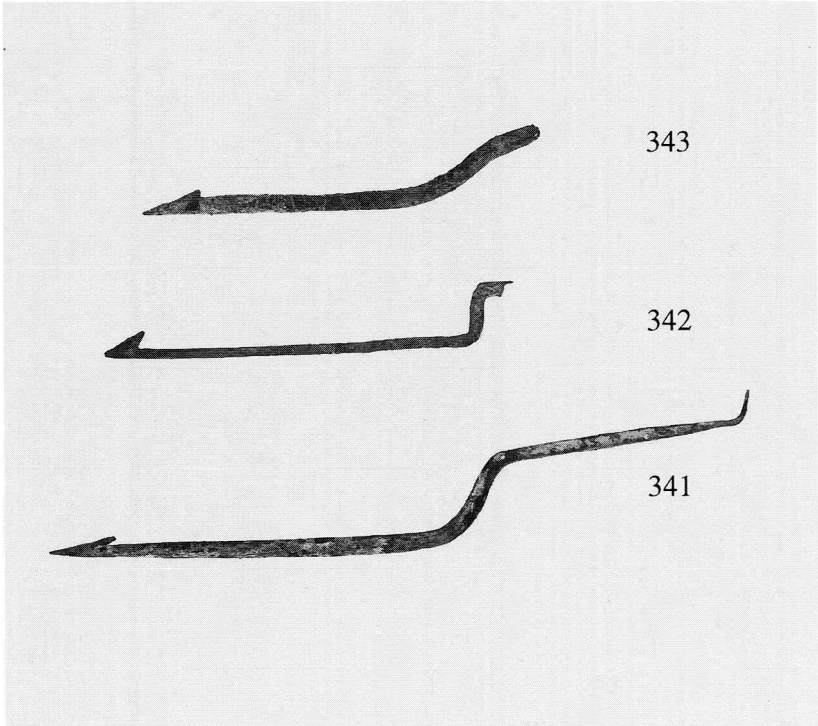


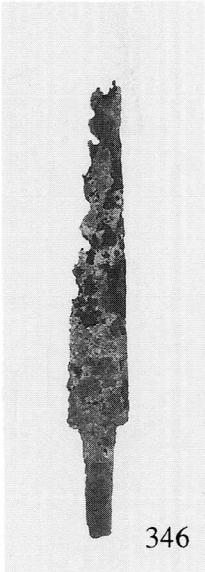
第2層出土遺物（近世陶磁器）

第3・第4層出土遺物（鉄製品）

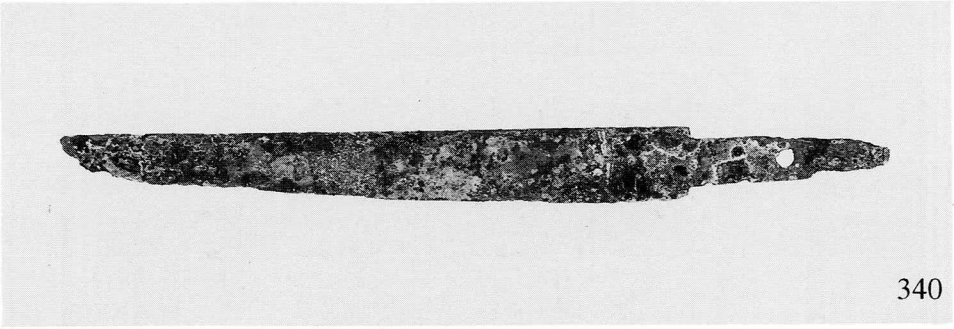


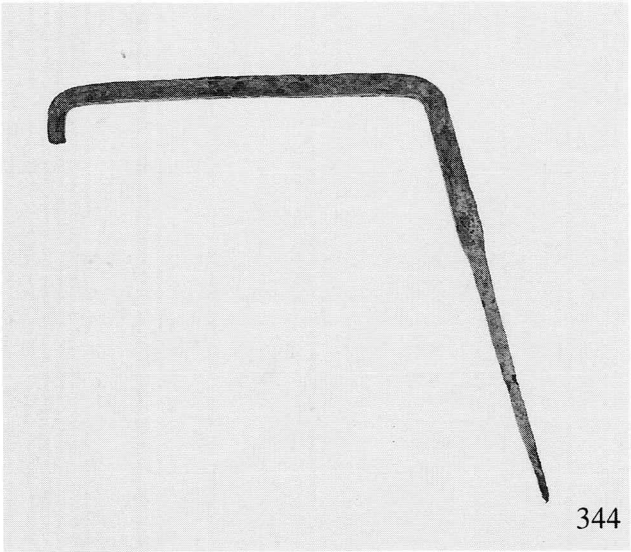


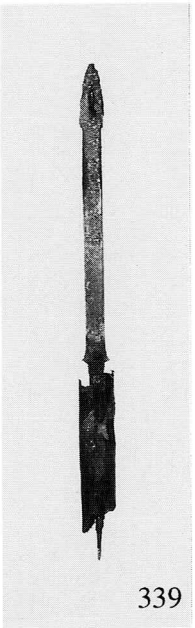


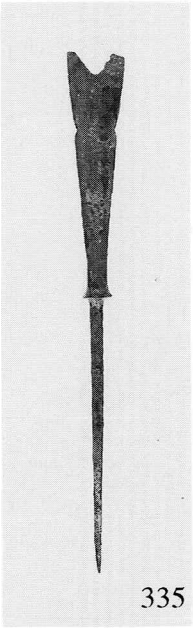


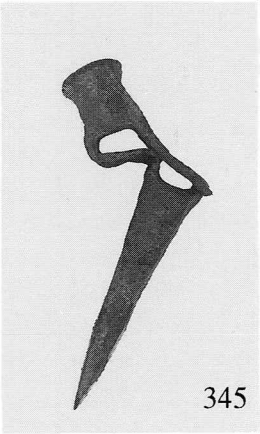
図版62　第3・第4層出土遺物（鉄製品）

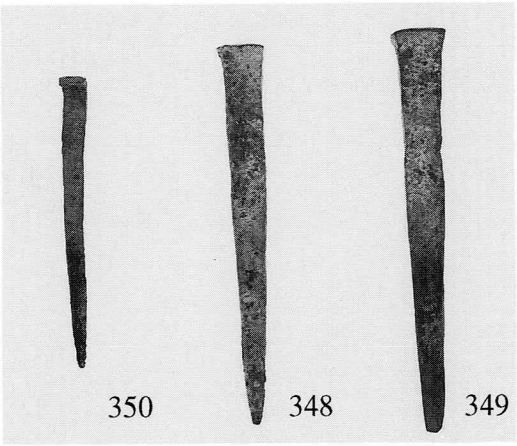












西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要

平成５年12月20日

編集　門真市教育委員会・守口市教育委員会
門真市中町1番1号
守口市京阪本通2丁目32番地

発行　松下電工株式会社

印刷　松下商業印刷株式会社
大阪府門真市大倉町16番14号